★座談会★

早稲田大学図書館

歴代館長図書館を語る

昭和六十二年十二月十九日・大隈会館

出席者

名誉教授 大野實雄

名誉教授 平田冨太郎

名誉教授 荻野三七彦

文学部教授 古川晴風

法学部教授・常任理事 濱田泰三

法学部教授・図書館長 奥島孝康

（紙上参加）

元文学部教授 洞富雄

名誉教授 加藤諄

名誉教授 小松芳喬

第一部　図書館の形成と発展

奥島（司会）　昨年十二月一日に、新しい中央図書館の地鎮祭を挙行いたしましたので、それを記念して歴代館長にお集まりいただきまして、座談会を開かせていただきます。過去を振り返りながら、今後の新しい展望を探る手掛かりにさせていただければと考えております。

本日の座談会では、まず全体を三部に分けまして、第一部では歴史をたどって、第二部では特に先生方の館長時代のお話を中心にお聞きしたいと考えております。この座談会に入る前の雑談のときの平田先生のお話ですと新中央図書館の計画は四十年くらい前からあったということでございます。そこで、第三部のほうでは、そういった一連の動きを追って、新しい図書館がどういう経過をたどって建設されることになったのかという

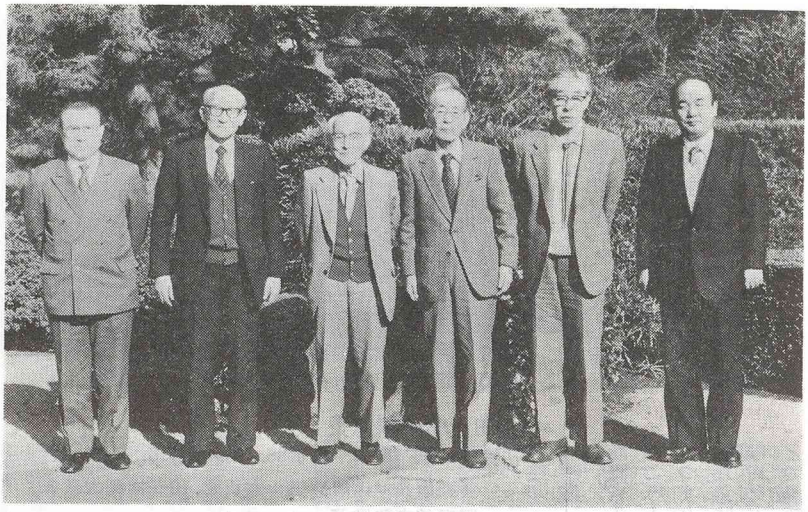
あたりを中心に、お話をうかがえればと思っています。

それでは、こうした座談会では、最近の図書館の概況をまずお話しするのが恒例のようですので、手短かにお話しさせていただきたいと思います。近く着工する新中央図書館は、規模においてはほぼ三万六千平米ということでして、現在日本の大学図書館としてはいちばん大きい関西大学図書館の二万一千平米と比べますと、二倍に近いという大変な規模の図書館です。いまわが図書館はそのためのさまざまな準備に忙殺されています。つまり、新しい図書館に移ってから、いろいろな業務やサービスの方向を考え始めていくということではなくて、完成直後からスムーズに図書館の全機能を発揮できるような準備を、いまのうちから進めておくことが必要です。そのためのさまざまな施策を摸索中というのが現状です。

新中央図書館では、全体がフリー・アクセスという思想で貫かれておりますので、いまの図書館業務のかなりの部分を占めている出納業務というような単純な作業が、ほとんどなくなるに近いところまでいくだろうと思われます。そうしますと、今後の図書館員は、もっと優れた資料を図書館に収蔵し、それを料理して利用者に充実したサービスができるような仕事のほうに業務の重心を移さねばならない。いわば今までの書庫管理的な発想から、むしろ情報提供的な発想へ転換し、資料にもっと手を加えたかたちで利用者に提供できるような方向を目指したいと考えているわけです。

そういった考え方の一環として、濱田館長の時代に、「資料影印叢書」等の発行が開始されましたし、最近では「明治期資料マイクロ化事業」に着手いたしております。これは、ご承知のように、本を開くとばらばらに壊れていくという酸性紙の問題への対策と、入手困難なこの時期の資料を広く研究者や図書館に提供するための事業であり、早稲田が中心になりまして、明治期資料の全体をマイクロ化していく。そして将来的にはそのマイクロを元にして、光ディスク等に入れて、資料の保存を図っていく。同時にできればそれを編集して利用者に利用しやすいようなかたちに変えて提供していくようなことも、将来的にはやってゆきたいと思っております。

そのほか、今回の座談会を載せます紀要につきましても、今迄は年一回の刊行でしたがそれを年二号発行の体制にいたしました。というのは、早稲田の図書館は、今後はいろいろな意味で、日本あるいは世界の図書館のなかで、重要な一翼を占めることになると思われます。ですから、そういった意味でのフォーラムの役割を、紀要に持たせるということも考えていかなければいけないと思いまして、従来通りの紀要と同時に、もっと他機関の図書館員、さらには、世界のいろいろな図書館の方々にも誌面を開放したフォーラム誌を作っていこうと企画しているからです。いずれにしても、私どもは現在の図書館をもっともっと開かれた



左より　濱田・平田・萩野・大野・古川・奥島先生

ものにしていく方向で、さまざまな新規事業を考えているところです。

また、ただ規模のみ大きな図書館ができましても、明確な収書方針なしに本を集めているのでは、わが図書館の特色が出てきません。わが図書館の個性といいますか、早稲田らしい個性をもった図書館を作りあげていくために、いまが非常に大事な時期と思われます。そこで図書館では、昨年から収書計画といいますか、蔵書構成に特色をもたせるための収書方針の策定作業を少しずつ始めています。

私のほうからのご報告としましては、そういうところが現状だということを申し上げまして、これから新しく図書館が将来に向かって発展していくために、まず来し方を振り返ってみたいと思います。そのなかで、ご出席の先生方には、これが問題であるとか、こういうことはぜひ図書館として将来とも継承していってもらいたいとかいったお考えがございましょうから、それを今日はお聞かせいただければと思っています。

それでは早速第一部のほうに入らせていただきます。まず先生方が館長をお務めになりました戦後に入る前に、一応戦前について、先生方が図書館を利用されていた時の印象等について、おうかがいしたいと思います。

最近、図書館史を書くうえで、初代図書館長はどなたかということが問題になりました。市島謙吉先生というのが通説ですが、専門学校時代にもすでに「図書館」と名乗っており、浮田和民先生が館長に任命されておられますので、これをどういうふうに考えたらよいだろうかということで、ちょっと議論したことがございます。ここに歴代室長・館長リスト

歴代室長・館長在住期間

東京専門学校図書室長

初代　今井鉄太郎　明治20. 9～22.12
2代　伊藤太一郎　〃 22.12～23. 8
3代　板屋確太郎　〃 23. 9～24. 1
4代　山沢俊夫　〃 24. 1～28. 9
5代　吉田俊雄　〃 28. 9～推測 33.3

東京専門学校図書館長

初代　浮田和民　明治33. 3～35. 8
2代　市島謙吉　〃 35. 8～35. 9

早稲田大学図書館長

初代　市島謙吉　明治35. 9～大正 6. 8
（副館長　山崎直三　大正元.10～推測大正 3）
図書館事務監督
中島半次郎　大正 6. 9. 1～ 6. 9.25
吉田東伍　大正 6. 9.26～ 7. 1.22
館長事務取扱
平沼淑郎　大正 7. 2.25～ 8. 3. 8
2代　安部磯雄　大正 8. 3. 8～12.10
3代　林　癸未夫　大正12.10～昭和22. 2
（副館長　小松芳喬　昭和20.4～22.2）
4代　岡村千曳　昭和22. 2～28. 3
館長事務取扱
久保田明光　昭和28. 3～28. 4
5代　原田　實　昭和28. 4～33.10
6代　大野實雄　昭和33.10～39. 9
（副館長　阿部敬二　昭和35. 4～37. 4
洞　富雄　昭和35. 4～39.10
加藤　諄　昭和37.11～41.10）
7代　佐々木八郎　昭和39.10～44. 3
8代　平田冨太郎　昭和44. 4～45. 7.10
9代　荻野三七彦　昭和45.7.11～45.11
10代　平田冨太郎　昭和45.11～47.11
11代　古川晴風　昭和47.11.16～57.11.15
12代　濱田泰三　昭和57.11.16～61.11.15
（副館長　成田誠之助　昭和58. 1～　）
13代　奥島孝康　昭和61.11.16～
（副館長　野口洋二　昭和62. 1～　）

がございますので、ご覧になっていただきたいと思いますが、私どもとしては、今後は、東京専門学校図書室長の初代は今井鉄太郎先生、東京専門学校図書館長の初代は浮田和民先生、それから早稲田大学になってからの図書館長の初代は市島謙吉先生ということで、通させていただこうということになりました。

つまり、いままでは、市島先生が実質的な意味で、早稲田の図書館の基礎を作られた方でありますので、初代ということでお呼びしてきたわけです。しかし、先人のご労苦をわれわれが軽々に無視するようなことがあってはいけませんので、専門学校の図書室長は今井先生、それから専門学校の図書館長は浮田先生ということで、はっきり分けて今後は呼ばせていただきたいと考えております。

今井鉄太郎先生のこと

奥島　東京専門学校の図書室のスタートは大隈家の蔵書をすべて寄贈して頂いたり、教職員がその蔵書を持ち寄ったり、また学生の団体である「同攻會」が買い集めた図書の寄托をもって「図書室」が開設され、専任は一人も置かれなかったというようなことでしたが、明治二十年には図書室長として今井鉄太郎先生が就任しておられます。初代の今井鉄太郎先生という方はどういう方だったのでしょうか。先生方はご存じありませんでしょうか。どうもはっきりした記録が残っていないようなのです。

今井鉄太郎先生

同攻會書籍目録

平田　明治二十年ということは、ぼくらが生まれる二十年前で、前任の図書館長からも直接聞いたことがありません。東京専門学校図書室という図書館の前史ですからね。初代今井先生だけでなく、二代伊藤太一郎、三代板屋確太郎先生あたりもちょっとね。四代が山沢俊夫、五代が吉田俊雄先生ですが、記録には何か残っているんですか。

編集委員　今井鉄太郎先生は、東大理科を中退された方で、明治十八年東京専門学校時代に英語普通科の講師として迎えられ、数学と英語を受持っておられたそうです。明治三十年に創立された早稲田中学にも関係し、教務幹事として事務方面を切廻されました。当時校長は大隈英麿、教頭は坪内雄蔵の両先生でした。

二代伊藤太一郎氏は事務系の方、三代板屋先生は明治二十一～二十六年に亘って、会社法・組合法を教授され、四代の山沢先生は早稲田の第一期卒業で、教員・寄宿舎長・校友会の初代幹事など種々の学校の閲歴があります。

吉田俊雄先生は明治二十九～三十二年にかけて英語の講師をしておられましたが、詳しいことはちょっと解りません。

浮田和民先生のことなど

奥島　それでは図書室時代は前史ということで、歴史家の先生がいらっしゃっても、なかなか分からないようですから……。

では東京専門学校の初代図書館長であられました浮田先生ですが、先生方も実際に授業を受けられたこともあるかと思われますので、浮田先生の思い出話から始めさせていただきます。

荻野　浮田先生は政経学部ですか。

平田　政経で政治学だったと思います。同志社から来られたんです。

荻野　文学部ではフランス革命史をや

っておられました。

平田　当時は、政治学者として代表的な方でした。

荻野　ぼくが講義を聞いた時はずいぶんご老人で、耳が遠くて学生の言うことなどほとんど聞こえないような状態でした。その講義のノートというのが、これがまた丹念に紙が貼ってあって、それを繰って話をされていました。

奥島　昭和十六年に退職なさって、二十年に八十七歳でお亡くなりになっているんです。

荻野　浮田先生に非常に接近しておられたのは、定金右源二さんです。ほとんど家庭にも入り込んで、浮田先生の書生みたいな存在だったと思います。

平田　真面目な先生で、ダジャレなんか全然分からない人だったらしいですね。先生方がからかい半分に俳句か何かをやって、浮田先生の名前の「和民」にちなんで「……こころ浮きたつセミはミンミン」とかなんとか言っても全然分からない。十日か二週間ぐらいしてから、

浮田和民先生

「あれは初めて分かった」と言われて、今度は言われたほうが面くらったそうです。お嬢さんが原安三郎さんの奥さんで、孫に有名な洋画家で浮田克躬という人がいますが、大学にある浮田先生の立派な肖像画は、その人が描いたということです。大学の庶務課に保存してあるんじゃないかな。われわれが大学にいた頃は七号館の一階の会議室に掛けてありましたが、和服に襟巻をやってる絵なんですが、あれは理工の学生の頃に描いたということですが驚きです。

荻野　教室に来られる時も、そういう姿でしたよ。

平田　それでその有名な洋画家は、小

浮田和民（うきた・かずたみ）
安政六年十二月二十八日～
昭和二十年十月二十八日

熊本洋学校を卒業後、同志社にて哲学・神学を修め、明治二十五年アメリカに渡りエール大学にて史学・政治学を学ぶ。明治二十七年帰国し、同三十年坪内逍遙の招きにより東京専門学校に迎えられ、社会学・政治学・政治史を講義した。以後昭和十六年退職するまでの四十四年の長い間、早稲田大学の発展に貢献した。進歩的自由主義者としての立場を守り高いヒューマニズムの見地から文明批評をなし、特にフランス革命史を得意とした。明治四十二年から雑誌『太陽』の主幹として活躍し、その主張は当時の学生・知識人に大きな影響を与え大正デモクラシーの先駆的役割を果した。著書に『西洋古代史』『社会学講義』等がある。図書館には明治三十三年三月東京専門学校図書館初代館長として就任し、同三十五年八月までその任に当った。

学校に行くのがいやで、そうするとおじいちゃんの浮田先生が可愛がって、庇護してくれたそうですよ。

奥島　当時の先生方というのは、たとえば浮田先生の場合は、西洋古代史とか社会学講義とかを、専門の政治学原論のほかになさっているわけですが、文人というか、非常に学問の幅が広いですね。

平田　同志社から早稲田ということでは、安部磯雄先生もそうだし大浜総長のあとの総長をなさった、ぼくらの恩師で財政学専攻だった阿部賢一先生もそうです。同志社には非常に親近感がありました。浮田先生は非常に該博な人だったんでしょうね。本が好きで、勉強家で真面目な方だったようです。

荻野　その当時は「太陽」の主筆として、論客として活躍されたんでしょうけどね。

奥島　浮田先生が館長に就任された明治三十三年という年は、早稲田で初めて図書館が作られた時ですね。

平田　正式な大学図書館のスタートは

浮田和民像

浮田　克躬

講義中の浮田和民像は昭和二十七年祖父和民の七回忌に際し完成したもので、私が二十二歳の時の制作である。今度撮影にあたり三十年振りに自作を眺め、当時のことが懐かしく思われた。祖父は小柄ではあったが日本人には珍しく彫りの深い目鼻立で、晩年原稿書きの筆を置いては毎日のようにモデルになってくれた。

そのため少年の頃の私にはまたとない得難い人物画のモチーフでもあった。

父をもたなかった私にとって祖父は父に勝る存在であったが、昭和二十年秋、私が十六歳の時八十八歳で死去した。安政に生まれ明治の初年熊本洋学校で指導者ジェンスの影響をうけ、のち創立時の同志社で新島襄の教育をうけた祖父は、昭和十六年八十三歳まで四十四年間早大の教壇に立ったが、また明治四十二年より当時の総合雑誌太陽の主幹として毎号論説をかかげ、政治学者として大正デモクラシーの先駆としての役割を果したとされているが、講義中の浮田和民像では、できる限り客観的な描写を通して祖父の生前の姿を再現したいと希ったものである。

（一水会常任委員）

（「月刊美術」八七号より）

三十五年です。

編集委員　普通にはまだ図書室と言っていたようですが、三十三年に「本校職務章程」が改正されて、名前だけは図書館と改められ、「館長を置く」と定められて浮田先生が任命されたということになったようです。

奥島　浮田先生は二年半ぐらい館長をなさいましたが、そのあと市島先生が継がれました。東京専門学校が、「早稲田大学」と改称されて、図書館も新築され、煉瓦造三階の書庫と木造二階建の閲覧室が出来て独立しました。そして、市島先生になられて、一カ月で早稲田大学図書館になったわけです。これが明治三十五年です。市島先生につきましては、もう先生方はいろいろ思い出がございましょうから、早速、市島先生のお話に移らせていただきましょうか。授業はお持ちではなかったので、謦咳に接する機会が非常に少なかったのではないかと思いますが、先生方はお見かけしたことはございませんか。昭和十九年にお亡くなりになっているのですが……。

市島先生と図書館

荻野　このリストには出てこないけれど、市島先生と坪内先生とは強いつながりがおありなのでしょうね。古川さん、

市島謙吉先生

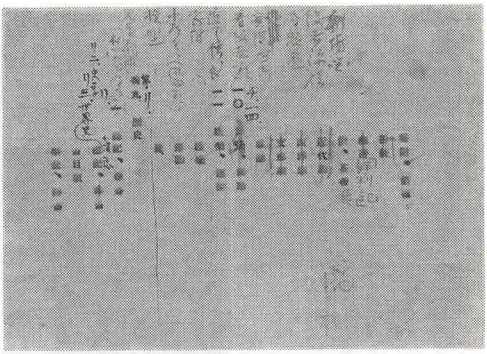
市島謙吉（いちしま・けんきち）
安政七年二月十七日～
昭和十九年四月二十一日

東京英語学校に学び、明治九年東京開成学校に入り東京大学となるやその文科に籍を置くが同十四年中退する。東大在学中、高田早苗、坪内逍遙等とともに小野梓と結び小野の主宰する鷗渡会員であった。大隈重信の改進党に入り代議士に三回当選する。郷里の新潟にて高田新聞を起し、後に新潟新聞主筆となり明治二十四年読売新聞主筆となった。東京専門学校の創設に関わり同校の大学昇格に尽力し図書館長・幹事・理事として専ら大学経営に当った。明治三十九年国書刊行会を起し尨大な未刊の珍籍を復刊した功績は大きい。明治三十五年八月東京専門学校図書館長に就任、同年九月早稲田大学と改称してからは初代早稲田大学図書館長として大正六年八月まで図書館の発展に貢献した。市島館長時代・図書館は図書の購入・目録・閲覧の方面で多様な活動をしている。この時代寄贈図書等も多く、現在国宝に指定されている「玉篇」、現在第一閲覧室に掲げてある大隈伯・歴代校長の肖像画、また現在文庫として利用されている「ゴルドン文庫」等が含まれている。春城と号しその晩年は随筆に親しみ、著書は十数巻にのぼる。

どうですか。

古川　おそらくそうだと思いますが、公には全然かかわり合いがないようですね。

編集委員　市島先生が初代館長になられたとき、図書館商議員の制度ができ、坪内先生が入っておられます。後の分類表の改訂の時には、坪内先生が書き入れをなさった「文学」のところの分類表が図書館には残っています。



坪内先生書入れの分類表

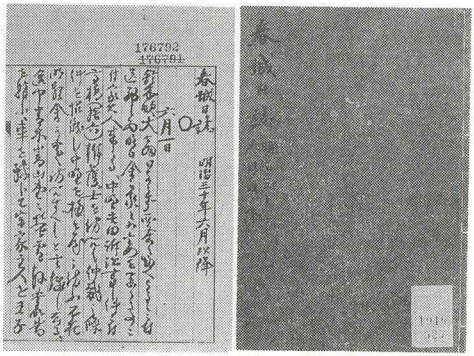
奥島　図書館建設の時には、市島先生、坪内先生が中心だったんでしょうか。

平田　話はいろいろ聞いていたけれど、直接ぼくらは謦咳には接していないなぁ。市島さんは毎日日記を克明に付けていて、それが図書館に保存されているでしょう？

編集委員　市島先生の残された『春城日誌』のうち、明治三十五年から大正六年までの館長在任期間の翻刻をおこなう計画で、今明治三十八年分を読みすすめていますが、図書館の新館建設に伴うことや、運営方針から図書の分類表のことなど、市島先生は坪内先生や高田学監に時々相談に行かれるということが日誌の中に出ております。そのほか、市島館長は上野図書館、大橋図書館、帝大図書館に出向いて、見学するなど精力的に活動していることが記されています。

坪内逍遙先生

洞　私は一度だけですが、市島先生のお宅に上ったことがあります。用件はもう忘れてしまいましたが、先生はこちらと話をしながらも、首をふりふり随筆かなにかを、毛筆で書きつづけておられました。図書館で先生の晩年まで市島家へ出入りしていたのは、宮川貞二さんでした。宮川さんは時おり先生の随筆関係の資料などを貰ってこられました。この資料はいま図書館には収蔵されていないと思います。将来、誤解がおこってはいけないので、その辺の事情をすこし申しておきます。ご承知のとおり、あの大量の市島資料は、大塚さんが事務主任の時代のことですが、坂口安吾のお兄さんで、当時新潟県議会の議長しておられた



春城日誌

坂口謙吉さんの斡旋で、少々無理をして、新潟県立図書館から譲りうけたものです。その際、新潟にあった随筆類はそのまま残し、今申したこちらにあった若干の随筆類はあちらにお譲りしました。このように記憶しております。

奥島　大野先生がずいぶん詳しくお読みになっていたというようなことをお聞きしましたが。

大野　あれを私は読ませていただいて非常に驚いたのは、市島先生が図書を選択する時に、浮田先生、坪内先生から高田早苗先生まで館長室に来て、一冊の洋書を入れるのに、三人でどうしようかと相談されている。一冊の本を選ぶのに、あんなに偉い先生方が来て、入れるかどうかということを相談されたということが書いてあるんです。ですからあのころの先生方は、大した努力をされたものだと思っています。『春城八十年の覚書』という本がありますが、あれにかなり詳しいし、それから、いま図書館の有志の方々がやっておられる春城日誌を読む会というのがありますが、全部まだ出ていないようだけれど、あれを見ると本当に頭が下がります。本を買うお金を集めたりするのに、大変な努力をされた。もっと変な話は、大隈さんのお葬式の時に、お参りに来た人たちがみんなおさい銭を投げたというので、炭俵を持ってきて、そこにおさい銭を入れてもらって、それがいつの間にかなくなってしまった。そしたら市島先生がそれをみんな図書館の地下室に持っていって、本代にしてしまった。（笑）それくらい本を買うお金を作るのに、非常な苦労をされたのでしょうね。

それから創立二十五周年の時には、文芸協会が本郷座で第二回試演会を催しましたが、四日間の興行のうち最後の一日の全収入を図書館に寄付をさせるというようなこともありました。ですから市島先生が本を集めるのにどのくらい努力されたか、本当に頭が下がります。

洞　市島先生が図書館のため蒐書に努められた話をお聞きしましたが、先生は本の寄贈をうけたり、寄附金を貰ったりすることは、じつにお上手だったようですね。うちの図書館収蔵の、国宝『礼記子本疏義』の原本、同『玉篇』の唐写本大巻、重要文化財（旧国宝）の元正倉院文書とみなされるもの十五通、それに維新志士の遺墨百五十五軸など、みんな田中青山伯から貰っ

たものです。この方にはとかくの評判が付きまとっていましたが、とにかく、うちの図書館にとっては大恩人でした。『礼記子本疏義』は、おそらく日本・中国を通じて、仏書以外のいわゆる外典としては、現存最古のものでしょう。これには光明皇后の蔵書印がおされております。田中伯がこの本の写真貼込みによる複製をつくったことを聞いた市島先生は、その寄贈方の手紙をもたせて、労務員を使に出したところ、使が帰って来て風呂敷をあけてみたら、複製でなくなんと原本そのものが出てきたのです。先生はこの本を抱いて狂喜したことでしょうが、先生ご自身では田中邸へお礼参上にうかがわなかったようです。田中伯に初対面の挨拶をしたのは、その数年後、高田早苗先生の伊豆長岡の別荘で三者会同したときだったそうですが、そのときはやくも『玉篇』をいただく約束をとりつけているのです。これは理工科をつくるための寄附金募集に京都へ行かれたときの話だったと思いますが、西本願門主の大谷光瑞が、先生に向って、坊主丸もうけというが、うちでも、貰い上手のあなたのような人が欲しいものだと冗談を言われたそうです。

旧図書館の状況

奥島　現在、日本の出版点数は一般流通のものでだいたい三万四、五千ぐらいといわれているようですが（昭和六十二年度の国立国会図書館納本冊数は六万弱）、早稲田はそのうちの一万五千点ぐらいを受け入れています。ところが、早大図書館では、明治四十年代ぐらいまでは、毎年一万点を超える本が入れられていたわけですが、当時の出版状況から考えてみますと、これは大変なことです。市島先生は三十五年に就任されますが、その年に、図書館が木造二階建のものから、書庫三階建で五十四坪の新館ができました。これについては写真は残っていますが、先生方はその図書館に関する思い出はございませんか。ご覧になったことはございますよね。

晩年の石井藤五郎氏

大野　利用しました。ただ石井藤五郎という館外貸出係の方がいて、いつもかすりの着物を着ておられまして、怖い人だなと思いました。何か逸話があると思いますが、あの先生はよく覚えています。

編集委員　石井氏は職員の最古参の一人で図書館が大講堂の中にあるときから、幹事田原栄氏の下で、図書室を管理して館長と事務員を兼ねていました。閲覧者の面倒をみて三十余年、図書館のためにその一生を捧げたと言えます。大正十四年に新図書館が建設されたとき、その準備に奮闘し、開館の直前、八月に病に倒れて逝去されました。葬儀には高田総長も参列し弔辞をのべています。

奥島　建物の中の雰囲気等はどういう感じだったんですか。

大野　書庫は赤レンガでしたが閲覧室は木造の二階建で、そこはよく行きました。

奥島　書庫が五十四坪、閲覧室が百二十五坪、収容が五百人ということで、かなり大きいものでしたね。

大野　昔の法学部があった建物のすぐ隣に、図書館の閲覧室がありました。

奥島　現在の一号館のことですか。

大野　どこになるんですかね。

平田　政経学部のあたりでしょう。

大野　そうです。

平田　いまの七号館は赤レンガの恩賜館でしたからね。そこのそばだったと思います。写真で見ると、赤レンガは書庫だけで、あとは木造だったと思います。

大野　法学部の教室があって、そのすぐ隣に書庫があって、それから閲覧室が続いていました。もちろん閲覧室は木造でしたが、あそこには思い出があります。

中島半次郎先生

現図書館の完成の頃

奥島　結局お話は早稲田大学図書館になって、そして大正十四年に現在の建物ができてからということになりますね。それではそのあたりから詳しくお話して頂きます。

平田　ぼくらは大正末期ですが、大野先生が十二、三年で、私は十五年です。それからですからね。図書館の赤レンガは残っていたかもしれないですね。

洞　赤レンガの書庫は昭和七、八年ころ本部の建物が建築されるまで、図書館の学生入口の真向うに残っておりまして、一部の雑誌と新聞の収蔵庫につかっていました。これをとりこわし

中島半次郎（なかじま・はんじろう）

明治四年十二月二十三日～大正十五年十二月二十日

明治二十七年東京専門学校文科を卒業する。卒業と同時に『教育時論』の記者となり、『教育壇』の編集にも携わった。明治三十三年早大教授になり晩年まで教育学の講義を行った。ドイツ留学（明治四十三～大正九）で研究したオイケン哲学に基づく人格的教育学の思想をとりいれ日本の教育の革新を説いた。高等師範部長、第一高等学院長など要職を歴任し学校経営面にも貢献した。また文部省中等教員検定委員、帝国教育会役員なども歴任している。市島館長辞任後、図書館事務監督（館長代理）となるが、その任期は大正六年九月一日から同月二十五日までと短かった。

た時、新聞は村山実さんに私が手伝い、ホールで再整理して、みんなで政経学部新校舎の屋根裏に上げたのですが、これはなかなかの力仕事で大へんでした。

奥島　ここのなかでは大野先生がいちばんご年長でいらっしゃいますか。

大野　ええ、年齢だけはね。(笑)

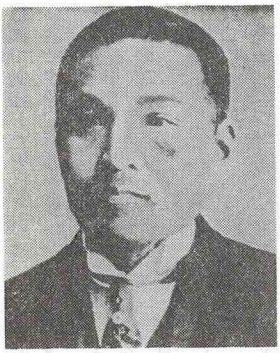
奥島　荻野先生と大野先生では、高等学院にお入りになったのはどちらが先ですか。

大野　私は昭和五年卒業ですから、荻野先生のほうが一年先輩です。

荻野　図書館は私の生涯で大変にお世話になったところです。だからその意味で、図書館は私にとっても貴重な存在なんです。

奥島　建設当時のことはご存じですか。

荻野　そのころは大学に関係がなかったんです。東大の史料編纂所というところにおりまして、早稲田にはあまりご縁がありませんでした。



吉田東伍先生

奥島　それでは、大野先生は高等学院の学生として、ずっとご覧になっていたわけですか。

大野　あのころ図書館、大隈講堂、演博などが続いてできたんです。

奥島　ちょうど新しい図書館ができたころからについては、わりあい歴史がはっきりしてきているわけですが、当時の先生方が、学生時代にご利用になった図書館の雰囲気や状況について、少しずつお話ししていただけませんでしょうか。新しい図書館が開館されたころというのは、いかがでしたでしょうか。

大野　私はあまり利用しなかったで

吉田東伍（よしだ・とうご）
元治元年四月十四日～
大正七年一月二十二日
明治十年新潟県英語学校中退後、小学校教員、郵便局員をつとめながら独学で日本史を学び広い学識を養った。明治二十五年読売新聞に入社する。同二十七年『徳川政教考』を発表して学界を驚かせた。明治三十四年市島謙吉推薦により東京専門学校講師となり、国史、日本地誌などを講義した。図書館には少しはやく明治二十五年九月にやはり市島の縁で館員（事務主任）として入り、大正六年九月より同七年一月二十二日死去するまで図書館事務監督（館長代理）としてつとめた。吉田東伍は学歴こそないがその学識の深さは高く評価され明治四十二年文学博士となった。また十三年間にわたって刊行を続けた『大日本地名辞書』（明治四十一年完成）は不朽の名著である。この完成を機に自筆原稿（後に28×25詰原稿用紙50～60枚づつ四百冊に製本）が図書館に寄贈され今も特別資料係に保存されている。

す。ただ高等文官試験を受ける連中が、あそこの図書館に必ず座っていました。

奥島　しかし、先生も三年生で行政科に合格され、四年生で司法科を合格されていますね。

大野　学校にはあまり行かなかったですから……。（笑）

荻野　司法試験と図書館とは密接な関係がありますが、大野先生のころはそういうことはなかったのですか。

大野　図書館にいりびたって勉強した人が多かったですね。これはまったく私個人の問題ですが、高等文官の試験を受けた時に、上杉慎吉という先生が東大で憲法を教えておられました。美濃部さんと対立していて、その先生が試験委員だというので、本を買って勉強したんです。そしたらその先生が急に亡くなってしまった。それで口述試験などの時に困ると思っていたら、清水澄という先生が後任になったので、これはいまさら本を買っても馬鹿馬鹿しいと思って図書館に入って清水さんの憲法の本を二日ばかり読んだことを覚えています。あの時は図書館をうんと利用させてもらって、ありがたかったです。

平沼淑郎先生

戦後その清水さんが、国体が変わったからということで、熱海で投身自殺をされましたが、そういう方でした。私が図書館で勉強したというのは、お恥ずかしい話ですが、そのくらいのもんです。

安部磯雄先生のこと

奥島　それではこのあたりは少しとんとんと進ませていただきますが、二代目の安部磯雄先生についての思い出等はいかがでしょうか。

平田　私が政経の学生の時に、安部先

平沼淑郎（ひらぬま・よしろう）
元治一年二月七日～昭和十三年八月十四日
明治十七年東京大学文学部政治学理財科を卒業する。大阪市助役、大阪高等商業学校長等を歴任し、明治三十七年大隈重信の請いに応じて早稲田大学に奉職し、商業史・経済史等を講義した。後に理事・学長（第三代、大正七～大正十）等に就任し、新大学令による教科組織改正の大変動時をのりきり大学の基礎を築いた。大正十二年から昭和十三年まで商学部長として同学部発展のために尽力し「商学部の父」といわれている。図書館には大正七年二月から同八年三月まで館長事務取扱（館長代理）としてつとめた。主な著書に『近世寺院門前町の研究』等がある。なお平沼騏一郎元首相は実弟である。

生は教壇に立っておられました。私は直接授業は受けなかったのですが、一年上の連中が安部先生からアメリカのカーバーという人の経済学の英書講読の授業をうけていて、時間通りにきちんと出てきて、きちっとやめる。そして授業中何か私語をしたりしているとやかましかったそうです。ほとんど教科書を暗記しているようだと上の連中が言っていました。ぼくらは、あの謹厳なスタイルで本を抱えて歩いているのをよく校庭で見ましたけどね。亡くなる頃はそこの大曲の同潤会のアパートに住んでおられて。教授でありながら、社会運動もやっておられました。

大野　社会民衆党か何かの総裁になられましたね。

平田　党首でして、大学の教授をやりながら党首を兼ねるというのは、いろいろ問題があったようです。

編集委員　党首になった翌昭和二年一月教授を辞任、講師となっています。大山郁夫先生も辞任されています。

安部磯雄先生

奥島　フランスでは現在でも普通のことなんですけどね。

平田　早稲田の先生でありながら、そういう方面で安部磯雄先生というのは非常に有名でした。

大野　シドニー・ウェップの本か何かを読んでおられましたよ。

平田　そうでしょうね。社会運動の先駆者ですからね。

奥島　昭和二年に早稲田大学教授を退職なさっておりますので、ちょうど大野先生が法学部にお入りになったころでしょうか。

大野　いいえ、それはもっとあとでしょう。

安部磯雄（あべ・いそお）
慶応元年二月四日～昭和二十四年二月十日
明治十七年同志社を卒業、同二十四年渡米、ハートフォード神学校に学び同二十七年卒業する。その後キリスト教社会主義者となって欧州を巡り明治二十八年帰国する。同志社の牧師を経て明治三十二年東京専門学校講師となり、英語・倫理・地理・社会政策を講義する。一方、社会主義協会、社会民主党の結成においては指導的役割を演じた。昭和二年早大教授を辞任。以後政界において活躍するが昭和十五年勤労国民党が結社禁止令に抵触すると退くに至った。戦後は日本社会党顧問となった。「安部リソオ」とも呼ばれた高い理想の持主でその実践者であった。図書館長としては大正八年三月から同十二年十月までつとめた。安部磯雄は早大野球部の初代部長であり、新図書館がその名を冠した安部球場跡に建設されるのも、浅からぬ因縁と思われる。

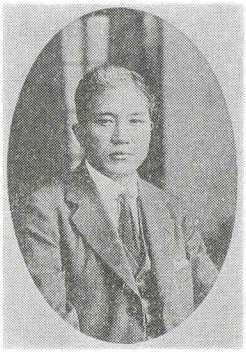
林　癸未夫館長の時代

奥島　そうしますと、まだこのあたりも先史に属しますか。それでは三代目の林癸未夫先生のころからが、よくご存じの時代というわけでございますね。

平田　林先生の時代になると皆知っています。

奥島　それでは林先生について、どうぞお聞かせください。今日はご欠席ですが、副館長をなさっておりましたので、誌上参加によって小松芳喬先生にもいろいろ思い出話をしていただきたいと思っております。

平田　小松さんは昭和二十年四月からですね。林先生が館長をやっていながら常任理事で総長代行みたいな役割が忙しいので、小松さんが副館長をやられた。副館長の制度というのは、きちんとあったんでしょうね。林先生の前に、市島さんの時も副館長を置いています。それから大野先生の時も副館長を活用されているようだし、佐々木八郎先生の時も加藤さんが副館長でした。副館長制度というのは、最近はどうなんでしょうか。



林癸未夫先生

加藤　私は、大野先生と佐々木先生のお二人の館長の時に副館長を勤めました。昭和三十五年に大野先生が館員でもあった阿部敬二さんと洞富雄さんを副館長に任命されたのです。

そして阿部さんが三十七年に現職のままおなくなりになりました。そのあと私が副館長になり、大野先生の任期一杯と、佐々木先生の任期の途中まで館務にたずさわったわけです。

奥島　いまも二人置いています。

平田　ぼくらの時はなかった。ちゃんと制度としてあるんでしょうか。

古川　置くことができるということで、置いても置かなくてもいいんです。

林癸未夫（はやし・きみお）

明治十六年九月十七日～昭和二十二年十月二十六日

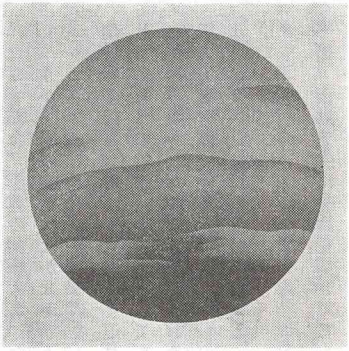
明治三十八年本学法学部卒。経済学博士。大学卒業後古河鉱業に入社、大正九年には欧米に留学。翌十年から本学で教鞭をとり、同十二年政治経済学部教授。社会政策、工業経済学、経済政策等の講義を担当。『社会政策新原理』随筆『天邪鬼』等を著す。同学部長、常任理事を歴任。昭和二十一年には総長代理となる。館長は大正十二年十月～昭和二十二年二月の二十四年間の長きに亘り、歴代最長。関東大震災直後の十月に就任、市島謙吉、坪内雄蔵、浮田和民の三氏を顧問に迎え、図書館新築に尽力。和洋書の分類改訂、閲覧規則の改正、図書館一覧、和漢・洋・雑誌目録の刊行を進めた。その間に国宝指定、各種文庫の受け入れ等蔵書も拡充された。戦火の激しくなった昭和二十年四月小松芳喬教授を副館長に嘱任。六月に図書疎開を開始した。震災から戦中戦後の最も困難な時代に図書館の整備・拡充に努めた。

平田　私は昭和二年に学部に入って、六年に卒業したのですが、大学院に残って、ちょうど林先生が社会政策を担当されていまして、私は社会政策を専攻するようになった。その後ずっと政経に残ってしまったのですが、その時に図書館長をやっていましたよ。大学院の指導は、図書館長室の隣の応接室、いまは事務所（または洋書係）が使っていると思いますが、元はあそこが応接室で、そこでやられました。吹抜けで、職員が仕事をしていると、怒られたりするのがみな聞こえるんですよ。（笑）中村代仁君なんか、「今日もまた怒られてましたね」なんてね。やかましくて、とてもいかめしい先生で、カミナリおやじみたいなところがありました。ずいぶん長いこと館長をやっていたんじゃないですか。

奥島　大正十二年から昭和二十二年まで二十四年間です。

洞　私も大目玉をくったことが二度あります。大東亜戦争がはじまった日なんですが、ラジオを事務室に入れて、皆で戦況報道をきいていたところ、外から入ってきた館長が、この有様を見て、たいへん怒り、事務主任をどなりつけたことがありました。なにしろたいへんなワンマン館長でした。

平田　ぼくは大正十五年に早稲田第二高等学院に入ったのだけれど、新図書館ができたのが大正十四年なんですね。ぼくが図書館に行っていちばん印象が深いのは、やっぱりあそこのホールの正面階段の上にある大観と観山の「明暗」のあの円い画ですね。あれはもう国宝になっているんでしょうか。あれが非常に印象的でした。それから貸出のカウンターのところに行くと、ぞうりを履いた出納手が書庫へバタバタと行って、なかなか帰ってこない場合があったりしてね。それで村山金五さんというやかましいひとがいて、あの人は、ぼくらが学生当時からいました。それで閲覧室に行くと、ちょっと厳粛な気持ちになって、少し落ち着いて本を読めるという感じでね。当時早稲田はガヤガヤしていましたが、図書館だけは別の雰囲気がありました。



壁画「明暗」横山大観・下村観山画

奥島　それは林先生という人のキャラクターのようなものが、図書館に反映したというようなことだったのでしょうか。

平田　おそらく買う本は全部図書館長が目を通したのではないですか。

大野　そうらしいですね。

平田　各学部がそれぞれの予算で買う本は別として、洋書にしても館長が一冊一冊目を通していたようです。いまも買う洋書を館長が見ますか。ぼくらも見なかったけれど、林先生は図書館で買う本

は全部自分で決定していましたね。

奥島　そうしますと、二十四年間館長をなさったということは、市島先生が十五年間ですから、これは大変な年数だったわけです。本がお好きだったんですね。

平田　ずいぶん几帳面な先生だったんでしょうね。法学部の寺尾元彦先生とか遊佐慶夫先生とか、それから文学部では西村真次先生なども、図書館で買う本は館長のところへ直訴して許可を得ないと買えない。遊佐先生のローマ法の本にしても、全部館長の許可がないと買えない。それでだいたいが館長室に出入りしていました。

奥島　市島先生、林先生という方は、自分でそういうことを全部なさったんですね。

洞　本の購入を決定するばかりか、その分類まで自分でやられた。納得のいかない分類をされていた場合など、そっと直しておくのですが、それが見つかると、これはまたたいへんなことになりました。予算の関係もあったでしょうが、本の選択はなかなかうるさかった。たとえば、加茂儀一訳の『栽培植物の起原』という大冊など返品されてしまうのです。私はどうしてもこれが読みたかったので、おそるおそる購入方をお願いすると、こんなものがなぜ必要かとただしながらしぶしぶ許してくれました。

平田　市島先生は身銭を切ってでも本を集めたりされておられたようでしたが、あの人が基礎を築いたのでしょうね。安部先生は外の活動が忙しかったと思いますが、林先生はきちっとしていました。やかましくてね。

奥島　林先生につきましては、学問的な分野からいきますと、いまでいう産業組織論みたいなこととか、経済政策などをなさったようですが、そうしますとやはり政経学部の教授ですか。

平田　ええ。最初、古河鉱業にいらっしゃって、昆田文二郎氏が中にたって大正十年に講師として早稲田に迎え、十二年に教授になられました。当時の総長田中穂積先生のお考えで、あの当時、外にいるめぼしい卒業生を教員に引き入れたなかの一人だったんでしょうね。それで社会政策を教えておられました。例の「早稲田騒動」があったりして、人材がだいぶ外に出たための補充もあったのでしょう。それで古河から大正九～十年に欧米に留学しています。早稲田から留学したわけではないんですがね。大学に来られたのは三十八歳の時でしょう？

洞　初期の留学には、みなスポンサーがいたようです。ですから人によって大学からの支給額がまちまちで、相当ちがっていました。『半世紀の早稲田』が編さんされるとき、館務のかたわら担当者の西村真次先生のお手伝いをさせられたのですが、その際、恩賜館の屋根裏に収蔵されていた古い校史資料をリスト・アップしました。中に留学費支給帳がありまして、それを見たところ、島村抱月がトップでした。そのとき調べた資料群は空襲で全部烏有に帰したものと思っておりましたと

ころ、津田左右吉先生の成績表などの綴りは、いま学籍課に保存されておることを知りましたので、一部が助かっていることは事実です。庶務か教務のO・Bのうちには、あの資料群はどうなったのかご存じの方がおいでしょうから、いまのうちにお聞きしておく必要がございましょう。私のつくった資料のカード目録は図書館に置いてあったのですが、いつか行方不明になってしまいました。これはお笑いぐさですが、本ができあがった後で、大島庶務幹事の自宅に呼ばれ、これは煙草代だがといって、金二十円頂戴しました。ほんとうに煙草代でした。

奥島　林先生が戦後までずっと館長をお続けになっています。

平田　昭和二十二年、館長を退いてすぐに六十四歳で亡くなりましたからね。みんな当時は早い人で四十代、五十代でだいたいが亡くなっています。もともと早稲田大学は、薄給で担当時間は多いし……。(笑)ともかくぼくらだって、助手時代は無給ですからね。

ぼくが昭和十一年に学部の助手になった時、政経学部の中庭に胸像がありますが、あの塩沢昌貞先生が、「学部の助手になったから、田中総長のところに挨拶に行ってこい」と言うんですよ。行くのがいやでね。それでもうなくなった杉山清助手と二人で総長室に行ったのですが、いまの政経学部の二階の大隈さんの銅像寄りの角が総長室で、廊下にちゃんとボーイが付いて案内してくれる。田中先生が、「まぁお座りください」と言う。そしたら開口一番、「国立大学の諸君と競争するには睡眠時間を短かくしなければいけませんよ。リクリエーションなどはもってのほかです」とやられてしまった。いまの助手諸君だったら、「何をおっしゃいますか。無給でいて、そんなことは人権蹂躙じゃないか」と食ってかかるでしょうね。

給与表なんて何もないんだから……。総長のお気に入りのほうが月給が高い、理工学部の連中は高い、そういう時代です。いまはきちっとしていますけどね。

奥島　私たちも学部時代に、法学部の教授で定年まで勤められる者はいないんだという話をよく聞きましたが、たしか大浜信泉先生が定年を迎えられた法学部の最初の先生ですね。

平田　そうです。草創のころですからね。早稲田大学もあのころはね。全部総長がきめたんです。それで経理も人事部も、総長が全部せっせとやっていました。その頃、後に図書館長になられた岡村千曳さんは教務部にいたんです。そういう少数のころでしたから、本当に先輩の連中は安月給でやってました。ぼくらは骨を預けて安月給で、先輩もみんなそれですよ、だから政治学をやっていた高橋清吾先生なんて四十七、八歳でなくなったですよ。だいたい五十代でおしまいです。いま名誉教授は百十余名いますが、七十歳以上まで長生きするのは昔はほとんどいなかった。

奥島　私が大学院の学生のころに、よく大野先生にお話を聞きましたが、先生も助手に残らないかと言われたのです

が、無給の助手ではとてもやっていけない、とお断りになられましたとのことでしたが……。

平田　国立大学に追いつけ追い越せでやってきて、それでやっと何とかなって、いま若い連中はよくなりましたよ。昔はむちゃくちゃだね。

戦後の岡村千曳館長のころ

奥島　いままでのところは、戦前のことですが、これから戦後の第一期に移ります。戦後、図書館長は公選になり、岡村千曳先生が館長に選ばれました。あの当時は、たとえば学院長なども公選のようですね。

古川　学院長はそうでした。

奥島　票集めでだいぶ皆さんが駆けずり回ったという話を聞いています。図書館長の公選はどういうものだったか、あまり詳しいことは分からないのです。ただ、小松先生のお話によれば、図書館は学部とは違うから、直接図書館に関係・関心のある人を選べるように、と館員からも吉村正理事に意見を上申した、と聞いていますが。あのころは教授の数が極端に少なかったですからね。

岡村千曳先生

編集委員　小松先生のお話のなかにあるのですが、選挙権を館員とか職員まで広げたいということを、総長に答申したということです。でもそれを蹴られて、やはり教員だけの投票になったということをお書きになっています。

洞　図書館協議員の教員に館長が加わったくらいの小人数で選んだと思います。原田先生はたしかに選挙による館長でしたが、岡村先生のときは任命ではなかったでしょうか。

奥島　岡村先生のご子息（岡村眞楯元教授）が法学部の教授をなさっておられ

岡村千曳（おかむら・ちびき）
明治十五年二月一日～
昭和三十九年五月五日
明治三十九年本学文学部卒。英文学。大正六年本学高等予備科講師、同九年高等学院教授。戦時中学校経営に尽力するが、昭和二十年四月教員の人員整理のため辞職。戦後まもなく高等学院長として復職。昭和二十四年から文学部教授、同二十八年定年退職。長く高等学院の英語教育に従事。著書に『紅毛文化史話』がある。昭和二十二年二月図書館長に公選され、同二十八年三月まで在任。その間に、司書を嘱任、図書館規則を改正して事務機構を整えると共に、一次資料となる洋学資料や対英外交文書等の貴重書を多数収集し、同時に、馬琴展、特別図書展、大隈記念祭展等の展覧会を毎年二～三回開催して蔵書の公開をはかった。また、昭和二十五年四月に館内に大隈研究室を設け大隈文書の整理を行ない目録を刊行した。さらに、視聴覚資料としてレコードの収集に着手、図書館月報を創刊する等新制大学の図書館の姿を整えた。

て、もう定年退職なさいましたが、やはり英文学をおやりになっていました。岡村先生は六年間館長なさっておりますので、かなり長い間戦後の復興期を担われた館長でありますが、先生方は思い出はございませんでしょうか。

荻野　岡村先生はお宅が焼けてしまって、戦後、図書館の地下室に生活しておられたそうです。やはり献身的に図書館の館長をやっておられたんじゃないですか。

奥島　当時、学内で生活されていた方というのは、他にもいらっしゃるようですね。法学部の亡くなった林義雄先生もそうだったと聞いております。

荻野　ちょいちょいあるようですが、とにかく岡村先生は、労務員と一緒に図書館の宿直室に暮らしておられたようです。

洞　当時は、職員が一人、労務員が一人、宿直していたのです。岡村先生は職員の宿直室に御子息の真楯さんと寝起きされていたのですが、後に甘泉園の建物に移られました。

古川　館長としての岡村先生とはそれほど接触はないのですが、ぼくらが学生の時には岡村先生は教務幹事というお仕事をしておられました。現在の教務部長みたいなものです。当時は系列のうえでいうと、むしろ職員だったんです。それで文学部では講師のかたちで英文科の授業を持っておられました。ぼくらはイギリスの随筆を習ったんですが、さらに卒論の指導が岡村先生でした。そういう意味では、ずいぶんお世話になっていました。

戦争になって、多くの先生方の首を切ったわけですが、教務幹事である岡村先生はその直接の責任者だったんです。それで自分だけ残るのは潔ぎよしとしないということでお辞めになり、郷里に引っ込まれた。確か信州の高遠だったと思いますが、ところが戦争が終わって大学が元に戻るというので、急遽呼び戻されて帰ってこられた。そして第一高等学院、第二高等学院の兼務で院長になられたんです。ぼくは戦争が終わった翌年に学院の教師として呼ばれたのですが、岡村先生が院長の時です。

その当時は、いまの十四号館に第一学院と第二学院が同居していましたが、あそこの階段の下に二坪ぐらいの小さなところがありまして、そこに先生が住んでおられた。図書館の地下に入られる前です。そのころ皆さん遠いところから通ってくるか、あるいはそういう住まいでしょう。たまたまぼくは自分の家は焼けなかったし、しかも女子大の近くというすぐそばで、学院ではいちばん若いわけです。それで入学試験の時に、「おまえは二人分採点しろ」と言われましてね。

それで、いくらなんでも二人分は大変だということで、岡村先生の住んでおられたところを利用させて戴きました。たいていみんな遠いですから、わりと早くやめて家に帰るわけです。ぼくは歩いて帰れるということで、岡村先生の住んでいる階段の踊り場の下のところの地下室で、こたつにあたりながら、先生と向か

い合いで夜中の三時か四時ごろまで採点をやっていましたよ。そうすると先生は話好きだから、すぐにいろんな話をされるので、ちっとも採点が進まなかった。（笑）そういう思い出があります。

奥島　岡村先生は単身でそこにお住まいだったんですか。

古川　そうです。学生時代に随筆を習ったのですが、先生はまさに随筆的な人柄なんです。だから話すものがみんな随筆になっているわけです。面白かったけれど、二人分を採点するのには、あの話にはずいぶん悩まされたという思い出があります。

荻野　現在になってみると、岡村先生が図書館に寄与されたのは、館長の仕事以外に、勝俣銓吉郎さんの旧蔵書などと一緒に紅毛物を集めて洋学文庫の基礎をつくられたことがありますね。

古川　あれを買ったのは館長時代ですよね。

奥島　いまの図書館の善本といわれるものは、市島先生がお集めになったもの以外は、岡村先生の時代に基礎が築かれたといわれています。

勝俣銓吉郎氏

荻野　とにかく勝俣さんと岡村さんの収集品というのは、大したものですね。

平田　岡村先生は専門の関係ということで、自分の趣味というわけではないのでしょうが、洋学関係に重点を置いて、熱心にあつめておられた。私などからみると偏していないかと思うぐらいでした。しかし、資料としては一級で、他の追随を許さぬものだから、私が館長の時、四十六年ですが、勝俣先生とか岡村先生、大槻家などの洋学関係の資料を、なにかきちっとまとめておこうじゃないかということで洋学文庫というものを作った。その下地を岡村先生が作られた。他所目にはなにか図書館長が自分の趣味か専攻みたいにして、偏しているのではないかとさえ思われるほどであったけれど、当時は資料が海外に流れるときではあるし、これをくいとめるのは今でいう使命感のようなものもおありだったようだ。洋学関係に相当造詣が深かったんでしょうね。そういう感じを受けるくらい、熱心な集め方でしたね。だからいま洋学関係では、相当なもんじゃないですか。

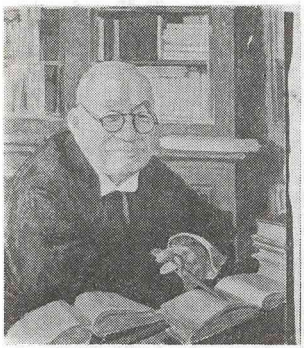
奥島　それがいま早稲田大学の図書館の特色の一つになっています。

荻野　岡村・勝俣両先生の収集された洋学関係図書がこの図書館の特色であることの事実として付言しておきたいことは、先年ソ連アカデミー会員の故コンスタンチノーフさんが態々大黒屋光太夫資料の閲覧に来て、故高野明さんの案内で充分に観たと満足していました。彼は光太夫の研究家として著名でありましたが、青年時代にはこの学園に留学して私

とは親しい学友関係でありました。海外にもこのように聞える洋学図書というべきでありましょう。

小寺文庫のこと

平田　岡村先生は洋学関係が詳しいから洋学関係を蒐められた。館長はその時どきでその専門とするところをあつめたらよいと思う。それで林癸未夫先生の館長の時には小寺文庫を入れるについて非常な努力をしています。小寺文庫は神戸市長であった小寺謙吉氏の寄贈ですが、大変なものです。これは日本でも有数のものではないですかね。政治、経済、法律、歴史など、何万点あるのかは知らないけれど……。



「小寺謙吉肖像」小磯良平画

奥島　三万一千点です。

平田　これは小寺さん自身が、丸善から全部自分で選択して寄贈するんだけれど、これに対して林先生が小寺さんと絶えず連絡をとっていました。とても大学では予算もないし、社会科学系統は小寺さんを大事にしなければいけないということで、そういう関係の絶え間ない敬意を表して、絶えず折目切れ目には連絡をしておりました。これが早稲田の社会科学の非常に貴重な文献になっているんです。いまそれを継続するような人がいないんですね。

奥島　そうなんです。

洞　小寺さんは、平田さんの言われたように、主として丸善を通じ古書を蒐集したのでしょうが、ご自身で古書店まわりをして買いあつめることもしておられたようです。「蒐書はエネルギーだ」とおっしゃっていたそうですが、これは、こうした蒐書の努力から生まれた感想ではないでしょうか。議員選挙に落選した日の晩、もう神田の書店をまわっておられた話は、この前の座談会で私申しておきました。

平田　早稲田のなけなしの金を使うよりは、本当は図書館長の仕事として、そういう大口の後継者を探さなければいけないんでしょうが、なかなか見つからないんだね。天下には誰か居そうなもんだけどね。小寺さんも他の大学にもはじめは贈ったようだけどあまり大事にしない。うちの図書館では、絶えず折目切れ目にはまめに目録を作って、そのつど送る。早稲田ではこんなに丁重にやってくれるというので、死ぬまで継続して贈ってくれたんです。大変な値打ちのものですよ。

編集委員　小寺さんは、寄贈本を収める書架も贈るとおっしゃっておられ、途中でも何度も図書館に、整理・配架の様子をみにきておられます。

奥島　これは昭和三十七年の紀要第四号の、「八十年の回顧と百年の展望」のなかで、非常に詳しく洞先生がお話しになっています。

小汀コレクションの話

荻野　だいぶあとになりますが、それに関したことで、小汀利得さんにある時、「あなたはずいぶんいろんなものを集めておられる。それはあなたが死んだらどうするんだ」と言ったら、「どうするって売ってしまうより仕方ないだろう」と言うんです。だから、「そんなことを言わないで、早稲田大学に寄付しませんか」と言ったら、「早稲田はおれを大事にしないからいやだよ」と言っていました。（笑）

奥島　原安三郎先生のコレクションは全部入ったのですが、小汀先生のものは散逸したようですね。

荻野　全部市場に出てしまいました。

平田　小汀さんが大学に来た時、「うちに来いよ。本を寄付するから」と言うから、ぼくは、林館長の息子さんで商学部教授の林容吉君、五十を超えてまもなく亡くなられたけれど、彼と二人で小汀さんの家に行ったんです。あそこの家は地階は全部書庫になっていて、いろいろなものがあるんです。実務の本から古い本から、大変貴重なものがある。どういうものか私が行った時は、あれ持っていけ、これ持っていけで、一括して寄付するまでいかなかったけれど、社会科学研究書関係では相当寄付してもらったんですよ。大隈記念社会科学研究所が創設のころ、吉村さんがやっているころ、小汀さんが来まして、その関係でね。だから絶えず連携しないとだめなんです。しかしあの人を大事にしないわけじゃなくて、あの通りワンマンだから、ちょっと気に入らないとだめなんです。小汀さんは本当にいろいろな貴重なものを持っていました。

小汀利得氏

岡村館長の見識

大野　岡村先生のことですが、退任後も図書館によくお見えになったので、よく館長室に来られていろいろ教えてくださったのですが、私に特に注意されたのは、早稲田の先生はぼくのことを、骨董ばかりを集めていると悪態を言うけれど、実はそうではないんだということでした。つまり第一次資料を大切にしなければいけないということをおっしゃいまして、二次資料はともかく一次資料を集めなければいけない。日本の文化というものは、洋学が入るころから開けてきたので、あの当時の一次資料をよく集めなさい。それがまず第一だ。洋学が入ってきて、まず医学、ついで兵学などが最初に入ってきたけれど、続いて経済とか法律といったいろいろなものが入ってきた。その時どういう入り方をしたか、日本はどのような受け入れをしたかということをよく調べなさい。そしてそういうものをいまから集めないと散逸してしまう。日本の文明を知るには、あそこがいちばん大事

だということを教えてくれました。

平田　そういう問題意識があったかもしれませんね。

大野　そうなんです。それで、「ぼくのことを骨董屋と言うけれど、そうじゃないんだ。本当の日本の文化を知るには、明治になって西洋の文明が入ってきた当時を狙っていけ」ということを、こんこんと教えてくれました。これは忘れられません。

洋学資料図録

前野良沢肖像

平田　ぼくら素人から見ると、高い金を出して自分の趣味のようなことで本を集めるのはどうかなと思ったこともあるくらいだったけど、やっぱりそういう問題意識があったんですね。

荻野　僕らの認識が足りないんだな。（笑）先程からのお話では岡村先生を骨董屋扱いに云々など申されますが、古文書収集の私の場合は余り大学にはご迷惑はかけておりません。文部省大学局の予算の「私大研究基礎設備費」の支援を申請して全部を購入したのです。その点誤解なきように願います。文部省側でも予算の模範的支出也と好評でした。

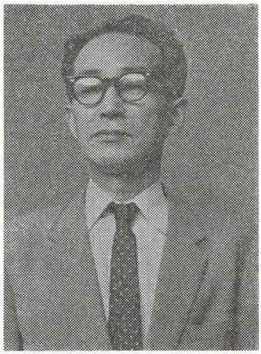
平田　大隈さんはフルベッキについて英語を勉強した時に、たまたま米国の三代目大統領で後にバージニア大学を創設したジェファソンの起草による、自由と平等と幸福の追求を骨子とした「独立宣言」に啓発され、そして政治と教育を重視した、このジェファソンにヒントを得て、総理をやめてから早稲田大学をつくった訳です。これだって英語を勉強しようとしてジェファソンを知り、啓発され、政治から教育に思いをいたして、早稲田大学ができたのもその表れなんですね。そういう問題意識が岡村さんにあったかも知れないですね。

奥島　現在やっております影印叢書の古文書のところは、荻野先生が営々とお集めになったものが中心ですが、これは国書篇というかたちで、いま第二期（一六巻）が出発しております。このあと洋学篇あるいは漢籍篇を叢書として出版することを、実はかなり本格的に考えております。それくらい洋学資料は、早稲田大学の図書館の大きな特色になっているわけです。

大野　一応洋学の目録はできていましたね。

奥島　はい。それでこのジャンルも、やはり今後少し充実しなければいけないということで、いくつかいま仕掛けをしているところです。

洞　私も司書として岡村先生の「道楽」のお手伝いをしておりましたので、少しばかり言いわけをしておきましょう。学内では、岡村先生は大金をつかってもっぱら洋学物を買いあつめていたとみる先生方が多かったようですが、これは誤解です。たしかに個別に市場へ出た洋学物は相当購入しましたが、大物では、大槻家から家学に関するものを一括して譲っていただいただけです。もうひとつの大口である勝俣先生の旧蔵書の購入は大野先生が館長をなさっていたときのことでした。大槻家のものは、たしか一誠堂に書店としての買い値を見積ってもらい、それに何割か増して譲ってもらったのですが、支払い額がすくなくて申しわけなく思ったことを覚えております。なかに『江戸ハルマ』の原本がありますが、今これが市場に出たとしてどんな値がつくか、おそらく全部の買い値の何十倍かになることでしょう。一誠堂といえば、南大曹博士の蒐集した江戸・明治期の名家書翰を売ってもらいましたが、これは三〇〇巻・一軸・二帖の大物で、八四四名の書翰約一七〇〇点がおさめられており、釈文と索引まで添えられていました。昭和二十六年の買い物で、当時にくらべて今の物価は何倍になっているかしれませんが、買い値は二〇万円でした。その頃の書価がいかに安かったかが知られましょう。今は知りませんが、当時は二万円以上のものの購入には稟議が必要だったので、面倒がって、二万円ずつ十ヵ月払いの便宜をはからってもらいました。まったくウソのような話です。そういえば一万円でいいというのを、わざわざ二万円払ったという、前代未聞の買い物をしたことがありますが、書画を主としたある古書店が紙くず屋の親分から入手したものだったといって外国掛老中の書翰を主とする対英外交文書をつなぎあわせて法帖仕立てにしたもの七十九帖を持ちこんできたのです。岡村先生はこの記録の分れと思われるものを東大の法学部で入手したという情報を一誠堂からきいていたものですから、これはえらいものが転りこんできたと、一も二もなく、言い値の倍払って買い入れたわけです。東大のものはつぶされる一歩手前で、法帖の上下のあて板がむしりとられていましたが、こちらの入手したものは、まだ From Ministers（老中）、From Governors（奉行）、Enclosures（同封文書）のラベルが張ってある杉板がついていました。こちらの買ったもの



洞　富雄先生

は、大判の老中の書翰を主にし、若干の小判の同封文書と海軍奉行・神奈川奉行の書翰をふくむものだったのですが、東大の方は小判物ばかりでした。

こんな話をしていたらきりがありませんが、岡村先生はけっして洋学物ばかり蒐集していたわけでありません。なにしろ戦後の古本市場には、古典籍、マル秘の資料物、その他がわんさと出まわりました。しかも、それがとても安いのです。たとえば相当に名のある画家の軸物が表具代にもならない安値でした。こうしたときに、手をこまねいていたら、図書館長としては怠慢のそしりをまぬかれないでしょう。これまでの蔵書に逸している一般書で重要なものの蒐集にもつとめたことはいうまでもありません。

小寺謙吉さんの口真似するわけではありませんが、図書の蒐集はエネルギーですから、古書店めぐりが必要なことはいうまでもなく、時折りデパートなどで開かれた即売会にかけつけることはかかせません。今のように籤引きという方法はやっておりませんでしたから、開店前にデパートの入口に待ちかまえ、扉がひらくと同時に階段をかけ上がって即売所に入り、目指すものを収めようとしたわけです。田口親君や亡くなった池田政敏君などは、その方で大功労者です。

こうした購入方法をしたからといって、新刊書の購入を手びかえるといったようなことは、けっしてありませんでした。早稲田大学の中央図書館は、官公私立の大学を通じて、その図書館購入費がずばぬけて多かったし、いまもそうではありませんでしょうか。それで、「道楽」をするにしても、蔵書構成を考慮して図書を購入するという在来の方針をくずす必要などありませんでしたが、一面「道楽」にも限度はあったわけです。なお、和漢書とかぎらず、洋書にしても、本館分の購入費が不足した場合は、学部によってはその割りあての洋書購入費をろくにつかわないところもありましたので、その分はありがたく使わせてもらいました。また、特殊の大物購入には、本部に申請して特別に費用を出してもらったことが度々ありました。これは岡村先生の時代のことではなく、いまはどうなっているか知りませんが、古川先生が教務部長の時代には、その手許に相当の積立金のあることを知ったものですから、ずいぶんわけていただきました。学部の請求に応じていたら、不公平のそしりをうけるおそれもあったでしょうが、その点、図書館へは出しやすかったのではないかと推察していました。毎年の図書購入予算額と年々の実際の図書購入額をくらべてみたら、おもしろい結果が出ることでしょう。

ついでに申しておきたいことがあります。平田さんが、図書館では小寺文庫のような大口コレクションの寄贈者を探さなくてはいけないと言われました。戦後、小寺文庫にはとうてい及びませんが、それでも相当大物のコレクションをいくつかいただいて、その文庫目録もだんだんできておりますが、たぶん皆さんご存じでないと思われる大口寄贈を逸した件が二つ三つありまして、なくなった児のよわいを数える

ような愚痴ながら、いまもそのときのことを思うと残念でなりませんので、お話しておこうと思います。もっとも、これにはどれもちょっとした条件がついておりました。

中央公論社は、自慢の明治期雑誌のコレクションを持っていたのですが、戦争末期のことで、三菱の倉庫にあずけはしたものの、倉庫代はかかるし、もてあましたらしく、一室に収めておくという条件つきで寄贈をしてもよいといってこられたのです。図書館としては収容する場所もなかったからでしょうが、林館長は、そんな条件つきでは困るといって断ってしまったのです。もっとも、当時は相当大物の寄贈書でもバラしてしまい、文庫扱いをしないという方針があったようです。

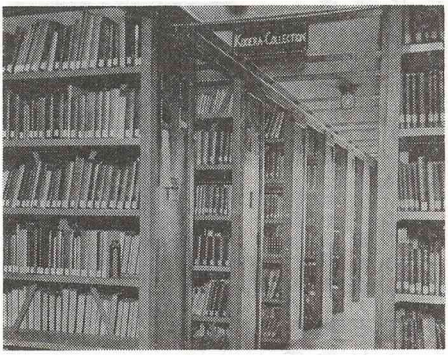
次は元社会党委員長の鈴木茂三郎氏が、精力的に蒐集された資料物の、これまた大コレクションを母校の早稲田へ寄贈してもよい、ただし、自分が時おり行って使う机を一つ備えておいて欲しいとのことでした。古本市場での資料物の蒐集では鈴木氏と私どもはライバルでした。これは、私がある人の結婚式で初対面の挨拶をしたとき、直接、鈴木さんからうかがった話でした。これは私が副館長をやめてあとのことで、図書館では、そういう条件つきの大物をうけ入れる場所はなさそうに考えたものですから、社会科学研究所に、貰ったらどうかと話をとりついだのです。あそこなら受入れの余地はじゅうぶんにあると思って、成り行きを楽しみにしてみていたのですが、もたもたしているあいだに、近代文学館にさらわれてしまいました。なんとも欲のない人たちで、あきれてしまいました。

もうひとつは、それこそたいへんな大物寄附の話です。平沼騏一郎が主宰していた東洋文化研究所には、本学の教授で終戦の詔勅の草案を書いた川田瑞穂先生をはじめ漢学の大家たちがいて、今の大東文化学院の創立にあずかったが、のちに東大系の漢学者たちに乗っとられてしまったと聞いております。この研究所の附属のかたちになっていた（あるいは逆かもしれません）無窮会文庫は、漢籍と国書の蔵書約二十五万冊という日本でも有数の特殊図書館で、その印刷目録も完備しておりました。戦後のことで、文庫の維持と研究所の運営に困難が生じたのでしょうか、老先生たちが週一回講義にこられる車代として、このころの言い方だとX年まで月五万円出して欲しいという条件つきで、全蔵書を寄贈したいと申し入れてこられたのです。この条件はただのようなものですが、平沼騏一郎といえば、戦前は右寄りの大立者ですから、早稲田大学としては受けいれにためらいがあったかもしれません。このとき、佐々木教務部長が私に、図書館の蔵書との重複調査をするようにというんです。どんなお考えから申されたのか知りませんが、こちらの何倍もしくは十何倍もあろうという大蔵書を、ただのように貰うというのに、いまさら重複調べとは何事かと思いました。だいいちそんなことをやるには、延べにして何十人もの手をかけて、しかも無駄骨を折る結果になります。こんな馬鹿げたこともありましたし、学

内の反発を買うおそれもありましたので、けっきょく図書館ではあきらめたわけです。当時私は大野館長のもとで、副館長をしておりましたが、大野館長がこの問題をたいへん心配されて、目白の和敬塾なら、土地に余裕もあり、また書庫を設ける資財もあろうから、受けいれてくれるかもしれない。それにあそこなら大学からも近いので、先生方の利用にも便利であろうし、何より和敬塾で引きとってくれれば、いずれは早稲田大学に寄贈してもらえることになるだろう。とたいへん旨い思いつきをされ、ご一諸に和敬塾の土地調査に出かけたりしました。しかし、この案がすすまないうちに、無窮会文庫の方が財政危機を脱することができて、寄贈問題はうちきりになってしまいました。無窮会文庫は新宿にあったので、土地が高く売れて、町田市に土地を買い、そこに書庫と附属建物をつくることができて、あえなくこちらは思惑がはずれてしまったわけです。繰りごとを長々してしまいましたが、これからの蒐書に何かお役にたとうかとも考えての老婆心からでした。

再び小寺文庫について

大野　小寺文庫のことですが、神戸に行くと、市役所の上のほうに小寺さんの屋敷の跡があるんです。いまは相楽園という公園になっているんですが、大変乗馬がお好きだったので、馬舎なんかが昔のまま残っています。前の紀要にも出ていますが、大隈さんが神戸に高架鉄道を敷いたので、それに感謝して小寺先生が、「そのお礼にお金を寄付しようか」と言ったら、「金はいらんから、本を集めてくれ」と言ったそうです。大隈さんが、かなり本を集めることに貢献されたということを感じたんです。



小寺文庫（書架）

また、東京大学は図書館が関東大震災で焼けてしまって、高木八尺という先生が、ロックフェラーに金を借りに行ったんです。いきさつは、文部省に予算を請求したら、図書館か駆逐艦かということで、駆逐艦のほうが大切だから、図書館なんかには金は出せないと言う。それで高木八尺さんがロックフェラーに行って、あの時のお金で百十万ぐらいだと思いますが、東大図書館の復活のお金を借りてきた。それで震災後東大図書館を復活させたんです。何年か経って返しに行ったら、ロックフェラーが借用書も返して「それは返さなくていい。証文も返してあげます」と言われ、感激して帰ってきたそうです。なんか本を集めるのは大学の先生方ではなくて、外部の人のほうがよほど貢献しているんじゃないかとい

う感じがしました。ロックフェラーとか小寺先生とかね。

平田　小寺さんの油絵の肖像画が図書館にあるはずだけど、いまも掛けてあるんだね。

大野　あります。

平田　非常に功労者ですね。誰かそのあとを継ぐような者を探そうじゃないですか。

奥島　ぜひ先生方のご助力を仰ぎたいと思います。

平田　竹下総理大臣ができたくらいだから、総理大臣に誰かを探してもらうように総長に話をして、総理大臣になった記念にね。早稲田から二代目ですからね。

大野　宇垣一成という陸軍大将がいましたが、あの方のご令息が法学部にいて、そういう縁で、中国の本を相当たくさん寄贈してくれたんです。朝鮮総督をやりましたからね。つまり陸軍大将といったような人が、かなり貢献してくれているんです。面白いもんだと思います。

宇垣一成氏

編集委員　宇垣一成氏からの寄贈本は蔣介石総統から贈られた漢籍で昭和三十年にいただいています。韓本は大正七年に吉田東伍氏蒐集のもので約二千冊入っています。

図書分類について

平田　それはそうと、いま図書館の蔵書はどれくらいになったんですか。

奥島　百四十万です。全学で一応二百五十万と称しているのですが、図書館自体は百四十万です。ですから昭和三十七年当時の座談会では、百二十万というレベルでお話しになっていますね。

平田　ぼくが館長だった昭和四十四年で百万と言っていたんだから、あまり増えていないんだなァ。

奥島　かなり増えてはいますが、やはり大きいものが、いままでちょっと少なかったですね。

大野　それは部局のは入れないで、図書館関係だけですね。

奥島　部局のを入れて二百五十万です。

大野　データベースを作る時には、部局のも全部入れますか。

奥島　もちろんそうしたいのですが、これはなかなか大変で検討中です。

平田　各学部から研究所関係を入れると、早稲田全体としては相当でしょうね。

荻野　館長たるお方は学生のためを考慮すると共に或はそれ以上に、研究者のためにと両方面への配慮が必要でしょう。研究者の研究成果は必ず教育方面にも還元されるからであると思います。

奥島　ところで、ずっと以前から、図書の分類の問題がずっとくすぶっておりまして、実はいま分類検討委員会を作っ

ておりますが、基本方針は、新館開館時には従来のものは凍結して、それ以降のものはＮＤＣ（日本十進分類法）に移行するという方針を決定いたしました。

実はどうしてそういうことにしたかと言いますと、一つには、いままでのものにずっと継ぎ足していくことになりますと、将来的に大きな移動をしなければいけないということです。もう一つは、学生用の学習図書（現在もＮＤＣ分類）十八万冊ほどを一般閲覧フロアーに完全開架式で出しますし、それから研究書庫内でも利用者には安全開架方式というかたちにします。全体がフリー・アクセスで、出納方式を止めるからです。学生たちは、中学・高校とＮＤＣ方式を利用しており、部局図書室もほとんどＮＤＣなものですから、ＮＤＣに慣れているわけです。したがって、早稲田式分類は、やはり将来的に考えてみると、あまりよくないのではないかということもありました。

ですから書庫を有効に利用することが一つと、それからフリー・アクセスに備えたということでもって、今後ＮＤＣに切り替えていこうと考えております。もっとも、従来のものは凍結し、切り替えることはいたしません。先生方が館長の時代には、この問題についてはどのような議論がなされていたのでしょうか。

大野　手を着けたら大変だぞということで、見送ってばかりいたんです。

奥島　結局、切り替えるとすれば、既存の図書も全部ＮＤＣで切り替えていかねばならないといった考え方が、基本にあったからだと思います。

平田　ぼくの時もやろうという話が出たんだけれど、不可能だと言うんです。これはアルバイトを使って、ちょっとやそこらでできることではなく、十年か二十年かかるということで、それはだめだということになりました。しかしぼくは政経だけはやりましたよ。いまの内田満学部長のちょっと先輩にあたる福田三郎教授とか、安藤哲吉教授とかあのへんの五、六人が助手になったとき、学部の助手を総動員して、学部関係の図書を全部ＮＤＣへの切り替えを実施した。その時、図書館の指導も受けたんですよ。図書館本体は独自分類だったけどね。それで思いきって切り替えてずっときてますけどね。学内もばらばらじゃないですか。法学部は切り替えていますか。

奥島　いいえ、ＮＤＣではありません。独自方式です。しかしあれも図書館の指導を受けてやった方式なんです。

平田　政経学部はそれで全部切り替えましたけどね。

大野　その問題には、こういうことがあったんですよ。講談社とか岩波、それから有斐閣といったところの出版社のお偉方に集まってもらって、本を出す時にＮＤＣの番号を付けて出せと言ったんです。そうしたら、「大学はお喜びでしょうけど、私どもとしてはとてもそれはできない」と言う。だから、「それなら本によっては入っているものもあるんだから、カードを入れてくれ。そしてそのカードにＮＤＣの整理記号を付けて、それ

をサービスして出したらみんな喜ぶよ」と言ったら、「そうかもしれないけれどとてもできない」と言って、岩波なんかは真っ先に反対しました。だからあれは結局空振りになってしまいましたが、そうすればよかったと思うんですがね。

平田　しばらくは出た本に、みんなカードを差し込んでやっていましたよ。国会図書館が全部切り替えたようですね。

大野　国会カードは入っているんですか。

奥島　入っています。外国の図書館を見ますと、古いところについては凍結して、新しい分類になっているんです。いままでの図書館の座談会記事等を読んでみますと、その問題については、結局以前にさかのぼって全部切り替えようとするから無理だったわけですね。

平田　百万以上のものをやろうといったって、それはできない。

編集委員　前に切り替えの話が出た時は、書庫の広さが問題になったんだと思うんです。NDCにすると、分類の間をこまかく空間をあけなければならないので、書庫が足りないというのも、一つのネックだったと思います。

奥島　二つの考え方があるんです。つまりいまコンピューター化が進んでいますので、書誌データのコンピューター入力が進めば全部それで検索ができるわけですから、そうなると、基本的には分類は必要ないわけです。しかし、どうなりましてもブラウジングというか、書庫を散歩する楽しみは残りますし、そのこと自体が勉強ということもあるでしょう。しかも、今度の図書館では研究書庫まで含めて全部フリー・アクセスになっておりますので、同じ系統の本がひとかたまりにあるほうが教育的効果も、研究支援効果も、はるかに大きいだろうと考えているのです。

古川　それでNDCでやるということは、基本的には決まっているのですね。洋書も全部NDCにするんですか。

奥島　そうですね。

古川　それがちょっとぼくは疑問があるんです。

奥島　そうですか。そのあたりの細かい点を、いま詰めているのですが、たとえば雑誌などは必要ないわけで、そのあたりも細かく決めなければなりません。

古川　例えばぼくらの関係で一例を上げますと、NDCの場合、日本文学なら非常に細かく、日記とか随筆とか、あるいは平安朝とか鎌倉といった具合に分かれている。ところが英文学などは、そんなに細かくは全然分かれていない。もちろんフランス文学、ドイツ文学などもそうですが、英文学一本だけでは困るわけです。やっぱりある程度分けなければいけない。それを機械的にNDCだけでやると、そこのところに問題が起こってくると思います。

奥島　機械的にはやりません。それについても、NDCを基本にして、それにある程度手を加えていくというやり方なんです。

古川　どこまでを限界にするかですけどね。

大野　NDCは改正されたのではないんですか。

奥島　現在は八版で、当分九版は出ないと思います。

洞　百万冊の蔵書を十進分類にやりかえるなど、とうていできない相談です。不便だというなら、さらに細分する方法もあるわけです。たとえばリ5Aというように、在来の記号にAとかBとかいったサブ記号をつけ、番号はそのままにしておくやり方で、これは今の館ができたときの方式を真似るわけです。そうしないと、旧館分の本のように、新分類によって以後のものも、番号が飛び飛びになりますので、図書館でもずいぶんと本がなくなるものだなあと、勘ちがいする向きも出てまいるかもしれません。名前は出せませんが、旧館分の本について、そんなふうに考えていた先生の例を知っております。

それはとにかく、国会図書館のように研究者の入庫を許さないところで、なぜ帝国図書館時代の函架番号方式をすてて十進分類法を採用したばかりか、オーサー・マークをつける方式までつかったのか不思議でなりません。あの方式では書庫のスペースが大へん必要になるわけで、これは鎌倉さんのおっしゃるとおりです。それにあれでは本の出納にひどく手間がかかり、また間違いもおこります。これは本当の話かどうか知りませんが、新築当時の国会図書館の書架の棚板を一列にならべたら、その長さは東京から沼津間の鉄道の距離になると聞いております。私はいつか書庫に入ってみましたが、ある部門は尻がガラ明き、ある部門は棚におさめきれない本を、床に板を敷いて置いてある有様でした。それでも、本館のように、補助棚はまだつかっておらなかったように見うけました。こうした事情もあったからでしょうか、新分類を採用して、旧分類の本は全部つめてしまったそうです。これでは、いつかまた斬新な内容と記号の新々分類が必要になりましょう。世界一の大図書館を誇るレーニン図書館では現物の分類などしておらないそうです。国会図書館でもむかしの函架番号法に戻ったらよさそうに思うのですが、これは素人判断でしょうか。

本館でも、新館に移る機会に日本十進分類を採用するとのことですが、何十年か先には、分類記号の頭にAとかBとかつけて、新版の十進分類をつかい、旧版による在来の本はつめて配架しなおすことになるわけでしょう。大学図書としては、実物に分類記号・番号をつけて配架する方式の採用は宿命だと観念しておいでしょうが、いつの日か実物の分類はあきらめ、書庫は単なる能率的な書物の収蔵庫になり、図書の検索はもっぱらコンピューターによる時代がくるものと思われます。それは遠い先のことですから、私ども年寄りには関係ないことですが、とりあえず、二つばかりお尋ねしたい件がございます。これまでの普通図書は全部フリーアクセスになるのでしょうか、それとも一部は別置されるのでしょうか。また、旧分類で架蔵されている継続物は、どういう扱いになるのでしょうか。

奥島　新館が完成しますと、本館の図

書は原則としてすべて新館に収蔵する方針です。なお、現在の継続物については、分類切り替え後どのように配架するかは現在検討中です。もっとも、定期刊行物は現分類を維持しますので、この問題は十分技術的に対応可能と思われます。

学術情報システムの現状

平田　現在はどのくらいコンピューターを活用されているんですか。

奥島　昭和六十年から始めてはいますが、それはまだ大した分量ではありません。

平田　私が四、五年前に筑波大学の図書館に行ったら、理工学部関係だけは、こういうテーマについて勉強したいがと言うと、コンピューターで検索してくれます。それからこの本を見たいと言うと、この本は〇〇教授が持っていて、いつでないと帰ってこないとか、すぐに出てきます。あれは非常に便利です。

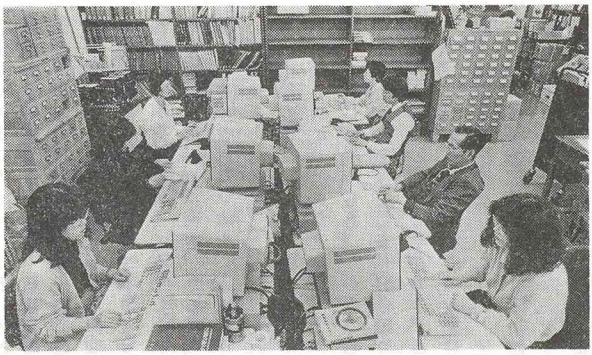
奥島　このシステムは十万、二十万のオーダーですと、比較的簡単なんですが、早稲田ぐらいの規模になりますと、なかなか大変です。

平田　各部門ごとにやると、五年、十年はかかるでしょうね。しかし情報サービスセンターと銘を打つからには、それがないとね。

奥島　この点については、濱田先生の館長時代に計画を立て始めておりますので、少しお話しいただけますか。

濱田　いずれにせよ、新しい図書館を作る時には、学術情報システムを作らなければならないだろうということでした。しかし早稲田のような場合、どこまでやれるかという問題があったわけで、基本的には新しく入ってくるものからともかくやっていこう。そして遡及については、ある程度余裕ができたら順次遡及していくという考え方です。ともかく、まずどういうソフトを作ればいいのかということで、私が在任している間、ずっとその議論が続いていたということになろうかと思うんです。

ただ実際問題として、ともかくコンピューターの端末は入れてありますから、一種の共同開発をIBMとやりながらということでいたわけです。しかし実際にまずそこで作ってみたものでも、現実にそれぞれの整理をやったりしているところと突き合わせていくと、そこでまた問題が起こってくる、いろいろな不備が出



コンピューターの端末・和漢書係

てくるというようなことで、またそれのやり直しをかけなければならない。このようないろいろな紆余曲折がありましたが、しかしどっちにしても、そちらの方向に向かわなければならないということは基本にありますので、大筋としてはそちらに向かっていく。

それで和書の場合でも、要するにジャパンマーク、それから先ほど先生方がおっしゃってましたが、本屋が直接記号をふってくる、あるいはカードを入れてくるというようなことが考えられますが、実は東販のほうで、いわゆるTRCマークというものを作り始めました。これがどの程度信頼が置けるものか、ジャパンマークと比べて、どのくらい内容的に信頼が置けるかということで、そのへんをずいぶん最初のうちは手探りでやったわけです。

そして最終的には、少なくともTRCマークはかなり使えるということになりました。和書について、特に一般的な図書についてはTRCマークを使って、それをデータベースに入れて、それで落していく。大学が購入したものについては、そこから落せるものは落してしまえばヒットしますから、そうすると非常に楽に整理ができる。そういうところをまずやってみようということで、受入部分のところで、少なくとも和書の一般書は、いま、大体それでいっているんじゃないでしょうか。その後どうなったかはよくは知りませんが……。

その場合に、最初東販のほうでは、自分たちのところで扱っている本は、日本で出版されている和書のほとんどを押さえていると考えていました。だからTRCマークを、十分いいものとして使えるはずだと考えたわけです。ところが東販で押さえていると考えていたものが、実際に大学で入れている年間の図書のなかで、どのくらいにヒットするかと言いますと、六十%かもう少し落ちるぐらいでした。それで東販のほうもびっくりしたわけです。つまり学術図書レベルのところまでくると、とても東販あたりでやっているようなマークでは無理だ。第一、東販がそういう情報を知らないんです。つまり東販の手を通って行かない本が、かなりあるんだということが分かった。しかもそれが学術図書の場合には、相当たくさんあるということが分かってきました。

それで東販のほうでも、TONETSというシステムを作ったわけですが、それをNEW・TONETSというかたちにもう少しレベルを上げる。そして早稲田大学で収集していくものを、逆にそちらのマークのなかに入れてやるというようなことをやりながら、それを充実していこうということになりました。

そこで東販、それからTRCという図書館流通センター、それがTRC情報サービスというのを作りましたから、そして早稲田大学図書館と四者で協定を結びまして、かなりそちらのほうのデータの量を増していく。というのは、国会のマークは六カ月ぐらいかかって出てくるんです。そうしますと、新しいものを次々

TONETS 協約なる

入れていこうとする場合、ちょっと間に合わないもんですから、そういうことを考えて、和書については、かなりのところまでいっているんじゃないかと思います。しかし、それを実際に扱っているところは馬場さんのところですから、そのへんの検討を聞いてみないと分かりません。

編集委員(馬場整理一課長)　四者で共同開発しましたNEW・TONETSというシステムは、TTS(TONETS図書館システム)と称しまして、現在一般書の発注はこれで行っております。このシステムは情報を提供するだけではなく、物流を伴っている点で、図書館にとりましては、実に有効なシステムです。

出版と同時か、出版の二、三日前に情報がわかり、その中から選書し、発注しますので、利用者へ図書が届くまでの時間がかなり短縮されました。また、品切れの心配もなくなりました。さらにTRCマークも同時に作成されますので、ウィークリーで送られて来るテープを利用することによって目録入力業務もスピード・アップされております。

ただし、先程濱田先生がおっしゃいましたように、データのレベルアップをしていかなくては、大学図書館用としてはまだまだ問題があると思います。東販の方でも、この点版元へ出向いたりして、大分努力して下さっておりますが。早稲田の方で学術図書の情報を入力していくところまでには残念ながら、まだ至っておりません。

オリジナルの目録入力はWINEで行っていますので、その辺のインターフェイスがまだできていないのです。

これからは整理業務から、収書やレファレンス業務へ、図書館員のサービスの重点が移されていかねばならないでしょう。そのためにどこの図書館でも目録入力についてはますますマークを利用していかざるを得ないでしょうから、全国的に質の高い収書範囲の広い、さらに速報性のあるマークができてほしいものです。

奥島　新しいところでは、完全にカードレスでコンピューターになっております。

洞　正直のところ、濱田先生や馬場さんのお話をおききしても、機械に弱い私には、ちんぷんかんぷんです。自分でコンピューターの操作ができないものですから、いつも和漢書や洋書の皆さんにはご迷惑をかけて、サービス

をうけております。自分で操作ができるように、いつかオリエンテーションを催してもらいたいものです。

原田館長のころ

奥島　この話は、また新しい図書館へ向けてのところで出てまいりますので、午前中の部としては、原田實先生についてお話をお聞きしたいと思います。原田先生は、昭和二十八年から五年間館長をなさっておりますが、この時期から早稲田が急激にマンモス化してきて、図書館の閲覧室を拡張したりというようなことが起こってくるわけです。ここからは、原田先生について、お話しいただけませんでしょうか。岡村先生御退任のあと一ヵ月程久保田明光先生が館長事務取扱いをしていらっしゃいますね。原田先生は昭和三十五年にご退職ですが、主として教育関係でしょうか。

古川　最後は文学部です。館長としての原田先生とはあまり接触がなかったのですが、文学部の先生としては、いろいろお世話になりました。

原田　実先生

大野　原田先生の館長時代はあまり接触がないのですが、総長が私に図書館へ行けと言うので、いやだと言ったら、「未整理が溜っていてしょうがないから、おまえが行け」と言うんです。だから、そんならなおいやだと言ったんです。(笑)「どういうことなんですか」と聞いたら、「生産研の雑誌や図書が、ほとんど整理されないで放ったらかしにしてある。あんなものじゃ困るから、行ってやってくれ」と言うんで、誰か適当な人を決めてくれと言ったけれど、命令なのでまいりましたけどね。

そんなことを原田先生に申し上げるわけにはいかないし、それで図書館に高橋

原田　實（はらだ・みのる）

明治二十三年四月八日～昭和五十年一月六日

大正二年本学文学部卒。教育学。大正十三年本学高等学院主事兼教授となって以来、高等師範部教授、文学部教授となる。雑誌『教育時論』の編集を通じて教育評論を行ない、エレン・ケイ『児童の世紀』『恋愛と結婚』『婦人運動』等を訳出して、新教育運動、婦人運動を支持。新教育協会会員として新学校運動を推進した。著書に『アメリカ教育概説』、翻訳としてジョン・デューイ『経験と教育』もある。図書館長在任は昭和二十八年四月～三十三年十月。その間に図書館の増築工事が行われ、閲覧室・書庫・事務所が拡張された。それと共に、指定図書室（学習図書室の前身）の開設、試聴・録音編集室およびマイクロ・フィルム撮影室（後に視聴覚係と撮影室に分化）の設置により新たなるサービスを開始。また、昭和三十二年十月に創立七十五周年記念として特別図書展等を開催。各種文庫・旧蔵書等が収蔵され蔵書の充実が図られた。

久保田明光先生

正明君がいまして、「きみ、行って生産研の本を整理してくれ」と言ったのですが、なんか半年以上かかったようでした。それは単なる一部局のことで、学校全体からいえば未整理のところはいくらでもあって、手を着けろといっても、そう簡単にできるものではない。

この間も丸善の幕末・明治のメディア展に行きまして、錦絵とか引札などを見て思い出したのですが、私がいる時に錦絵などは柳行李に入っていたんです。「これは誰かがやらなきゃならんな」と言ったのですが、とてもたくさんなものですから、手も足りないし、できないでそのまま行李に入っていた。それが、すっかりきれいにできているんで、ぼくはうれしくなりました。セントラリゼーションのことや何やかやと図書館のことをいろいろ大学に問題提起したのがみとめられて、次第に人員も増え、人材も得られるようになったのでしょう。だから生産研だけの問題ではなくて、各学部で手を付けたくても、なかなか整理がはかどらないというのは、大いにあったと思います。だから原田先生もだいぶ図書館が長かったから、それで交替ということになったんじゃないかと思うんですが、それだけです。

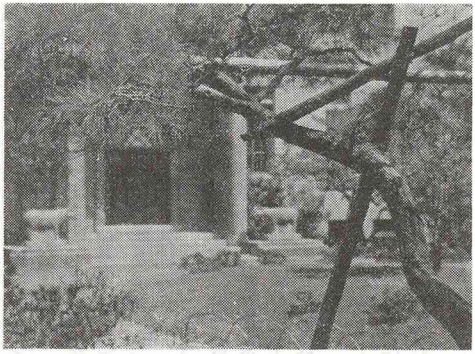
奥島　図書館の増築もこのころのようです。

大野　あのころの事務長さんは、大塚芳忠さんでしたね。

奥島　事務室の部分が増築される前は、あそこは芝生で、当時の写真を見ると、文学部の人たちがみんな芝生に座って話したりしていましたね。

大野　よかったですね。

編集委員　私などがうかがっている原田先生の話としては、偏しているとおっしゃるくらいの集め方をなさっていた岡村先生の後にいらしたものですから、岡村先生から引き継がれたような感覚で「こういう本を」と申し上げても、購入の許可がほとんど得られなかったときいています。「これを一つ買うくらいならば、普通の本を買うことによって、学生が何百人も読める。だから私の方針はそ


増築前の図書館裏庭

の方針でいくから、あまり特殊なものは買わないように」というようなお達示が、いらしてすぐにあったそうです。ですからこの当時は、あまり特別資料のようなものは買われていないんじゃないかと思います。確かに一般の学生のために、一冊でも多くの本を買うようにというご方針だったらしいです。

奥島　当時学生が急増する時代ですから、そういう必要もあったのかもしれませんね。

古川　常に両方の考え方があると思いますね。

洞　鎌倉さんのおっしゃったようなお達示があったかどうか記憶しておりませんが、さっき申したとおり、それまでとて、学生のための本の購入をいくぶんでも手びかえたというようなことは、けっしてありませんでした。原田先生は岡村先生のやり方を誤解なさっていたように思われます。図書館予算では買えなくても、本部にお願いすれば、相当のものを購入できたのですが、けっしてそういうことをなさいませんでした。例えば、藤村の『破戒』の原稿を神津氏の未亡人から、また大観堂の未亡人から永井荷風の『墨東綺譚』の原稿を、それぞれ五万円でよいからといって持ちこまれたことがありまして、これは図書館の名物になると考えたものですから、私たち熱心に原田館長にその購入をお願いしたのですが、頑として応じてくれませんでした。先頃、本館では日夏耿之介先生が吉江孤雁先生のことを書いた三十二枚ほどの原稿を五十八万円で購入したそうですが、いま『破戒』や『墨東綺譚』の原稿が市場に出たら、想像を絶する値段がつくことでしょう。原田先生は非常に清い方でしたから、本屋と親しくなるようなことを潔しとしなかったでしょう。でも、私などいつでも本屋と喧嘩ができる心がまえをしていなければ、本屋を大事にしなくては、けっしてよい本はあつまらないと思っておりました。

平田　あのおとなしい先生が、えらい情熱を持っているなと思ったのは、翻訳で『恋愛と結婚』とかいうのがあって、北欧の有名な婦人運動家の作品を翻訳して、注目を浴びたのを覚えています。何という人だったか、あなた方は記憶ないですか。

古川　あの先生は、もともと英文科出身なんです。それで若いころはエレン・ケイなどを一所懸命やっておられました。

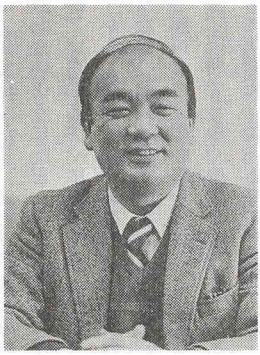
平田　それです。非常にロマンティックなもので、原田先生がああいう情熱を持っているのかと、非常に驚きましたよ。

洞　それに原田先生は、昭和五、六年ころリンゼーの『契約結婚』の翻訳というベストセラーを出されましたね。私は原田先生が館長になってからはじめておつきあいができたのですが、そのときの先生は、平田さんがおっしゃったようなかつての情熱がどこにあったかと思われるような、一見、たいへん謹厳な方とお見うけしておりました。私は出しゃばりで、先生にはずいぶんと不快な思いをおさせしたのではないかと、今さらにくやんでおります。

奥島　それではちょうど時間が予定通り十二時ですので、大野先生の時代へは、食事が終わりましてから移りたいと思います。それではここで休憩いたしまして、午後一時からまた再開したいと思います。どうもありがとうございました。

第二部　各館長時代の図書館の状況

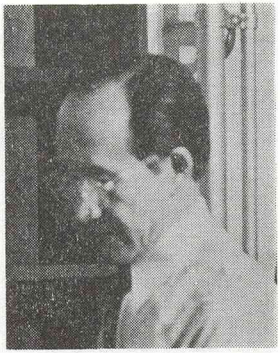
奥島　それでは第二部の現代篇へ移らせていただきたいと思います。私は昭和三十八年に卒業して大野先生へ弟子入りしたわけでございますが、大野先生は三十三年に館長になられて六年間お勤めになっておられます。この時期は図書館の大きなさま変わりの時期だったように思いますけれども、いくつかの座談会でこの時期のことについてはずいぶん語られております。まず最初に大野先生のほうから、当時先生がご苦労なさったお話と思い出をお聞かせいただいて、いろいろご質問させていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。


奥島孝康先生

大野館長と図書館紀要

大野　この前「紀要」に載っていたものを拝見しまして、あれ以上つけ加えることはございませんけれども、阿部敬二さんが洋書の主任をしておられまして、阿部さんを副館長にお願いして、ドキュメンテーションをやってもらおうということでしたが、これはなかなか成功しませんでした。洞先生は図書館から文学部助教授にご転出のあとでしたが、ご専門で非常に詳しいお方なので、副館長におねがいし、いろいろ教えていただくことになったわけです。阿部先生が残念なことにご在任二年でお亡くなりになりましたので、そのあとを加藤諄先生にお願いしたわけです。

加藤先生はやはり會津先生の愛弟子でご専門は国語でしたが歴史・地誌・美術をはじめ金石文とか特別な方面に造詣が深い方でありますので、加藤先生にもお手伝いしていただいたわけです。そういうことでありまして、そのほかにはあれ以上追加することはありません。


阿部敬二先生

奥島　この座談会を載せます「紀要」

は先生がご自身創刊されましたし、それから先生の時に春城先生の生誕百年、高田先生の生誕百年、それから天野為之先生の生誕百年というような記念展が続いております。このあたりについてお話しいただけませんか。

大野　市島先生の展覧会は、ちょうど私は外国へ行っていまして、これはあまりお手伝いできなかったと思います。その次はどなたでしょう、高田先生ですね。それから早稲田実業の校長をしておられた天野先生ですか。これは早稲田実業へ行きましていろいろなお話を伺ってきたわけですが、特にこれといって骨のおれたことはありません。生誕百年というような時期だったものですから、こういうようにいろいろ展覧会ができたわけです。展覧会についてはそんなことでしたね。

奥島　来年、実は大隈重信生誕百五十年を記念して、かなり大がかりな展示会と大がかりな記念展の図録の出版を準備し始めています。先生の時には、三十八年の十一月に生誕百二十五周年記念展というのをなさっています。また、この生誕百二十五周年記念が目前にあったからだと思いますが、三十七年に校史資料室が設けられました。このあたりの経緯はどのようなことでしょう。

大野　あれは近く大学が創立百年になるので、慶応大学は早稲田より古かったものですからすでに百年史を出しまして、非常によくできていました。そこで早稲田もぼやぼやしていると資料がなくなって困るから、資料室を置こうではないかということでした。そして大学の本部のほうへ、大学百年が近づいてくるので、この際系統的に資料を集めるべきだと申し入れました。その時に平地に波乱を起こすなとかなんとか言われまして、よけいなことをするなというようなことを言われてしまったんです。

それで大学のためなので、本部でやらないと言うんなら図書館でやろうということで、高野善一君に担当してもらって、早稲田学報に広告を出しました。昔の成績簿でもいいし、昔の制帽でもいいし優等生のごほうびでもいいから、早稲田に関係あるものは何でも寄贈してくださいとアピールしました。そしてどんどん集まってきました。

昔成績が優秀な人には『奥女中』なんていう本を上・中・下で三冊やっているんです。そんなものを寄附してくれたりして、校友の方はいろいろなものを寄贈してくれました。そしたらいつのまにか大学当局が、君がやっている資料室を本部へくれないかというお話があったんです。それで時子山先生でしょうか、理事をやっておられまして、このあいだよけいなことをするなと言われたのではないですかと言ったら、そうではなくて必要なんだということでした。

そこで何かあるのと言ったら、政経学部ご出身のある偉い先生が、このごろ早稲田は大隈さんをおろそかにしているとねじこんだと言うんです。そんなことはないし、大隈さんを中心に資料を集めるんだということで、そういう政治的なア

ピールがあって、本部へよこせと取られてしまったわけです。それで私は何年か前に申し込んだ時は断られてしまったけれども、やってくださるというのなら願ったりかなったりだから、気持ちよくもっていってもらったわけで、非常に不愉快な思い出もあるんですが、そういういきさつがあります。

奥島　校史資料室は、三十六年四月に図書館に創設されて、四十年一月に総長室に移されたわけですね。四年近く図書館内にあったわけですが、そうしますと現在の大学史編集所にあたる校史資料室は、図書館が独自に設置したのでしょうか。

大野　そうです。

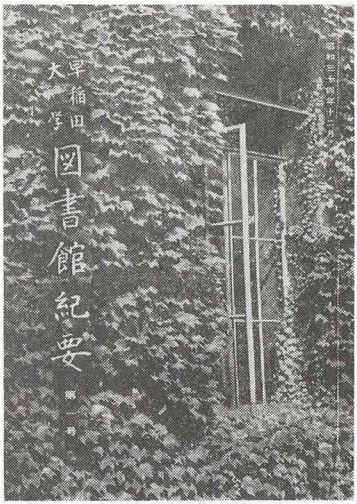
古川　時子山先生が教務担当理事の時です、本部へ移したのは。

奥島　当時古川先生が教務部長ですね。

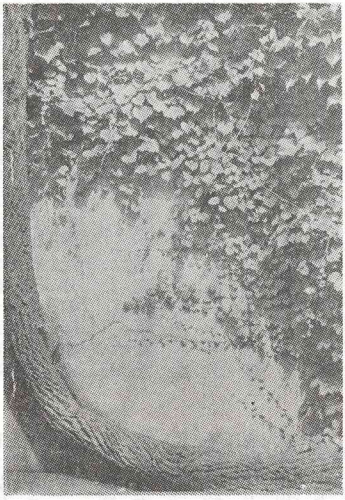
大野　これは蛇足ですけれども、なぜ「紀要」を出したかといういきさつです。これはどこか朝日新聞社の同系の会社でしょうか、早稲田大学には朝日新聞や毎日新聞などが初号からあるから、それをマイクロフィルムに撮らせてくれと言ってきたわけです。何に使うんですかと言ったら、あまりはっきりした説明をしないので、お金儲けにやるんだったら嫌だよと言いました。

そしたらそんなことはありませんし是非欲しいから、マイクロに撮らせてくれということでした。そんなこと言ったって、作ってしまえば何に利用したってこちらは文句言えないのでタダでは嫌だ、少し色をつけなさいと言ったんです。そしたら会社へ帰って取締役に図ってまた参りますということでした。

その次に二十五万円の小切手を大学へ寄附するから館指定ということで寄附してくれと持って来ました。それではそれを図書



図書館紀要創刊号


紀要裏表紙

ことで寄附してもらいました。それで大学に一銭も迷惑をかけないで「紀要」を初めて作りました。そういういきさつがあるので作った時はタダだったんです。みんなに、今度「紀要」というものができるから原稿をどんどん書いてくれ、私も意地が悪かったものですから、みんなテーマを書いて出してくれと図書館中へ回したんです。

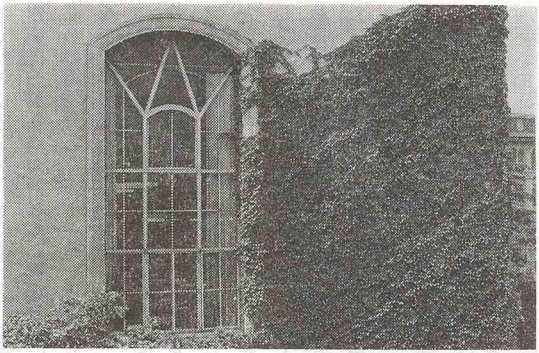
そしたらなかなか出てこないので、原稿を集めるのに苦労をしました。書いてくれた方にはごほうびを出さなければいけない。そんなお金はないものですから、タオルとシャボンかなにかをあげた覚えがあります。(笑) それだけです。

奥島 そして、これが私立大学図書館協会賞を受けたということですね。

大野 私立大学図書館協会で表彰されました。

奥島 当時はこういうものはなかったわけですね。よその大学でもやっていなかったわけですね。

大野 やってないですね。こんなに育ってくれたのでほんとうにうれしかったですよ。



蔦の這う図書館

平田 中身も非常に凝っていて、原稿料を出したのかどうか、大変凝ってましたね。

大野 それは石鹸とタオルですよ。(笑)

平田 それと大野先生の書いたこの巻頭言が非常にいいですね。

大野 私が苦労したのは裏表紙のこれですね。この写真は本当はLが逆になっているんです。写真を撮って裏返すとLがこういうかたちになるわけです。これは図書館の壁を這っているあの蔦のままなんです。これのネガをひっくり返して引き伸ばしたらLになってライブラリーで、それでこうなったんです。

奥島 みなさんご存じだと思いますが、大野先生は大変カメラがお好きで衝動買いなさって、たくさんお持ちなんですよ。(笑)

平田 この蔦は林癸未夫館長がご自慢で、六本の柱とこの蔦を非常に自慢していましたね。

大野 レオナルド・ダ・ビンチの手記を読みますと、蔦にあたった雨だれは四つ下へ落ちるんだということが書いてあるけれども、いくら見ても四つ下に落ちないんです。あれはイタリアの蔦と違うんだなと思いました。(笑)

紀要を手にした大野先生

平田　それで館長に蔦とホールの話でちょっと調べてもらいたいのは、「八十年回顧」のなかで、建築にあたった今井兼次先生がこれを造った左官は中村宇一としています。ところが、早大図書館の年誌の三案の六十六ページには、中島武一となっています。これはどちらが本当なのかね。

奥島　中島武一のほうが正しいのです。

編集委員　これは録音を起こす時に中島武一さんを中村宇一さんと聞き違えたのだと思います。今井先生はこの後、中島さんの奥さんにお会いになっています。昭年六十年だったと思います。またご子息の今井兼介さんのご案内で中島かじさんは、子供さん、お孫さんとこの図書館に見えられました。

この後ご遺族から図書購入の足しにと十万円が贈られました。ちょうど「新図書館建設タイル募金」が始まったところでしたので祖父から子、孫へと、図書館建築に志がうけつがれることをねがい、募金の第一号として、これを受け入れさせて頂きました。

奥島　それで実は後日談がございまして、今年（昭和六十二年）のバレンタインデーに図書館長様といって、奥様から大きなチョコレートが送られてまいりました。みんなに冷やかされていますが、お手紙といっしょに送ってこられました。私どもも一計を案じまして、ホワイトデーの時に大きいのを返礼としてお送りしました。そしたらまたお手紙がきまして、孫たちに冷やかされていますということでした。そういう楽しいお付き合いが今も続いています。

図書館システムの諸改善

古川　出向制度は確か大野先生の時でしたね。そうではなかったですか。

奥島　そうです。

大野　あれはセントラリゼーションをやる関係で、どうしても各部局へ司書の人を出させてくださいということをお願いしまして、当初は学部だけでした。あとから大学院へも行くようになったんでしょうか。

古川　今は研究所にもそういうところがありますから。

奥島　将来的にはその点は全部そうしようということです。まだ若干派遣してない箇所が残っています。

大野　当時部局へ行ってくださいというとなかなかいい返事をしませんで、二年たったら必ず帰すという証文を書けと言われました。それでそれを書いて、二年経ったんで図書館へ帰りなさいと言ったら、もう二年いたいんだということがありました。（笑）言ってみれば部局というのは図書館の分館ですものね。

平田　今は長くなって、二、三年より長くなっていますね。

奥島　それからもうひとつ、大野先生の頃に一時に各五名ずつという制限つきでしたけれど、修士課程の入庫が許されるようになったんです。昭和四十一年のことです。

大野　それは学生の要求があったためでしょうね。

奥島　当時はマスターは書庫には入れませんでしたから。私は幸運なことに大野先生が館長でしたので特別許可をいただいて入庫ができましたが。

大野先生が法学部長にご就任になって図書館長を退かれ、その後、大野先生が飯田中学校の時代の恩師であった佐々木八郎先生が館長になられたというお話でしたね。

大野　佐々木先生は、おまえがやったことをやればいいんだな、俺はなにもしないよ、なんて言って、たかをくくっていましたよ。

奥島　定年になられるまで四年くらいですかね。

佐々木八郎先生

編集委員　現在の学習図書室の前身である指定図書室をお始めになったのは大野先生の時代ですね。

奥島　これは先生の時代、三十七年十一月になっています。

大野　アサインメントをやれ、ひとつの学科について二、三十冊は指定図書として入れなさい、先生の本は教科書に使うのだから入れてはいけないという原則でやりました。

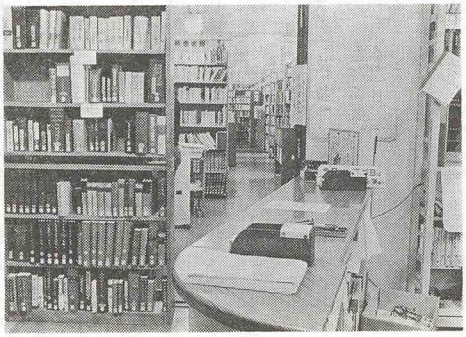
古川　前の段階があるんですね。前の段階がずいぶん古いんですね。

編集委員　発足して、選書から購入・整備までの準備期間が大野先生と洞先生

佐々木八郎（ささき・はちろう）

明治三十一年九月十日～昭和五十五年九月八日

大正八年本学高等師範部卒。国文学。昭和五年から高等師範部講師、高等学院教授を経て、同二十四年から教育学部教授。教務部長、教育学部長、常任理事等を歴任。大学基準協会副会長、大学設置審議会主査、国語審議会委員等で学外的にも活躍。『平家物語』研究の権威として名高く、総合研究『平家物語の研究』により学位取得。その他の著書に『芸道の構成』『語り物の系譜』等がある。図書館長には昭和三十九年十月から定年退職する同四十四年三月まで在任、加藤諄副館長（昭和四十一年十月退任）の補佐を受けて各種の改善を実施した。特別図書閲覧室、雑誌室、文献複写室等を新設。伊地知純正旧蔵書や西垣文庫等の寄贈を受け蔵書の充実を図ると共に、創立八十五周年記念展や洋学資料展を開催しまた大隈文書のマイクロ化、紀要別冊や露文図書目録の刊行により図書館活動の進展を促した。


学習図書室

の時代で、開室をしたのが佐々木先生と加藤先生の時だったと思います。

大野　新制大学になったから、一時間の講義に二時間予習復習をしろ、そのためには読ませる本を指定しろということで、先生の書いた本は教材に使うんだからいらない、他の本を集めろということでやりましたね。あれは予算は別にくれたのかどうか、国立大学ではみんな特別に予算をつけたらしいですが、早稲田では……。

古川　少しつけたと思います。その時私は予算を扱っていました。

大野　相当の費用ですからね。

洞　東大で戦後、自由開架方式を採用したとき、予算がとれないので、ロックフェラー財団から毎年五〇〇万円ずつ貰っております。

加藤　指定図書室についてですが、洞先生のあとをひきついで、三十五年に書庫内の教室を改築した部分を使い、約三万冊の指定図書室を設置しました。これが三十七年です。各先生方に推薦を依頼したのですが、はかばかしくなく、約二〇パーセントの回答があったと記憶しています。しかし私は、これをもとにしながら、学生に読ませるものというが、文部省のいうように学習用の軽いものばかりではいけないと思いまして、基本的な図書及び参考図書などを選んで五万冊規模のものにすることを目指したわけです。『大日本史料』などもその時、指定図書に加えましたし、当初入れないということだった辞書や雑誌にまで範囲をひろげ大学院生までの利用を考えました。

また開架部分ということでは、参考室についてもその充実をはかりました。参考室の資料が少なかったせいでしょうか、当時の係員が学生のレポートを書く手伝いを、手取り足取りやっているのを見まして、これではいけない、簡単な助言だけで、学生が自分で調べたりできる環境を作る必要があると感じたわけです。このため急激に参考室の辞書、書誌、二次文献など増やし、それらを排架番号にこだわらず、類別に排架し、学生が捜しやすいようなシステムにするように考えてもらい

加藤　諄先生

ました。

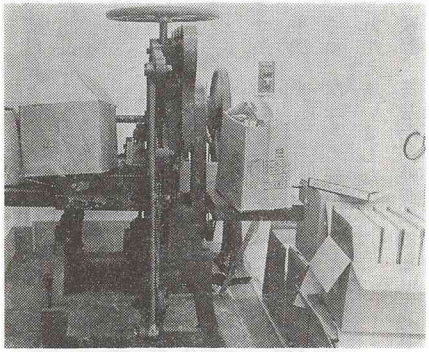
荻野　大野先生の時に副館長だった、加藤さんがいないので代わりに気のついたことを言いますと、加藤さんは資料類の小さなパンフレットに至るまで表装、製本してくれて、あんな薄っぺらなものは書棚から探すのは骨のおれたものですけれども、それが解消されて、加藤さんは資料の扱い方をうるさく言って大変その方面に力を注いでいた人ですね。小さなものまでちゃんと表紙を付けてね。

平田　なんか箱に入れて、ブックカバーのような箱にね。

大野　本の箱ですね。本の箱の角を三角に切って、あそこに薄っぺらなのを入れて、背中にタイトルを書いておく。天理大学の図書館もそうやっていましたね。それでそういうようにしましたし、天理では洋服のボール箱に一枚ものを入れて、富永先生がそこへタイトルを書いて、山ほど積んでいました。ああいうやり方はいいですね。

平田　今、図書館の製本というのは外へ出しているんですか、館内ですか。前は池内秀雄君のやっていた製本室が地下にあって、持っていけばすぐにやってくれて非常に便利でした。

大野　あれも市島先生が連れてきたんです。池内君のお父さんですが。市島先生以来の製本屋さんでずっと長くやっていたのですが、雑誌が増え、製本するものが増えてきて、内々では間に合わなくなって、ナカバヤシ製本かなにかよそへ出すということになって、池内さんのところへはあまり出さなくなりました。それで定年も近いしやめてもらおうということで、嘱託として事務の方を手伝ってもらうことにしました。



池内製本所

洞　これは戦前のことですが、雑誌の仮製本はすべて労務員がやっておりました。大隈文書の裏打ちも労務員の仕事でした。

大野　図書館にあったある古い本を、書陵部へ修理に出したら、裏打ち紙の後ろに墨かなにかで書写年が何年とか書いてあった。図書館のカードはずっとそれより後になっていたので、それよりずっと昔の本だったということがわかって、とても値が出たぞということがありました。

傷んできてボロボロで、酸性紙というよりも和紙なんですけれども、それでも虫が食ったり、縫い目が離れたりして、そういうのを修補に出したら非常に立派に元に戻りました。そこに伊地知鐵男先生という早稲田出身の先生がいらっしゃ

って、先生にお願いして何冊か書陵部に出して修補をしました。これからも古文書の修補のことは対応を考えてゆくことが必要だと思います。

古川　先生のご在任の当時に、書庫がこれでは狭くて足りないとか、そういう問題がかなり具体的な問題として上っていましたか。それともまだ当分は大丈夫だということでしたか。

大野　具体的には問題になりませんでしたが、五階か四階に、「ネイチャー」という雑誌が横に積んであったんです。それで理工科の先生から、こんなことをしては困る、縦に置いてくれと苦言を言われましたが、置く所がなくて苦労しました。

奥島　その問題については私もいろいろお伺いしたいことがありまして、佐々木先生の時代昭和四十一年に、「図書館改善拡充要綱案」とかいうのが出たりしておりますが、これはのちほどのテーマにさせていただきます。

平田館長と荻野館長のころ

奥島　そういうことで平田先生の時代、昭和四十四年から四十七年までですが、平田先生が外遊中は、当時理事をなさっておられました荻野先生が館長をなさったということです。そのお二人にその間の図書館のことをお話しいただけますか。

平田　私より荻野先生のほうが詳しいですね。僕は昔の細かいことはほとんど忘れてしまいました。

荻野　あなたが外遊するというので、僕は久保田明光先生から言われて留守中を代行して守っていたわけです。ですから

平田冨太郎先生

この期間は活躍したのはあなたですよ、言うに言われないご苦労なさったんです。

平田　シニアプロフェッサーの海外出張制度がありましてそれで出掛けたんです。図書館長をやめていくと言ったら、任期の途中だからそんなことを言わないで行って来いということで、先生にご迷惑をかけたんです。

荻野　学生騒動のさなかですから。

平田　どういうめぐり合わせか、四十四年に図書館長をやれということでした。考えてみると、昭和四十二年以降の学生運動が華やかなりし頃の、その対

荻野三七彦先生

応、後始末のようなことで僕にやれと時子山総長が言ったのではないかと思います。四十四年のその時に、図書館の書庫の向う側があの時は文学部だったか法学部だったか……。

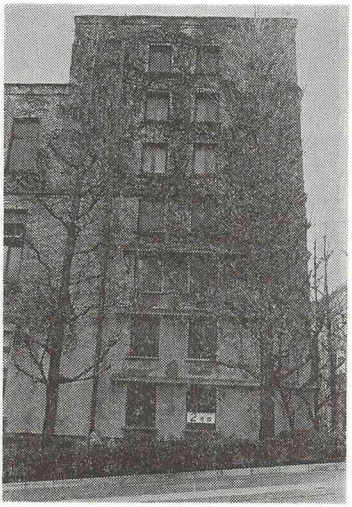
古川　文学部が引っ越したのは三十七年ですから向こうに行っていました。そのあとに教育学部が入りました。

奥島　四十四年からです、法学部は。

平田　裏の法学部のほうに火炎ビンがさかんに投げられたんです。書庫がとばっちりを受けて、いつどうなるかわからない。それで本部へ行って、このままだと火炎ビンを投げ込まれたら防ぎようがないから、何か予防対策を講じたいと話をしていたんです。

そしたらどうするかと言うから、開館している限り書庫を全部閉めるわけにいかない。閉めたところで道路側から窓をめがけて投げられたら、火炎ビンで書庫にすぐに火がつくから困る。そうしたら窓に鉄板を張るというから、たくさんの窓全部かと聞いたら、どこから投げられるかわからないから全部だと言う。それが問題になりまして検討しようということになりました。

それからもう一つは図書館から学生を閉めだすということもいいけれども、閉めだしても乱入された時に、ホールの大観と観山の描いた「明暗」の絵は守らなければいけない。それで何か予防をしようということになって見積りをさせました。図書館の事務所にいた金原広雄君がそうした担当で、本部の営繕課へ行ってどういうふうにするか検討させたんです。



鉄扉のはられた書庫の窓

そしたら、あれはさしわたし三間の一枚の和紙なんですね。わざわざ紙をすかせて、当時では手すきで日本で最大の紙だった。その一枚に書いたもので、それを額からはずして、くるくる巻いた形で、めくって三菱倉庫へ預けるという案が出ました。見積ってみたらあれを剝がしたりなにかすると大変な費用になり、本部ではそんな金はないというわけです。じゃあ放っておくかとかいろいろ考えた結果、額のうえにすっぽり鉄板をかぶせることになったわけです。それが比較的予算が安くつくということで営繕課で大至急やってくれました。

そして同時に書庫を守るために鉄板を書庫の窓全部に張ろうということになり、鉄板を張ると暗くなるとかいろいろ言われたけれども、結局ずいぶん短い期間で一斉にやったわけで

す。そういう学生騒動の予防対策のようなことに追われていました。いろいろな業務改革とかいうことではなく、とにかく守ることに追われていました。外へ出ているカード箱を全部書庫へ入れたり、開館時間を短かくしたりして。ともかく貴重なものは、図書館に今ある前田青邨の絵画……。

大野　「羅馬使節」ですね。

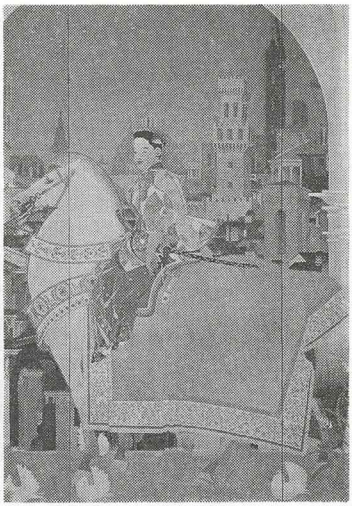
平田　そう「羅馬使節」の屏風は、あれだけは簡単に運べますから預けようと、三菱倉庫へ預けました。それからなんだかんだ書庫へともかくぶち込んで、守る一方でしたね。

荻野　あれは預けたでしょう、国宝の『玉篇』や『礼記』とかも。

平田　そんなことばかり四十四年、四十五年とやって、四十五年の終り頃から少し学内の図書行政のことを考えなければいけないということで、何か少し始めました。

大学図書行政改善委員会なるものを作りました。一館長では各学部の図書その他に関して干渉できないし、一切権限がないんです。それで図書費をなんとか節約しようという話が本部から出ましたから、何をといったらまずバックナンバーを調べろということでした。ものによっては法学部、政経、商学部と各学部に重複してある、ものによっては生産研もある。そして、ないものはどこにもないんです。

どうしてもいるというならなんだけれども、一箇所にあれば他のほうは少しはしょったらどうかと思うけれど、そんな調整も図書館には権限がないからできないんです。われわれ図書館長は各学部が予算をもってそれぞれやっているので干渉できない。それでは総長を図書行政の委員長にして、教務担当理事を責任者にして、各学部長、大学院の委員長、図書館長、事務長はその側面から手伝いをする。そういうような組織を作って、図書行政の合理化をやろうといったんですけれども、結局権力集中とかなんとか言って、時子山総長もやる気がなくて、もうやめようということになったんです。


羅馬使節

それでもそんなことをやってみようと考えて一応、それは文章にまとめました。四十五年の十二月ですか、「全学的関連における早稲田大学図書館の現状と改善の方向」です。

これを受けて、四十六年の七月に、図書行政の改革答申案である「図書館なら

びに全学図書行政の改革について」、副題として「大学改革具体化の一環として」というような十ページ前後のものにまとめて、その時に荻野先生も一枚かんでいただいたけれども、そんなことをやっていたんです。

これは効果が出なかったんです。しかし、当時は、そういうことに関連して、なにしろ今の図書館は手狭だということで、なにか新しい図書館を作らなければいけないんじゃないかという話が、その頃かなり具体的に出ていたんです。

入館を待つ行列

奥島　その話につきましては、第三部の後半でさせていただきます。

平田　とにかくそんなこともあったものですから、昭和四十六年、原田、佐々木両館長がまだご存命中に、大野先生と私、荻野先生はその時所用があって誌上参加のようなことで、お集まりを願って、「歴代館長図書館を語る」という座談会をやって、改善の方策を話し合いました。その時の内容は『早稲田大学図書館紀要』(第十四号、昭和四十八年一月)に掲載されていますが、あの時、庭で記念撮影をしていますね。そんなことがありましたね。

荻野　とにかくその騒動ですから、考える暇も何もないですね。だから図書館の中には何も問題が出なかったんです、考えている暇がないんだから。

奥島　あのころは私たちも、今も覚えていますが、教員会が毎日のように開かれて、機動隊を導入するのは、少なくとも図書館へ学生が突入してきた段階ではないかというような話をよくしていました。

平田　来つつあるころでした。そのおそれが多分にありまして、宿直などもやめていたのを復活して、館員の配置などもそれに対処しましていろいろやったり、守備態勢、予防対策的なことにかなり時間と労力を費やしましたね。

奥島　戦災で恩賜館が焼けた時に、西村真次先生の収集された大切な資料が全部焼失したわけですね。それから本部が占拠された時は、校史関係では大事な書類などはどうだったんでしょうか。

平田　本部関係の時は、人事・経理関係はだいぶ外へ出していたのではないですか。あまり被害はありませんでした。むしろ研究室関係はひどかったですよ。時子山教授の部屋などは、もう本が全部、どうにもならない。粉砕やら、水をかけられたり、めちゃくちゃでしたね。

荻野　このへんの古本屋に出ていましたね。持ちだされたものが。

平田　そうです、持ち出されたものが古本屋に出て、そういう被害があったから図書館もその可能性が十分あったわけです。幸い図書館は被害を受けることなしに過ぎたものです。

洞　恩賜館の戦災と西村真次先生の話が出ましたので、関係のあることをちょっと申しておきましょう。西村先生が『半世紀の早稲田』を書かれたときに、私も手伝いをさせられましたので知っているのですが、恩賜館の屋根裏には、明治期の校史資料がたくさん収蔵されていました。そこで見た津田左右吉先生の成績簿などはいま学籍課に残っておりますので、一部の資料は持ち出されていたようですが、大半は焼失してしまったものと思われます。

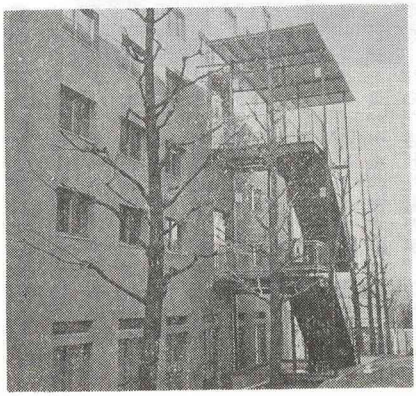
編集委員　本館には被害はありませんでしたが、七号館の視聴覚資料室ではレコードを三百枚位盗まれました。ジャズの良いものだったそうです。

平田　その後新聞センターを作るという話がありました。今の図書館の新聞関係はどうなっているのか、マイクロフィルムで処置できるところはいいです。政経学部の屋根裏には、古い朝日新聞からなにからかなりあったんです。それを政経学部ではどうにもならないものですから、図書館と合同で新聞センターを作って、古いものは廃棄しなければならない、そうでないものはマイクロフィルムに撮る。新聞というのは場所を取るし、縮刷版も多くなれば大変です。

マイクロフィルムというのはまた、温度、湿度を一定にして、見るのもリーダーにかけて見なければいけないし、それを捨てるわけにはいきません。そういう報道、マスコミ関係、情報関係のものをどういうようにしていくか。

それと書庫へ行くと通路がだいたい本だらけで、横になって歩かなければならないし、新たに、つぎ足したほうもいっぱいになってしまっている。それから一時大浜総長時代に書庫を教室に使ったことがあるんです。ご存じですね、書庫の法学部側の道路のほうから、仮階段を設けて。どうしても教室がないから図書館をしばらく開放しろということで、書庫の一部を二つばかり教室に使っていました。それもやめてくれといって再び書庫にもどしたが、それでも足りなくて、通路が通れないほど本棚がある。

これはどうしても新しい図書館をつくらなければいけないということで、これは終戦後、昭和二十年代から話は出ていたようでしたが、具体的に安部球場を使



教室へ入る階段のついた図書館

ってやらなければいけないというのは、この頃、僕らの頃からです。遠くへもっていってはいけないし、近くの敷地といってもなくて。野球部のOBたちはとんでもないということで、どうにもならなかったわけです。そのうちに、野球部の監督はだれでしたか。

奥島　石井藤吉郎さんですか。

平田　石井藤吉郎さんなどは、先生、野球部にグランドを二面つくってくれるなら安部球場を喜んで開放しますということでした。ここは狭いからレギュラーが練習しているとあとの連中は指を食わえて見ていなければいけない。それでは強くならないから二面野球場を作ってくれるなら喜んで開放しますと、石井藤吉郎君は、そういう考え方でした。石井君の上のほうの先輩がやかましくて、安部先生の胸像があるかぎりはここは絶対神聖だということだったんです。

それで百年祭の行事の時には図書館もつくらなければいけないということになって、元をただせば、戦後すぐに言い出されたことで、四十年くらい経っているのですが、具体的には四十四、五年の私が館長やっている頃から問題になってきて、原田先生も佐々木先生もそうだ、そうだということで、あの時の座談会にも来て話してくれました。いきさつはそういうようなことです。

学生紛争のころ

奥島　平田先生、荻野先生の時代というのはそういう学園紛争で、確かに図書行政は本格的に考えられない時代でしたね。そのあと落ち着いたところで古川先生が図書館長になられますが、古川先生が図書館長になられて翌年、黒ヘル集団が図書館に入ってきていますね。そのあたりから先生にお話をいただけますか。

古川　あれも紛争の一環でしょうけれども、書庫にたてこもって、本をバリケードのように入口に積み重ねて。結局は機動隊を入れて、全員逮捕ということになったのです。あの時だけだったでしょう。

奥島　何人くらい入ってきたんですか。

編集委員　十人くらいですね。

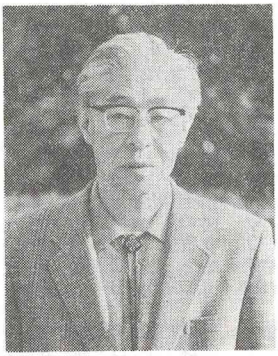
古川　あまりひどいことはしなかったですね。外に投げ出したものが少しあって、それで本が傷んだというのがありますが、あとはなかに積んでバリケードのようにした程度で、それほど大きな被害はなかったんです。

古川館長のころ

古川　僕は十年図書館にいましたけれども、別に何もしないので、おっしゃってくだされば何か思い出すことがあるかもしれません。

奥島　先生の頃にずいぶん文庫なども入っていますね。柳田泉先生の文庫も……。

古川　柳田先生の入ったのはもっと前です。未整理のままずっと置いてあって。僕が行ってから入ったのは、荻野先生の集められたもの（「荻野研究室収集文書」）を文学部からこちらに移管したというのはありました。



古川晴風先生

荻野　あれは何年でしたかね。

編集委員　荻野先生が定年になられてすぐです。

荻野　展覧会をやった年です。五十三年の二月頃ですね。

古川　本間久雄先生の御所蔵だった、明治・大正文学の自筆資料類は実際の価格から言えば、問題にならないくらいの価格で譲っていただきました。たまたま本間先生には学生時代からお世話になっていたということもあります。

東京大空襲の時に今の椿山荘の藤田さんの屋敷に焼夷弾が落ちてそれが燃え上がりました。そしてカテドラル教会に燃

本間久雄先生

二葉亭四迷肖像・柳瀬正夢画

本間文庫・坪内逍遙「当世書生気質」自筆挿画指定図

え移って、その裏が本間先生のお宅で焼けてしまったわけです。

僕の家はすぐ近くだったものですから、先生のところに見に行きました。重要なものはすでによそに置かれたようですけれども、まだ相当貴重なものがたくさんあって、屏風だのなんだの預かってくれと言われたものを、家まで持っていって預かったということもありまして、そんな御縁もあって、先生は喜んで蔵書を図書館に入れてくださったわけです。

ガウ文庫についてはちょっと話をしなければいけないと思いますが、実は僕が館長を命ぜられた時に、先輩の二、三の先生方にご相談しまして、館長といったら何をしたらいいんですかと聞いたわけです。そしたら多くの方が言われるのは、自分のいちばん得意な分野の本を集めろということでした。館長の分野がいろいろ変われば、長い目で見れば結局充実するんだから、それでいいんじゃないかと言われたんです。

ところが自分の分野、僕がやっている分野というのは非常に特殊なので、そればかりやったら学内からそれこそ変な目で見られてしまいますから、最初のうちはずいぶん遠慮していました。しかし、かなり任期も長くなるし、と思っているうちにちょうどガウさんが亡くなって、ガウさんという人はケンブリッジの教授だったわけですけれども、ヘレニズム時代のギリシャ文学の一番の専門家でした。

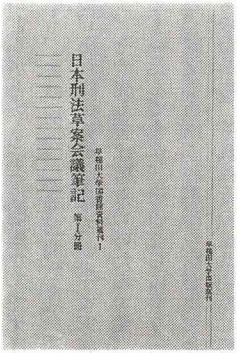
亡くなって、まとまったものが出るということだったので、最初の館長就任当時の先輩の言葉を思いだして、この際少し贅沢をさせていただこうかとまとめて手に入れたわけです。その中には古典ギリシャ、ラテン文学をやる人には非常に貴重なオリジナルな資料が相当あります。

そして今まだ完全に整理が終わっていない、もう一つシャントレーヌ文庫というのがあります。シャントレーヌというのはパリ大学の教授で、言語学の専門家なんですけれども、彼が亡くなったあと蔵書が出て、これもまとめて買ったんです。これは僕がやめる直前だったと思います。それはその後なかなか整理がつかないで、結局外注で整理をやってまだ完全に終わらないはずです。

編集委員　単行本のほうは終わっているのですが、抜き刷りが圧倒的にたくさんありまして、そこが進まないわけです。

古川　最後の段階で、いささかそういう意味で贅沢をさせていただきました。

奥島　先生の時に「図書館資料叢刊」というのが出されましたね。「刑法草案」とジョセフ彦の「海外新聞」、図書館のものをこういうかたちで復刻するというのは初めてだったわけですね。そのあた



図書館資料叢刊

りの事情をお話しいただけますか。

古川　これはむしろ受動的に始まったわけです。そういう復刻版とか影印とかを出したいという考えは、多くの図書館員が永く持っていたと思います。図書館がイニシアティブを取ってそれをやろうとしても、やっぱりお金の問題がからむのでなかなかそう簡単にはいかない。なんとなくそういう気運はあったけれどもやろうというところまでいかなかった。

ところが出版部というのがご承知のように、株は大学が持っているわけだし、出版部の運営費の大部分は大学からの家賃だとかそういうもので賄われている。出版部はもっと活性化しないとしょうがないじゃないかという意見が昔からあったわけです。

ちょうど当時出版部の担当理事をしていた商学部の宇野政雄君が、彼はやっぱり商学部の人ですから、そういうことをよく考えていました。図書館が持っているいい本をそういうかたちで出すということによって、経済的に出版部に少しでも黒字を出そう、そしてそれによって出版部に活性を与えよう。そういう考えをもって、こういう企画はどうだろうと彼が言ってきたわけです。

その前に図書館でまっ先にやりたかったのは洋学資料だったわけです。本当はそれをやりたいわけですけれども、図書館内のいろいろな事情がありまして、洋学の研究会というのができていたわけで、その研究会の了承を得ないと洋学資料は出せない。だから、何をやろうかと考えあぐねていたところへ、「刑法草案」はどうかという話を杉山晴康君が持ってきたわけです。

初めは杉山君があれを翻刻させて欲しいという話でした。ところがご承知のように楷書できれいに書いてある。こんなのを翻刻する必要ない、これなら影印で出したほうがいいんじゃないかということで、実はこちらの計画が十分練られていない時点で、ものが先に来てしまったという感じであれを始めたわけです。

それが結局出版部として採算がとれたかどうかということは問題なんですけれども、その次の「海外新聞」なんですが、あれは採算が取れていたと思います。その先も実は考えていたんです。考えていたんですが、そのうちにもう一つの、国文学のほうの影印の話が出てきたものだから、それはそのまま中断してしまって現在に至っているわけです。あれはあれで、単発的にいいものがあれば出していくという考え方は、私としてはずっと持っていたわけです。

奥島　その頃候補として上がっていたものはどういうものがありますか。

古川　一つはロシア紀行のようなものです。当時の幕末に日本からロシアに渡った人が何人かいるんです。

荻野　大黒屋光太夫。

古川　そういう連中の書き残した日記のようなものがあるわけです。日露交渉の一番最初の文献なんです。それを第三巻に出したいと思っていたんです。

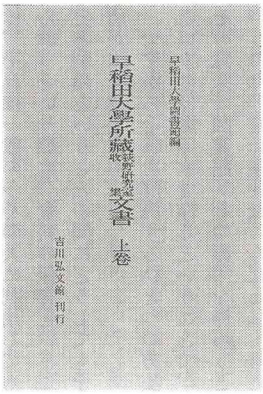
奥島　また考えさせていただかないといけないですね。

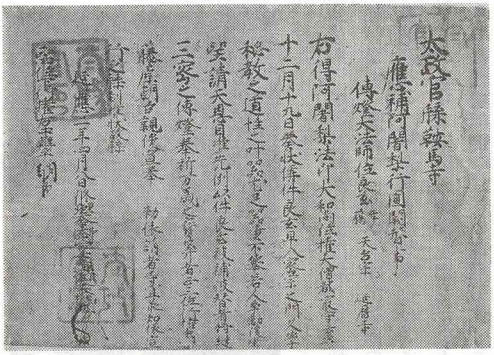
古川　それをやってもらうつもりでいました高野明さんが亡くなってしまったのでちょっと問題ですけれども。しかし今の出版部にそういういいものを出させて、そこで少しでも黒字を出す。しかし出版部は儲けても仕方ないんです。資本金が三十万ですし、大学はいくら配当金をもらってもたかが知れているので、儲かったものは指定寄附のかたちで大学へ寄付する。

それで逆に大学から補助金を出して、出版助成を出しているようなものにそのお金を当てるというようなかたちで、商業ベースに乗らないいい本を出す。そういう活動と裏表でやったらどうかというのが基本的な考え方でありますけれども、なかなか思ったとおりにいかないんです。

奥島　当時荻野先生の、「早稲田大学所蔵荻野研究室収集文書」という二巻、これは吉川弘文館だったでしょうか。

荻野　そうです。あれは大学図書館編ですね。





荻野文書・尾張国解文

奥島　先生がだいぶ力を込めてあとがきを書かれているのを私も読んでいますが……。

荻野　あれは多少、吉川から印税でも入りましたか。おそらくそんなことはないと思うけれども。

編集委員　あれはまだ増刷していませんから。増刷分から入れてくれるそうです。

古川　やっぱりいい本を出さなければ出版部を活性化できないということはひとつあるわけです。

奥島　おっしゃるとおりで、今、濱田先生と私が代表取締役で立て直しを図りつつあるのですがなかなか難しいですね。

古川　しかしなんとかしないと。洋学を何らかのかたちで影印の計画にのせられるのは非常にいいと思います。

濱田館長のころ

奥島　そういうことでだんだんと図書館も発展してきて、比較的最近ですけれども、五十七年に濱田先生が就任されました。古

川先生、濱田先生の時代は新しい図書館を建設する生みの苦しみの時代で、これはあとでじっくりお話しいただきたいと思います。濱田先生の時代では、今の話の続きから言いますと、新館関係以外ではまず「影印叢書」のことでありますが、そのあたりからお話をいただけますか。

濱田　私が五十七年の十一月にお引き受けをして、命じられて図書館へまいりまして、最初に強烈な印象だったのが書庫のなかの横這い歩きなんです。それでこれは大変だという感じがしたのと、それをなんとかしなくちゃというのがいちばん最初にあったわけです。これについては古川先生の時に、本庄の保存図書館の設置計画が決まっていました。そしてそれはすでに建設されるという方向で、むしろそこでどういう本を別置するかという、そこのところがいちばん大きな宿題で、それが一番最初に僕がぶつかったことでした。

それにもうひとつは、影印刊行の委員会があって、これがなかなかうまく動いていない。動いていないのは出版部のほうがどうもはっきりした返事をよこさない。つまり本来影印叢書を出したいというのは図書館側のほうの理由です。こういう稀覯書に類するようなものについては、それは一般の多くの人に利用してもらおうという際に、資料の保存ということと利用ということの間にどうしても矛盾が出てきます。

濱田泰三先生

ですからそれを解決するひとつの方法というのは影印本を作るということで、その意味で図書館がその影印を作ろうというのは非常に重要なことだと私も考えたわけです。それではどうして進展しないのかと聞いたら、出版部のほうで及び腰だったわけです。

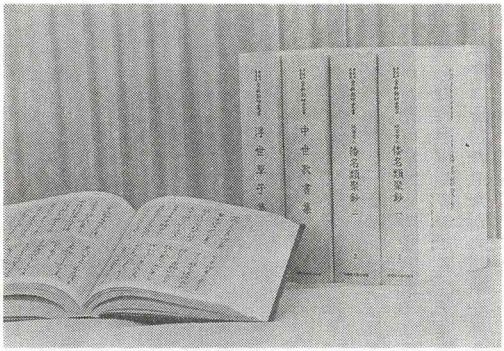
要するに出して売れるという自信がない、それだけ大きなものを引き受けて自分のところでやれるということを必ずしもはっきり言えない、そういうことであったようです。

もともと図書館が影印を作るということは、必ずしも利を上げようということではなくて、利用者の需要に応えるという、そちらに重点があるのですから、出版部のためらいにうなずけるところもあります。実をいえば、出版部以外のところで、それでは刊行できないかという、内々の検討もしてみました。やってくれるという書店もあったのです。

しかし、なんといっても、出版部を横に持っていながら、そこでやらずによそでやるというのは、やっぱりどうしたっておかしい。それで出版部ともういっぺん膝詰め談判をやったんです。どうしても出版部のほうで出せない、ということ

であればよそで出す、刊行委員会の先生方は早く決めようということを強く言われていることだし、そうするつもりだと話をしました。そこで初めて出版部のほうで自分のところでやるという話になったわけです。

ただ、やるについては資金がないから学校から借りてくれという話になりました。そこで少し筋ちがいかと思いましたが本部へ行って、なんとか影印叢書用に出版部へ特別に融資をしてもらいたいということで、新たに二千万ほどお金を借りて、それで影印を作り始めようやく動きだしたということです。



資料影印叢書

しかしとりかかるとなれば当然編集作業をやらなければいけませんし、ほとんど専従的にやっていただく方が必要になります。そこで結局これは鎌倉さんにお願いしようということで、やり始めました。しかし、実際にやり始めてみましたら、これが大変だったわけです。

とにかく写真があがってきてみると、当初考えていたようなあがり方ではないわけです。白黒ですから朱や青の書き入れをどう区別させるか。色がどうなってくるかとか、いろいろな問題がありまして、そういうことでものすごい時間もかかりましたし、単価もおのずとあがってきました。ところが刊行委員会のほうで、わりと早い段階で大学院の学生にも買える程度で、と刊本の値段を決めてあったわけです。そちらのほうが先行しているものですから、なかなかそれ以上に価格をあげられないということでした。ですから出版部のほうでも今かなり苦闘をしているという状況ではないかと思います。

ただそうやって融資を受けたものを回しながらやってはいるので、なんとかいけると思います。本当は三百五十部出ると採算が取れるわけです。それが現在五百刷って、セットで二百四十部くらい出ているところです。ついこのあいだ第一期のセットが完結しました。セットになれば全国の図書館などに入れやすくなりますので、これからもういっぺん営業活動をしてもらおうと思っています。あともう百くらい出れば出版部自体でやってもやれるわけです。

第二期については、なんとかしてそういうところまで持っていきたいと思っていますし、第一期の全巻が出たということでいちおうの信用はできたわけですし、中身も私がひいき目で見ているせい

かもしれませんが、天理の善本に負けないくらいのいい影印になっていると思います。

そこまでのものができているので、第二期についてはやれるんじゃないかなという気がしています。ただこの影印をやっていきます上で、特に古文書関係など、収蔵資料が品切れになってしまうわけです。その後何か入れていかなきゃいけないというんで、収集活動のほうにも影響してきます。それがわかりました。

なるべくそういうものを入れることに気を配らなければなりません。ともかくバラエティを持たせながら構成を考えていきたいわけですが、それをやるためには館蔵の資料には、部分的に片寄りがあります。ある部分は薄いということになりますと、その部分を重点的にうめなければならないのではないかということが起こりますね。

今度の二期を見ていますと、だいたいある程度のところまでは揃っているわけです。三期目以後が大変だろうということです。

荻野　専修大学あたりもやっていますね。

濱田　あれは百周年記念で、三億円くらいのものを購入して、それを出したようですね。早稲田の今回の影印については、研究者からの要望に応えたものですし、第一期の刊行開始のときには丸善で影印叢書刊行記念展示会というのをやりまして、収録する資料を中心に展示したり、図録を作ったりして宣伝もしました。そういうことをやって少し売れ行きを伸ばそうというつもりもあったんです。

荻野　これは私の推察ですけれども、京都大学が「文学部博物館」を作ってこのあいだオープンしました。並んで、自分のところで集めたものの、部分的ですけれども解説付の図録を出しています。あれなどは早稲田のいき方を学んだのではないかと思いますね。いわば大学自体が莫大なものを所蔵しているけれども一切公開していない。それを公開の一歩前にきたというのは、やはり早稲田のあり方を学んだのではないかと思います。刺激になったと思います。

古川　もう一つ、かなり無理な面もあったわけだけれども、それをどうしてもやらないと困るという、側面の理由があったんです。それはあのなかに近松の孤本があるんです。以前から、近松全集の中にそれを入れたいという申し入れがあった。しかし、こちらに影印の計画があったので、入れるなら早稲田で発表してから、と断っていたのです。それで、刊行を思いきったというイキサツもあります。

奥島　そういう事業が古川先生の時代からだんだん手につき始めまして、現在の明治期資料マイクロ化事業につながるわけですが、これにつきましてはやはり仕掛は前館長の濱田先生ですので、このあたりを少しお話していただけますか。

濱田　お手元に趣意書があると思いますけれども、きっかけは先ほど平田先生もおっしゃっていた新聞資料を、七号館

の一階に見に行ったんです。政経の屋根裏にも見に行きましたが、七号館の一階にも新聞の古いものが少しありました。開こうとするとパラパラッと壊れてしまう。

これはどうしようもないという感じがしまして、そこからわが図書館が、明治期に収集している図書のなかで、どの程度傷んでいるものがあるだろうかということを気にし始めたわけです。どういうわけか比較的早稲田のは、国会図書館などでいわれている状況に比べるとまだいくらかいいんです。しかしたとえば利用者がページを折ったりしているものは、

明治期資料集成

そこからきれいに切れて落ちてしまう。洋書の場合もそうですが、特に和書の明治期資料については、早稲田は震災にも戦災にも逢わず、くぐり抜けてきているわけですから。そういう意味では国会図書館と早稲田とが、おそらくいちばん大量に明治期資料を持っているところではないか、これはだいたいだれが見てもそういうふうに言われています。

明治期に、どのくらいの部数が出版されたのかはよくわからないんですけれども、おおざっぱな数で五十万という説もあります。重要なものというのはおそらく二十万くらいだと思います。そういうなかで国会図書館が八万持っている。うちが今どのくらい持っているだろうかということを考えました。そのへん、目録カードがあることはあっても、その頃のものですから正確にはわからないわけです。しかし、少なくともそうした資料で、早稲田にしかないというものがもしあるとすれば、それを壊してしまったのでは申しわけないという気がしました。

ちょうどそのころにイギリスのほうからESTCが入ってきて、その後さらに十九世紀のものまで手をつける、十八世紀のものまでは全部マイクロ化していくということでした。そのマイクロフィルムをセットで、世界の大きな大学図書館で買わないかというんですね。一セットが確か年度でいって五百万円くらいのものではなかったでしょうか。この場合は毎年五百万円くらいずつをESTC（18th Short Title Catalogue）を出していく。それをある数の図書館が買ってくれれば、その資金でまた次のものを出していく。そういうやり方で十八世紀の英語文献のうち、二十万点程度まで全部やるという計画でESTCが始まったわけです。

ところがそのESTCだけではなくて、次の一八〇〇年代に入ってから後のほうがむしろ紙がやられている。それ以前のものは装丁がやられている。これは古川先生が私に引き継ぎされた時にそのことをおっしゃっていたと思います。そ

ういうことから思うと、日本の場合はまさに欧風の刊本、印刷ものは十九世紀に入って後半からのものです。そうなるとこれを壊してしまうわけにいかないので、そのマイクロ化をやらなければならないのではないか、といろいろ考えました。

もう少し時間をおけば光ディスクであるとか、新しいメディアが使えることになるのかなと思ったのですが、そのためにソニーなどに行って向こうの研究所の人たちに話しかけてみたりもしました。そうすると今の段階では光ディスクではまだ無理だという話でした。当面はやはりマイクロのようなものに移して光学的な処理をしておいてくれれば、それをその次にもっていくのは楽になる。ただ今の段階で資料を紙から何かに転換して保存しておこう、しかもそれが利用に耐えるようにしようとすれば、マイクロ以外にないという話になりました。

それならばマイクロ化を明治期資料についてやらなければならないだろう。これは一早稲田大学でやろうというのは、とても大変な金がかかりますし能力もそれほど十分にあまっているわけでもない。本来は国家的な事業であるべきだと思っているわけで、特に明治期の初めのころは、出版社が東京に集まっていなくて、大阪にあるとかあるいは地方にわりとあったようです。そういうところで出版されたものは、必ずしも東京まで本が来ていなくて、地方の図書館にしか入っていないというものがあるはずです。

そういうものも加えていきながら、できるだけ網羅的に明治期資料をマイクロ化していくという事業をやるべきだということを考えたわけです。ちょうどブリティッシュ・ライブラリーのオルストン博士が中心になって十九世紀のものについても手をつけ始めたということなので、ちょうど私がやめる時でしたか彼に来てもらいました。そして私どものところだけではなくて、国会図書館だとかそのほかのいろいろな図書館の人たちにも呼びかけまして、こういう事業をやりたいと思うがということで記念講演をしてもらいました。

そうした動きをやってみた上で、よそが音頭を取るのを待っていても仕方がないし、国がこういうものにはすぐに金を出しそうもないし、やるとすれば早稲田が音頭を取って始めていかなければなるまい。それにこういうことが始まれば、全国のいろいろな大学図書館などの協力も得られるだろう。そういうことも考えまして、この事業を始めたわけです。それが趣意書になっているもので、これは奥島さんにぜひやってくださいということで引き継いでもらった仕事なんです。

奥島　この問題につきましては詳しいものが近く出ます「早稲田学報」の十二月号で報告されます。それから次回からは毎回、大隈生誕にこと寄せてまた「学報」で、大野先生が前にやられましたように、校友に呼びかけて明治期のものとか大隈さん関係のものをご寄贈いただくようアピールします。最近では「週刊新潮」に滝沢先生のご紹介で、「尋ねもの

欄」に出させていただくことになっております。

そんなことでいろいろな問題がありますが、実は先生方はご存じのように、国公私立大学図書館協力委員会というのがございます。現在早稲田が委員長館ということでやっておりますが、これは一般的な相互協力の問題ですけれども、学情システムが進行している現在では、収書は、平田先生がおっしゃったように、早稲田の学内でも分担しなければいけない、それだけではなしに図書館間でもいろいろな分担の方式を考えていかなければいけないという段階になっております。

そういうことの手始めとして早慶の図書館協定が結ばれました。それについて濱田先生がなさったものですから、この点もお願いします。

濱田　慶応の図書館と早稲田の図書館とは、古川先生の時代から定期的な打ち合わせ会が、懇親会を兼ねて年に二回行われているわけです。それが慶応もちょうど新図書館ができたわけで、これを見学しながら羨ましいと思いつつ、早慶の図書館協力をやり始めたわけです。できれば相互の教員および院生、研究者までは、まったく自分の大学の図書館と同じ条件で利用ができるというシステムをつくってみようではないかということでした。当初は閲覧、貸出についてはそれぞれの図書館が責任をもつというかたちでやってみようということになりました。そのため早慶図書館協力協定というものを結びました。実は慶応だけではなくて他からも申し入れはあったのですが慶応の考え方は、互恵でなくてはということでした。つまり一方が貸出オーバーになるのではなくて、ちょうど均衡の取れるところ同士で手をつなごうという考え方です。そこで早慶協力という形で始められたのです。

現在慶応のほうに、キャンパス間ネットワークのメール便があるわけです。それを週に一度早稲田のほうにも立ち寄ってもらいまして、そこでこちらから貸し出すもの、向こうから借り出すものを届けてもらうというシステムになっていると思います。これについてはかなり利用者が多く、けっこう相互貸借の本の数も、向こうへ行って閲覧している人の数も多いんです。

そのなかでひとつ問題が起りましたのは、慶応の図書館は新しい貸出システムにしていますから、無断で持ち出そうとすればブザーで全部チェックされるわけです。早稲田にはそれがないものですから、問題って外へ持ち出す者が出るんではないか、それを心配しまして、いろいろ考えた末、新システムに対する訓練の意味もあって、雑誌室だけは、黙って持ち出そうとするとブザーが鳴るということにしました。新しい図書館ができればすべてそうなっていくのでしょうが……。

現在のところ、どちらかというと慶応のほうの持ち出し過ぎかなという気がしていますが、慶応では当然早稲田の新館ができることを見越しながら考えていら

っしゃいますから、この図書館協力というのはかなり進んでいくだろうと思います。これは将来の構想としては、ひとつは早稲田が今作っています学術情報システムのデータベースがある程度たまってきますと、これと慶応のほうとを結ぶ、慶応は国の学術情報センターのほうにつなごうとしているわけですけれども、こちらはなかなか動き出しそうにない。そうしますと、早稲田のほうがおそらく先行してしまうのでしょうから、その段階でこのシステムによるネットワークのお互いの協力関係というものができるのではないかと思います。

それからもう一つは、おそらく収書の分野についても、どうも限られた予算でやるわけですから、ある分野についてはこちらに本がある。しかしこちらにはない分野もある、それではそちらを使わせてもらう、そのかわりこれこれの分野はこちらで収集しようというところまで、将来的にはなるかもしれない。そういう収書協力みたいなところまでいけば、戦力は倍加されていくのじゃないかという気もありました。そうしたことを視野に入れた一種のテストケースとして、早慶の間で相互図書館協力協定を結びまして、すでに実施されつつあるということです。その後どうなっているか僕はわかりませんが。

奥島　非常に順調に実施されております。ところで、早稲田が作っています情報システムは、DOBIS／LIBIS／WINEというものですが、これを今度は中央大学が採用することになりました。そこで仲間を増やす必要がありますので、来年から早、慶、中央、上智の四館長の懇談会をいま仕掛けておりまして、そこで次第に話を詰めていきたいというようなことを考えております。

時間もだいぶ過ぎておりまして、第三部の時間が少なくなりますので、一応はこれで止めさせていただきます。ここで五分くらい休憩をさせていただいて、まことに申しわけございませんが、四時くらいまでは大丈夫でしょうか。お急ぎの方もおられるとは思いますが、できるだけ早く進めたいと思います。先生方全員ご関係ありますので、よろしくお願いいたします。

閑話休題

大野　今の問題でちょっと質問がありますが、大学の蔵書構成の個性化、特色化ということは前から言われていました。早、慶の間では、慶応のほうにはそちらの特色のあるものを重点的に集めてもらう、こっちはこっちでというところまで進めていくつもりですか。今のままで……。

奥島　そういうところは今後の課題で、まだまだそこまではいきません。

平田　こちらは早稲田の特色で、向こうは向こうで相互にというとこまでいかないと、いけないんじゃないですかね。もう一つは慶応の旧館のほうは、持ち出すとピーッと鳴るのをやっていますか。

濱田　新館のほうです。日吉も新しく作りましたから。

平田　全部に仕掛けをしなければいけません、本一冊毎に。

濱田　新館に入るのは全部そうです。

平田　蔵書構成の特色化はそうしないと、いくつかの複数の大学でやっていかないとおっつかないのではないですか、これからは。

濱田　たぶん慶応のほうからは、もうひとつ手前のところで、新館ができて本庄分館の書庫が空きます。その本庄を使わせてくれないかという話も出てくるのではないかと思いますが、保存を今度は……。

奥島　向こうは小さいものですから余裕がないんです。

大野　法学関係は中央大学に任せますというわけにはいかないでしょう。こちらが法学も何もやらないというわけにはいきませんから。そこまで検討してもらいたいですね。

濱田　今の中央大学の場合は、うちで開発したDOBIS／LIBIS／WINEというシステムを、そのソフトを使おうということになるそうです。ソフトを使うわけで、蔵書の中身の問題ではないのです。しかし、それも将来何らかのかたちで協力しようということになるかもしれませんけれども。

平田　それじゃ、慶応の医学部は国際的なものが全部入っています。アメリカの議会図書館と情報のやりとりをやっていて、日本のものは全部向こうにやって、反対に向こうから国際的なものは全部入っています。医学部は早稲田大学にないから、人間科学部との交流はどの程度のものかわからないけれども、何かやるならそこまでやらないとそれぞれの大学で特色を持つことなしに、情報交換だけではまた中途半端になりますよ。現状ではお互いに収書をやっていて、ただ情報だけだから。

濱田　データベースがそれぞれにあって、それを呼びだすのを同じようなソフトですと、つまりこの本ははこちらにある、この本はこちらにないということがすぐわかるようになっています。

奥島　先生、過去の蔵書をみると、非常にはっきり分かれているわけです。早稲田は和書が非常に充実しています。慶応は洋書が非常に充実しています。

平田　中途半端なものをお互いに相乗りでは意味がないので、この先五年、十年となると事情は非常に違ってきて、経費の面でも大変だと思われますね。そういうことまで突っ込んだ話し合いをするようにしないと……。

濱田　徐々にそういう方向に向かっているだろうと思います。

平田　国会図書館とむしろやったほうがいちばんいいんだよね。国会図書館の新館に七百五十万、旧館に四百五十万ありますから、千二百万の蔵書があります。このあいだ行ったら時代風俗を見るのに役立つといって、週刊誌はもちろん漫画の本まであるんです。あそこまでいったら国会とやるのがいちばんいいんですけれどもね。

濱田　マイクロ化の場合は、国会の明治期資料でたとえばうちと向こうでダブッてあるという時に、向こうが善本である時は向こうのものを使わせてもらうと

いうことになっています。出所は国会図書館蔵のものであるということをことわって、それを使ってやろうという計画なんです。ですから、その意味では当然マイクロ化をやっていくものについては国会は協力してくれるでしょう。そういうかたちになっていくと思います。

平田　上智の新館と慶応の新館はどうなんですか、規模とか優劣は上智のほうが大きいですか。

濱田　上智のほうが大きいですね。ただ上智の場合は三階から上は昔の研究所が全部そこへ集まってきまして、その蔵書を中央に集中して出してきているというかたちです。いわゆる一般図書館と言いますか、総合図書館・中央図書館としては三階までですから、その分野でいきますと、面積的にも蔵書数から言っても慶応よりもちょっと少ないという感じがしますね。

平田　ただうちで新館ができると、相乗り持ち込みが非常に増えてくると思います。それを全部相乗りしたら大変なことになるから、それは取捨選択になるだろうけれども、均衡したところとやるのでは意味がないし、だからそのへんの仕事をじっくりと検討してもらいたいと思いますね。

奥島　これからの課題としてじっくり……。

古川　特に仏教関係の大学ではかなり前からやっていますね。仏教大学関係だけの一種の連盟のようなもので、特に定期刊行物については非常にはっきりと、これだけは全部責任を持つと、それぞれにやっています。そういう限られた分野というのは非常にやりやすいわけです。

奥島　いろいろ問題がありますが、平田先生がお忙しいようですので、ここで第三部に切り替えさせていただきます。

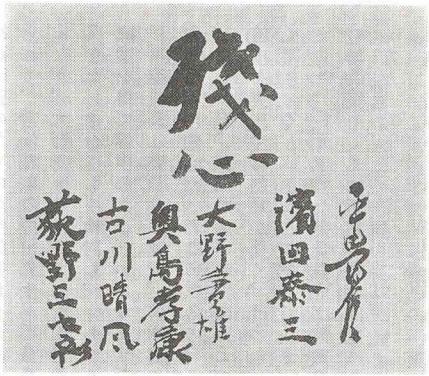
第三部　新中央図書館の建設へ向けて

奥島　新館の話は、先ほどの平田先生のお話では終戦直後からあったということのようですけれども、記録に現れたかたちで図書館で正式にそういうことが議されはじめたのは、大野先生の時代の昭和四十一年八月に「早稲田大学図書館改善拡充要綱案」を本部宛稟議書として提出したのが、最初なのではないかと思われます。

ここで先生が館長としてお考えになった当時の図書館改善案というものはどういうものであったかというようなことについて、少しお話をいただければと思います。

図書館改善拡充要綱案

大野　本部へ持っていった文書は図書館に資料があると思うんですけれど、大学当局は初めからそれを無視してかかったと思うんですが、一応研究会をこしらえた。それで、文学部の戸川行男先生が常



た。

奥島　私がいろんなものを読んでみますと、新しい図書館の計画については、三つの案があったと思われるんです。一つは現在の図書館から当時の文学部、つまり現在の八号館のほうへつないで、回廊式に作っていくという案で、これは大野先生がおっしゃっています。もう一つの案は小松先生が最初から言われている安部球場に現在のようなかたちで作るべきだという考え方です。さらに、第三の案は、図書館というものはキャンパスから少々離れていてもいいんだということで、甘泉園に作ったらどうかというような考え方もあったようですね。

そういうふうに大きく言えば三つぐらいの考え方があったと思いますが、高田先生などの、大学は図書館を中心に研究室を配置し、キャンパスを構成すべきだという考え方のいちばん典型的なものが、現図書館を中心にして回廊式にコの字型に延ばしていくという考え方だったと思いますが、これについて少しお話しいただけませんか。

大野　あれは夢みたいな話で、今の法学部に図書館をつなげて、書庫を倍ぐらいにして、閲覧室を増やして、大図書館にしたらいいんじゃないか。それが大学のセンターになりますから、そうして欲しいものだということを本部に出したんです。

奥島　そうしますと、現在の八号館全体を図書館にするという考え方ですか。

大野　そうです。

奥島　元の水稲荷の高田富士（現九号館）の周りに回廊式に作ったらいいのではないかという……。

大野　そこまでは考えなかったんです。

奥島　この案は、本部の戸川先生から図書館で研究会を作れとの指示が出されて、図書館で検討したということですか。

大野　いいえ、本部で戸川先生が常任理事のときにチェアマンになられて、何回か研究会を開いて、それきりになっちゃった。

任理事で、チェアマンになって、なんだかんだとさんざん言わせておいて、それきりになっちゃったんです。大学当局は初めからぜんぜん本気で受け止めてくれなかった。なあんだ、研究しただけかということで、ちょっと寂しい気持がしましたけれど、そのときに出したものは図書館に記録があるはずです。みんな一緒になって考えて、よかれと思って出したけれども、戸川研究会に終わっちゃっ

ゃったんです。あとで「なんだ、研究会をさせておいて、やらないという腹だな」ということはすぐわかりまして、いやになっちゃった。(笑)

洞　大野先生が話された増改築案を本部に上申したのは昭和三十六年のことで、先生は翌三十七年におこなわれた創立八十周年記念座談会で、その独創的構想をくわしく語っておられます。三十九年に早稲田大学全般の図書行政改善のための全学的委員会が設けられて、常任理事の戸川先生が委員長となり、大野先生の提出された図書館案をたたき台にして検討し、いちおう成案を得て答申したことがあります。戸川委員長は委員会の運営、答申書の作製に相当熱心だったようにみうけられましたが、部局に弱い本部にはこの答申を実施する熱意がなく、けっきょく聞きおくということになってしまいました。いま申した委員会では図書館の増改築もしくは新館建築は問題にならなかったと思います。

奥島　当時そういう研究会があった。それ以前の図書館の拡充みたいなことについては、お話をお聞きになったことはありませんでしょうか。

大野　そういう物的なことでなくて、むしろ人の問題を絶えず心配しました。つまり図書館の司書職と事務職の区別がはっきりしていないじゃないか。情報科学とか図書館学がたとえば教育学部とかどこかにあれば、図書館の優秀な人を助教授かなにかのかたちでどんどん出せばいいじゃないか。そんなことは夢のような話だったかもしれませんけれども、考えてはいて、機会あるごとに言ったんです。

大野実雄先生

つまり図書館人事をやる場合に、この人は事務系統の人だから、たとえば本部の庶務部長になるとかいう人は、事務系統からどんどん出せばいいんだ。だけど、この人は司書職として、たとえば教育学部助教授とかいうかたちで教授待遇にしちゃったらいいんじゃないか。そうすれば、よそへ逃げていく心配はないんで、引き止めることができる。そういう方針で図書館では人を作っていかないと、相当熟練した人が図書館を辞めて、よその大学や研究所へ行ってしまうというのは非常にマイナスになるんです。ですから、十年、二十年図書館でいろいろやったような方は、図書館学とかなんとかいうと不利かもしれないけれども、これからは情報科学でもいいし、各学部の一般教養科目に情報科学とか図書館学とか司書学とか書誌学とかいったようなものを置いて、図書館からプロフェッサーを出すというふうに持っていったらいいんじゃないか。教養科目に図書館学なんて各学部にぜんぜんないんですよね。

慶応には図書館学科があるから司書の藤川正信君なんかが出向いて、講義もやっていましたし、今は図書館情報大学学長になってます。東大では裏田武夫さんが教授になって、図書館で従事した方が東京大学教授になって、そういう道を歩きましたよね。だから、早稲田でもそこらは考えていってもいいんじゃないか。

図書館学といって古いんなら、情報科学とかなんとかいえばハイカラになるので、これからは情報というものが大切になるので、学術情報を握っているわけですからね。そんなふうにして、図書館人事のあり方を十分考えていただきたいというのは、私のお願いなんです。事務職系統と司書職系統を分けて、そして各学部に働きかけて図書館学とか書誌学とかいうのを置いてもらったらいいんじゃないか。

文学部には美学とか美術史という科目があるんです。これは絵を見たり、彫刻を見たりして、美の哲学をやるんでしょうけれども、複製やレプリカではなくて、実物に接することが大切なんです。先程お話があった「羅馬使節」のほか七十周年記念に描いてもらった諸大家の作品など、早稲田には相当量の名作があるのですから、美術館を作ってほしいのです。會津記念室のような美術室でもよいでしょう。坂崎先生も、前から必要性を力説しておられました。一般の学部だったら情報科学というようなものを置いて、もっと学生たちにいかにして本に親しむか、どういうふうにして読むか、どういう施設を利用したらいいかというようなことを教えないと、いくら図書館を持っていても、学生が入ってこなければどうにもならないんです。

だから、図書館に来た人を失望させないで、来た以上はみんな満足して帰らせるというような体制に持っていくにはどうしてもそういうふうに持っていかないといけないんじゃないか。私の夢です。難しいことだと思いますけれども、ぜひお考え願いたいと思っているんです。

加藤　図書館員のことについてですが、図書館は人と物と建物だといわれますね。このうち、人の面は非常に大きいと考えています。館員の育成が資料の充実にも影響してきますし、サービスの質に大きく拘ってきます。そんな意味で、在任中館員に本そのものに興味を持ち、できればひとつのテーマを追ってみることを奨励してきました。組織的ではなかったのですが、ある館員が特定のテーマを持っていることがわかると、それを伸ばすようにいたしましたし、地方誌や特殊文庫目録、早稲田の草創期の人たちの書誌など、特定の人が自主的に勉強してきたことを督励しました。

また館内に籠ってばかりいるのではなく、古書展に一緒に出かけたり、私の専門であります金石文採訪に有志の同行をつのり隅田川周辺を歩いていろいろ話をしました。これらも館員教育に多少なりとも寄与したのではないかと思っています。何かのきっかけで、一つのことに興味をもち、探求心をもってもらいたかったのです。

奥島　いま新しい図書館のハードのほ

うは決まりましたので、ソフトのほうでいちばん問題にしているのは、先ほどから出ている蔵書構成の点ですが、本当のところは、むしろそれよりも先生がおっしゃった人の問題ですね。この二点が私は今から図書館の中心課題だと絶えず言っておりまして、今後十分時間をかけて考えていかなければならないと思っています。

大野　市島先生のように教壇に立つことは夢にも考えないで、最後の最後まで図書館で終始された。ああいう生き方ですね。ぜひこれはご検討願いたいと思うんです。

平田　最近図書館に入る人はみんな司書の資格を持っているんでしょう。

奥島　いや、必ずしもそうじゃないんです。

平田　これからは資格を持っていないと……。

奥島　一長一短がありまして、私もまだよくつかんでいませんが、なかなか簡単に言えない問題がどうもありそうです。

大問研での議論など

奥島　ところで、そうしますと、それがきっかけで、そのあと昭年四十五年に大学紛争の中で大学問題研究会で「全学的関連における早稲田大学図書館の現状と改善の方向」というものが答申として出てきて、そこの中では図書行政のことがずいぶん出てきているわけですが、同時にその翌年四月に図書館には「新図書館設計計画委員会」が設置されています。

まず大問研での議論は、答申にはまとまっていますが、どういうふうな議論がなされ、また、図書館にその翌年設置された新図書館設計計画委員会ではどのような議論がなされたかというようなことについて、平田先生、少しお話しいただけませんでしょうか。

平田　私のときはやはりだんだん蔵書が増えていく、それの整理、保存、サービスの点、いろいろ考えていくと、どうも今の図書館では手狭であるということと、もう一つ全学を見渡すと、各学部の図書の整理の仕方、学生に対するサービスもかなり不備、不十分であるというようなことで、各学部の図書関係の設備・業務も整備充実しなければならない。どうも分散主義の傾向がかなり強く出ていまして、予算の面でもそういう傾向が強く出ている。かといって、全学的に中央図書館としてどういうふうに連携をもって統括していくかという制度、組織がなんにもないわけです。これは一つ検討しなければいかんだろうということでした。

それにしても今の中央図書館は極めて手狭だから、少なくともあまり見られない本は間引きして、多少遠隔の地でも保存書庫に保存する。そういうこともあった。

それから、将来を長くみれば、やはり適当なところに新しい図書館を作るべきじゃないかと、これは当時は夢みたいな話で、そのときに近くにというと、今の安部球場しかないじゃないかという話は出ていた。

同時に経費の面からいっても、金を食

座談会風景

っているバックナンバーの重複をできるだけ整理できないかということから、中央図書館長といっても権限がないから、総長であればなおいいけれど、教務担当の理事がトップで、あと学部長、大学院委員長、図書館長と事務局長は側面から協力して事務整備に当たる。そういう組織体制でやろうという話が出た。それが骨子なんです。

それは実現せずに終わってしまいましたけれど、そういう問題意識からです。その一つの問題点が新図書館に実現して、そこへつながってくるわけです。これは荻野先生もそうだし、亡くなった佐々木先生も原田先生もそうだし、おそらく大野先生もそういうお考えだったでしょう……。林図書館長の下で副館長をやった小松さんなんかつとにそれを……。だから、あの当時からだと四十年あまりたった。私が昭和四十四年になってやってからでも、二十年近くたっている。相当長い年月を要して、やっとここまで来た。

百年祭の行事としてこれを取り上げようとしたんだけれども、それは待てない。百年祭と別個に早めにやらなければいかんという話さえ出た。だけれども、百年祭に因んでやったほうが金の面でもいいだろうということで、これは濱田さんが図書館長のときに具体的に軌道に乗ってくるわけでしょう。高宮秀夫君が事務長をやっているあたりから少し具体化していく。

ぼくらは盛んに清水総長なんかに言って所沢に新しい学部なんかつくるより、まず先に図書館を作れと言った。(笑)それを古川さんは紳士なものですから、あまりぼくらみたいな荒っぽいことは言わなかったんだろうけれども、村井総長の時なんかも会うたびに図書館の整備充

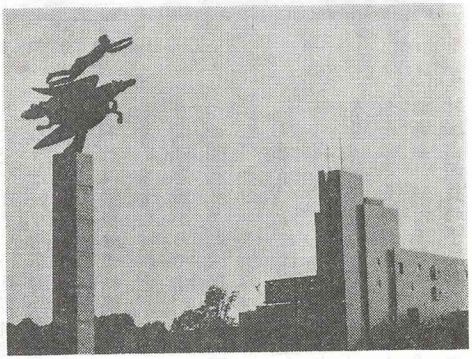
実を訴えた。

新館計画のスタート

奥島　また古川先生にその点をお聞きしますが、その前に大きく出た問題というのは、今の新中央図書館と、荻野先生が前の座談会で書いておられますけれども、保存図書館の問題、それから、大学図書行政の問題、この大きい三つで、いまハードの面で新中央図書館と保存図書館はだいたい解決したということなんですね。

しかし、大学図書行政の問題については、団交等でも絶えず出てきていて、これを一本化せよという問題が絶えず出ていますが、ただ早稲田の場合は学部の独立性が非常に強くてできない。それが、現実に学部図書室が狭隘で買った本を収容できないということから、今度は図書行政を一本化する方向で、分館構想というような考え方が百周年に出てきて、現在に至るわけです。

たとえば、所沢図書館は、図書館の分館という位置づけになっています。それから、本庄保存図書館も分館です。



所沢キャンパス

そこで、そういった話に至るのは、大きく言って百周年の事業との関係で出てくるわけですので、古川先生の時代にそういう問題が出てきます。つまり昭和五十二年に図書館では「新図書館建設計画小委員会」が発足し、五十三年一月には館内に「図書館長期計画小委員会」というかたちで、いわばハードとソフトと両方ともこのころに出てくるわけです。これは百周年事業計画との関連が非常に強いというふうに思われますけれども、そのあたりについて古川先生、どういうふうな議論が主としてなされたかというようなことについても、お話しいただけますか。

古川　本庄の問題ですね。最初はこれは必ずしも百周年とは直接かかわりはなかったんです。

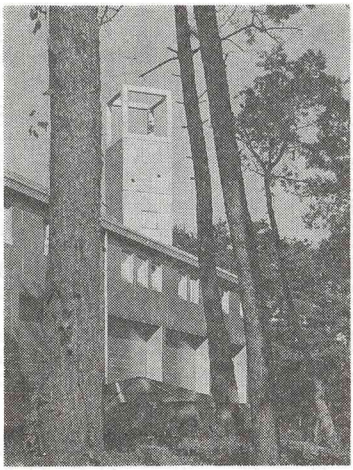
奥島　これはそのあと五十四年の六月に出ますね。

古川　ぼくも館長になったとき初めて知ったわけですけれども、とにかく書庫が満杯でどうにもならない。なぜもっと早くこの実情を認識しなかったのか。つまりぼくが教務にいたころに実情を認識していれば、もう少し打つ手があったんじゃないかということを後悔したわけです。もうああなってくると、別置以外に考えられないと、それが最初の印象だったわけです。

そのころはどことといったって近くに場

所はない。そうすると、遠いけれども本庄に持っていく以外に手はない。ただそれを館員に納得してもらうのにどのくらいかかりましたかね。「そんな遠いところは問題にならん」というのが、最初の反応だったから、二年以上かかったんじゃないでしょうか。それでもどうやら納得してもらったわけです。

その方向へ向かっているうちに百周年が出てきたんで、じゃあ、百周年の中でこれをまっ先にやってもらおうということで乗せてもらった。だから、先にできちゃったというかたちになるわけです。しかし、それが出来るまでも待っていられないということで、ご承知のようにワンビシ・アーカイブス（倉庫会社）にしばらく預けるというようなかたちもとらざるをえなかったということがあったわけです。



本庄保存図書館

それまで新中央図書館については、今の図書館内にいろいろ委員会を作って、長い時間をかけて検討したんですけれども、その場合にいちばん問題になるのは、新中央図書館という建物そのものではなくて、これがいわゆる学術情報センターというものと同一なのか、あるいは、情報センターというのは別であって、その中で図書館は一つのしかし中核的な機能を持つというかたちなのか。いずれにしても学術情報センターという考え方は一方にあるわけですから、そのかかわり合いをどういうふうに見るのか。

結局不即不離のかたちで、ある意味で図書館即学術情報センターということになると思うんですけれども、そこのところに相当の時間をかけて議論したと思います。

その前に、では、学術情報なるものはいったい何なのか。いわゆる活字資料だけではないわけで、学術情報と称するものの中には美術作品もあれば、考古学の発掘品もあれば、どこまで学術情報と考えるかという問題もあるので、あんまりそういう議論をするときりがないんですけれども、しかし、やっぱり最初は徹底的に議論したほうがいいと思いましたので、そういう議論を相当長い間かけてやっていたというような記憶があります。あのころはたしか金子さんがずっと小委員会に出ていたでしょう。

編集委員　いや途中からでした。記録係として出ていました。

奥島　そのへんに至る前の、本庄保存図書館が八十万冊の規模というのは、どういうことなのでしょうか。

古川　その当時は本館の蔵書が百五万冊ぐらいだったと思うんです。それでもあの状態でしょう、あそこの書庫は普通に入れると七十万冊がいいところで、四十万冊ぐらいすでに余っているんです。そうしますと、本当の目の子勘定で八十万冊あればしばらくはしのげるだろう。ただし将来増築可能にしておいてくれということでした。

奥島　もうそれも一杯なんですから。

古川　そのうちに各部局があふれてきて、それも預かることになっちゃったものだから、たちまちあふれちゃったわけです。最初考えた当時は部局のことは考えてなかったですから。

奥島　先生は館内を納得させる点で大変だったと思いますが、今度は逆にそこへ引っ越すというので館外を納得させるのは濱田先生のほうに回ってきて、（笑）この点について一言。

濱田　これはすでにワンビシに相当数別置されていて、私が引き継いだときにはすでに二十万冊ぐらいになっていたと思いました。各分類のナンバーの古いところを全部持っていっているというかたちでしたから、利用者からは絶えずいろいろ苦情が来ていたわけです。

そこで、ともかく本庄の保存図書館にかなりの部分を持っていくことができるし、ワンビシに預けてあるものをそちらへ持っていくこともできるだろう。しかし、いろいろ苦情がこの間に寄せられているわけだから、利用度が低いといっても、どういうものについて納得が得られるか。そのへんのところについての案をこしらえてみようということがずっと検討されていたと思うんです。

私が引き継いだときにちょうどその結論が出たところだったんです。四月から、しばらくの間、学内に対してこういうふうに別置計画がありますが、どうしても置いておかなければならない資料については、書庫内でしおりか何かを入れてくださいということだったと思います。もう、ちょっとうろ覚えになっていますけれども。

そのときに見込んでいたのが、調整分としてたぶん二万冊ぐらいは出てくるんじゃないだろうかと考えていた。ところが、やってみたところ、入れてくれるよりもなによりも、全部残せという話のほうが強くなりました。（笑）ともかくこの分類は全部残さなければわれわれは絶対承服できないんだという。

たとえばこれまで貸出統計をとっているうちで一回しか使っていない本だって、その分野の研究者にとっては絶対的に必要なものだ。そもそも利用度みたいなものではそれは計れないというわけです。

それから本庄というとはるか離れた山の奥みたいな感じがやっぱりありまして、別置をする、アネックスをどこかへつくるということについては、それはありうるだろうけれども、しかし、本庄は遠すぎるとか、そういう声がたくさん出てきまして、（笑）結局残さなければならない本は二十万冊ぐらいになった。そうすると、どうしようもないわけなんで

す。そのどれを抜いていいということができないわけです。二十万という数字になるといかんともしがたい。

それで、六月ぐらいでしたか、四月から統計を取ってみた結果を基にして、そこでもう一度別置のための委員会を開いて、どうしようかということで議論をしました。館内ではむしろそういうことであれば、思い切ってこの際洋書を全部別置してしまったらどうかという意見が出た。洋書別置というのはぼくは暴論に近いと思ったんです。しかし、考えてみると、洋書の利用は比較的貸出を長くすることができますし、一般学生の利用度は非常に少ないわけです。研究者の場合は、比較的、洋書のこの分野と限定できるわけですから、そういう意味では比較的検索もしやすいというふうなことで、いっそこれを別置したほうがいいのではないか。その中で特別にどうしても残しておかなければならないもの、それと、今後新収しようとするものについては置いておこう。

もう一つは本館のほうが狭隘になるにつれ、洋書を買うということも非常に難しくなっていたわけです。大量に本を入れることができないというふうな状況が起こりますと、各箇所の図書室のほうの予算が、中央図書館の予算に比較して相対的にどんどん大きくなっていきました。その傾向が相当続いていたと思うんです。そこで、新刊の洋書については各箇所の図書室のほうが買っていたわけです。そうなると、本館にあるのはどちらかというと古いもので、研究者にはわりと特定しうるものが残っている。

それではこの際仕方がない。これは非常手段として全部一括して移してしまおう。そうすると、混乱が少なくなります。そして、要求があれば必ず翌日には貸し出せるようにしよう。それに、もしとくにこれこれの本のここのページの部分を欲しいというふうに特定できる場合には、ファックスですぐに送れるようにしよう。そういうことを考えた。

保存図書館は当初倉庫として考えられていたわけですけれども、これを倉庫ではなく、閲覧設備も設ける。向こうへいらっしゃって一日調べてきたいという方には、自動車の便もちゃんと確保しますということで、ご利用くださいというやり方をとったんです。

しかし、そういう案を発表しましたら、これはものすごい勢いで学内から反対意見が出まして、大変なことでした。

平田　いまの話を聞いていると、問題点はちっとも進んでいない。われわれの時代もそういうことがあった。だけど、そういう問題はいままでもお互いに根本的にもう少し時間をかけて詰めなければいけなかったんです。各部で分担主義的にやれば、やる仕事というのはおのずから限定されてくるはずです。そこまで詰めないといけない話なんです。予算の面も無駄だし、場所的にも無駄がある。昔からその話は出ているんだけれども、ちっとも進歩していない。

濱田　中央図書館ができるということになってきますと、その場合図書の収蔵

本庄分館との定期便

能力は、当初百周年記念事業の基本計画に載っていたものでは、百五十万冊でしたね。それを思い切って収蔵能力を増やそう。そして、本庄に別置してしまった洋書については、開館時には全部いったん戻しますということにしたんです。その間の緊急避難的な措置として本庄にそういうかたちでもっていったのです。

これを納得していただけたかどうかよくわからないんだけれど、結局はそれ以外に方法がないだろうということで、それを実施したわけです。

現実には現在閲覧そのものについて、それほど苦情は出ていないわけでしょう。それから、利用者には毎日車を用意しているんですけれども、実際にこの車を利用された方はこの間何人ぐらいあったのかな。

奥島　ほとんどないに近いのです。

濱田　要するに近所にないと不安だということなんですね。（笑）しかし、ロシア語関係の文献なんかについては早稲田が国内の大学の中でいちばん持っているわけですし、しかもこれはある程度特定されていて、利用者も文学部関係の先生方が多いので、文学部においておくのがいい。そういうものについては残したわけです。そうしたいろんな配慮をしながらも、ともかく乱暴極まるそういうことをやりました。

平田　何かモデルになるような、参考になるようなものはなかったんですか。早稲田独自でやったんですか。見学とか意見を聞いてというモデルになるような……。

濱田　モデルはぜんぜんありません。

平田　しかし、アメリカなんかに行けば、参考になるのはいくらでもあるんですね。メインライブラリーのやるべきことは。ハーヴァードの法学部図書館はうちのメインライブラリーぐらいのものは持っているんです。メインライブラリーがいつもガランとしているのは不勉強でなくて、各学部の図書館でだいたい間に合う。メインライブラリーはここでできるものしかないから、いつも空いているんだという。おそらくなにか守備範囲を決めているんだよね。

奥島　決めていますけれども、要するにいま各学部の図書室はぜんぜんスペースがなくて、たとえば文学部の図書室などもあっちこっちに分散していますし、政経はいちばんどうにもならない状況になっています。

平田　一学部五千人も六千人もいるんだもの、当たり前だ。

奥島　分担収集をいまのところやりようがないんですね。

濱田　この中央図書館計画とを合わせたんですね。

平田　学部ごとにもう少し整備しなければいかんじゃないかな。

奥島　それはかなりやっておりまして、その点について方向性は出ています。

そこへ至るまでの話ですが、五十五年の十月にいよいよ「新中央図書館専門委員会」が設置されまして、これが結局空中分解することになりますが、ここでかなり議論がなされたわけです。これは古川先生が中心でしたので、そこでの議論はどういうことでしたか。「学術情報センターとはなんぞや」という議論で終わったと聞いておりますが、やはりそうですか。

古川　それをはっきりさせないと、話が進まないという……。

奥島　それで現在困っておりますのは、学術情報センターとはなんぞやということについて、一度も結論が出ないまま今日に至っている点です。新しい図書館は総合学術情報センターとよぶのか、中央図書館というのか、さっぱりはっきりしないものですから、図書館協議員会で館長見解を出しまして、いま整理しつつあるんです。新中央図書館が学術情報センターの中核的な部分になるということであって、図書館を学術情報センターという名称にするわけではないということだけは、理事会でも、現在のところほぼ了解されているのではないかと思います。

慶応大学が研究教育センターという名前を使ったために、情報センターというタームが、ちょっとはやりことばになったところがありますね。

古川　慶応の場合は中央図書館というのは建物の名称であって、組織としては情報センターだという……。

奥島　ですから、図書館長は学内的には研究教育センター長なんです。ところが、そんなことを名刺に横文字で書いたってどこにも通用しませんので、対外的には図書館長なんです。ですから、非常にややこしいことになっています。

外国の場合でもいわゆる本格的な図書館が学術情報センターみたいな名前を名のっているところはないわけです。あるとすれば、理科系のコンピュータ検索の本当の意味の情報センターがあるだけなので、私どもとしてはこの問題については図書館という名前で今後ともやっていきたい。

たとえばハーヴァードでは中央館がハーヴァード・ユニヴァーシティ・ライブラリーで、全体はハーヴァード・ユニヴァーシティ・ライブラリーズというかたちになっているわけなので、そういった感覚で全体をいまから考えていこうと思っています。

平田　慶応は……。

奥島　慶応は三田情報センター、日吉情報センターですか。

平田　上智は……。

奥島　図書館です。それで、図書館以

外の名前を使っているところは、慶応以外はどこにもありません。

平田　早稲田じゃ二通り使い分けをやるわけですか。

奥島　いや、早稲田は図書館という名称を使います。

古川　情報センターという名前はなくなっちゃうんですか。

奥島　それはソフトとして別個に考えようということです。

古川　問題は実質的には図書館がそれの中核になる。その情報の内容なんです。どこまでを情報の中に入れるかということなんです。

奥島　私どもは基本的に図書館情報は図書情報中心でよいと思うんです。それにどういう情報を加えて総合学術情報とするか、これが今後の問題だと思います。その場合には早稲田大学の学術研究の全情報ということにならざるをえません。

古川　つまり図書館に行けば、図書以外の情報もわかるということになっていれば、それでいい。問題は図書以外の情報をどこまで中身を盛り込むか。すぐ考えられるのは博物資料的なものですけれどもね。

極論しますと、たとえば理工学部資源工学科へ行くと、いろんな鉱物の標本があるでしょう。ああいうものまで入れるのか、入れないのかという問題になってきちゃう。実際言うと、こういう鉱物はどういうものなんだろうなというものを知りたいということは、当然出てくるんです。その場合に理工学部に行けばあるのか。

つまりあらゆる学術情報が一カ所でわかるようにするという考え方はわかるんだけれども、何を掲げるかということなんです。

奥島　それは主としてこれからのネットワークの組み方の問題ですね。

そこで、いよいよ百審（百周年総合計画審議会）の問題になってきて、百審が二年八カ月かけて答申を出した。そして、中央館と分館構想を出しました。この問題は本日詳しく議論していただくことができませんので、中央館と分館の関係についてのみ濱田先生のほうからお話をいただけますか。

濱田　これはいま申し上げたように、別置をせざるをえないという状況があって、その中で利用者から猛烈なクレームがあった。それを無視することはできない、しかも他方で、箇所の図書室も満杯になってきている。この間どうやらしのいでこられたのは、まだ各箇所のほうに少し余裕があったからです。それがもう一杯になってきたものですから、どうにも仕方がなくなったという状況が現われてきました。

そこで、今の二号館（図書館）から新しい図書館をつくったときに収蔵図書はそちらへ全部移行してしまう。そちらへ移行してしまったあとの二号館、今の図書館ですけれども、これをどう使うかということをまず最初に考えていたわけです。いろんな考え方もありうるわけですけれども、本部キャンパス内にはだいた

い社会科学系の学部が入っているわけですから、そこにある教員図書室の研究図書については、いったん全部ここに集めていただいてはどうだろうか。つまり今の図書館の書庫部分に集めていただくわけです。

そして、最初から整理はできませんから、各教員図書室にあるものをともかくそこへ出していただく。そうやって一つところのシェルフに並べますと、ダブっているんじゃないかというものも出てくるでしょうし、この分野がとくに弱いじゃないかという話も出てくるだろう。そうすると、その段階から社会科学系の分館が自然にかたちづくられていくことになるのじゃないだろうかということを考えたわけです。

それから、文学部キャンパスについてはやはりちょっと遠いわけで、あの学生読書室はかなりレベルが高くて、修士課程ぐらいの院生がこれをかなり使っていると思いますし、学部生の卒業論文なんかもだいたいあそこの図書でやっているんじゃないかと思われるくらいなんです。そういうことを考えていきますと、ある程度レベルの高い学生読書室と教員図書室とを統合したものを文学部の箇所のほうで考えていただいて、戸山分館というものをつくってはどうかと考えたわけです。

それから、理工学部については、いまもすでに一種独立した図書室なのですから、これを理工学分野主体の分館として位置づける。

ただ、情報データについては一カ所に集めていただくというふうに、そんなにすぐはできませんが、徐々に本館に形づくられるデータベースに蓄積していただく。そうやってどこからでも検索ができるようにしていきたい。

図書行政の問題はそのくらいのところからまずスタートする以外にないだろうというふうに考えたわけです。

ところが、所沢の人間科学部が中央図書館より先行してできることになりましたので、そうすると、所沢に先に図書室ができるわけです。所沢の場合にはキャンパスは人間科学部と人間総合研究センターと、将来はたぶん大学院ができるだろうと思います。そういういくつもの性格の違うものが出てくるわけですが、事務所も一つにしていますし、図書室についても全部一つにしておこう。そして、教員図書、学習図書、そういうものも全部一つにして、まとまった一つの分館をつくっていただく。

それが一つのモデルケースになるんではないだろうかと、考えているわけです。現在所沢図書館での収書や整理については本館とラインをつなぎ、これを使ってやっている。そういうかたちでこちらにもデータがきちんと蓄積されていく。そういうふうなことで所沢の分館構想がパイロットプランになるのじゃないかと思います。ここでの経験を積み重ねながら、全学的な分館構想を練り上げていってはどうだろうか。情報ネットワークで緊密に結ばれた中央図書館と分館というふうに考える。

各箇所のたとえば研究所なんかにはすぐそばに置いておかなければならないという図書が必ずあるはずなので、そういうものについてはもちろんそこに置いていただいて結構です。ある段階にきて、その研究が終わったとかいうふうになってきたら、それは中央図書館のほうへ移していただくとか、あるいは、これはもう保存図書館に移して構わないという場合には、本庄のほうへ移していただくとか、そういうふうなことをやりながらやっていったらどうだろうか。

先ほどから出ていますように、早稲田の場合各箇所の独立性が非常に強いですから、それを進める中で難しいことがたくさん出るだろうという気がします。

とくに本部に置かれることになるだろう社会科学系を主体とした分館では、おそらく各箇所の選書権は相当な期間保証しておかないとまずいんじゃないかという気もしています。そうした選書体制の問題とも絡んでくる。この組織体制をどのようにしていくかということについては実は私の任期中には結論が出せなくて、私のほうではハードのプランをともかくつくっていく。そこまでをなんとかやって、あとは奥島館長に引き継いだというかたちになっているわけです。

奥島　この問題については、『ふみくら』の十二号をお手元に届けてありますが、ここに「館長メモ」というかたちで、「新館建設計画、その後の分館構想」と題して掲載してありますので、これを援用させていただくに止めます。

新中央図書館に求められるもの

奥島　さて、新しい図書館になりますが、単に規模が大きいというだけではなくて、内容的にも充実したものにし、しかも早稲田の図書館らしい特色を出していきたいという想いを、私どもは、コーポレート・アイデンティティの考えを真似て、ワセダユニヴァーシティ・ライブラリー・アイデンティティ、WLIと称しています。このWLIをどういうふうにして構築していくかは非常に難しい問題で、一つには伝統の継承、もう一つには、それを踏まえて、新しい世紀へ向けての創造が必要です。旧き良き伝統の承継は、創造への一番たしかなスプリング・ボードですから。

そこで、先生方に最後に一言ずつお願いしたいと思いますのは、早稲田の図書館の良き伝統とは、一言で言えばこういうものなんだ、そして、今後はこういうことを期待したい、という二点についてお言葉をいただければと思います。

大野　いい考えもありませんけれども、図書館でやらなくてもいいものを、よそへ出してしまえという考え方を持っている。そのいい例が美術品です。早稲田の図書館には読んで楽しむ美術書が山ほどありますが、見て考える絵画・彫刻のすばらしいコレクションがあるんです。日本の洋画壇、日本画壇のそうそうたる人たちが描いた絵がかなりあるわけです。印刷物でなくオリジナルがあるわけです。しかし、目録もないし、所在も所管箇所もばらばらでしょう。先にも申しましたがそういうものは、美術館をこ

しらえて移したほうがいいんじゃないか、美術館が仰々しければ、美術室でもよい。第一持っていれば、保管の責任をとらなければいけないでしょう。単に物品として扱うのではなく、大事にしていかなければいけないので、学芸員にやってもらわなければならない仕事だと思うんです。図書館に学芸員が居てくれたら相当肩の荷がかるくなるんじゃないかと、私はかねがねそう思っていました。

加藤　それに関連したことですが、私も大野先生と同じ意見です。活字本や版本は、もちろん図書館が主体となって扱う学術資料です。これに対して、非図書資料と申しますか、たとえば今大野先生がいわれた絵画もそうですね、さらに書幅、拓本、彫刻、器物の類も図書館が持っていますし、全学的にみれば各箇所でバラバラで保管されています。これら資料の整理方法と取扱の仕方は、図書とは違うことはお分りのことだと思います。総じていえば、図書資料とは見る目が違うということです。

これらの美術、博物資料は、大野先生のいわれるように、図書館の司書でなく、学芸員の扱う範疇のものと思うのです。総合学術情報センターの構想の中には、非図書資料も学術情報としてその中に入っているとのことですが、今のように、図書館の中で何もかもゴッタに扱うのでなく、矢張り夫々の資料に通じた係員が事に当たるのが重要でないでしょうか。市島先生の収集された拓本類や、江戸の書誌学者狩谷液斎所蔵の一枚物の資料が図書の間に混って利用できない状況ということですが、これも物を分けて取扱うことで解決できるのではないでしょうか。

私の持っている拓本類もいずれは、早稲田に保管をお願いしたいと思っています。會津八一先生の中国の拓本、これは東洋美術陳列室にありますが、日本の拓本として私の今持っているものをこれに加えることで、東洋金石文研究資料の充実を、いささか援けることができるでありましょう。これら美術の系統は市島先生から會津先生に伝わり、そして、私を含めて早稲田に伝わった一つの学問の系統でもありますので、それらの整理と保管には是非意を用いて頂きたいと思います。

奥島　この点については、會津記念東洋美術陳列室を中心として、美術・絵画部門、考古資料部門、民俗資料部門等々をもつ「博物館」の構想を「早稲田フォーラム」(四六号七六頁以下)に書いていますので、どうぞご覧下さい。

平田　早稲田というのは自由闊達な特徴があるんだから、各学部、研究所それぞればらばらにやるのはいいけれど、一にして多というその一のところを中央図書館がきちんと締める。その一例は天下に訴えるものを持つ、既存のものを生かしてもいいし、早稲田の図書館というとメインライブラリーは特色がある。各学部はきちんと統制してどうとかいうのは難しいから、独立してやるにしても、まとまりがあるような話し合いはして、できるだけ無駄を省いて、多にして一にしたというような特色を、早稲田の図書行政は持っていくように、本部と図書館の

幹部と時間をかけて十分討議する意気込みでやってもらいたい。

一は中央図書館がやるんだ。そこがどういう特色を持つべきかと、天下に問うてみて、なにかしらこれから百年に向かって、アイデンティティを……。具体的にどうすればいいということはこれからだけれど、そういうなにかをやっていかないと、ほかの大学との付き合いも結構だけれど、ここまで早稲田が伸びてきたんだから、各学部それぞれでいいけれども、その中になにかしらできるだけ無駄を省いて、お互いに話し合ってやっていくようなまとまりのある図書行政を期待したいと思います。

荻野　私は現在あるところで仕事をしているんです。ある人が蒐集したものを整理しているんですけれど、それに手をつけてみて、だいたい五年かかっています。たとえば内閣文庫はたくさん貴重なものをもっています。あるいは、京都大学にしてもそうですが、そこに何があるのかわからないんです。それと同じように早稲田大学の図書館も中身は何があるのかわからない。思いがけない貴重なものが資料の間にかくれて探し損なってしまう。これはやっぱり時はかかるだろうけれども、一ぺん総ざらいしてみて、何があるかぐらいは知らせてほしいですね。

いまはたとえばAという研究者が内閣文庫を利用するときは、自分の必要なものだけを見にくるんです。それに関連したものがあるかないかは知らない。というか調べられない。もちろん館員もよく知らない。こんなことで学術の研究がうまくいくのだろうかと、そういう疑問を持ちました。

これは早稲田大学の図書館はもちろん、大きく考えて、日本中の図書館が考えなくてはならない問題だろうと思うんです。私は痛切に近ごろそれを感じています。

奥島　おっしゃるとおり早稲田大学の図書館は意外性に富んでいるというふうにいわれていますね。

荻野　そうです。何があるかわからない。しかも意外なものが貴重なんです。たとえば写本があるでしょう。一般の人は古い写本を尊いと思い、新しい写本はそう尊くないと思う。ところが、新しい写本の中に古いものの写しがある。だから、ただ古いからどうの、新しいからどうのというわけにはいかないんです。そのへんのところをご参考までに。

奥島　これから開館に向けて、館蔵資料三百点ぐらいのものにかなり詳しい説明をつけた早大図書館貴重書図録を作ると同時に、将来的には、分野別とか、時代別とか、テーマ別とか、縦横にいろんな図録や、解説書を本格的に作っていきたい。その前提としては、先生がおっしゃったように、まず館蔵資料を徹底的に調査・研究する必要があります。

荻野　これにはさっき館長がおっしゃったように、やっぱり中の方の待遇ですよ。熱心に研究していただくような体制をつくっていかなくてはいけない。今は中にいらっしゃる方はみんな犠牲です。教員と図書館員は差があります。教員が

なにか偉いようで、図書館員がそれに隷属している。これではだめなんです。情報ということになれば、図書館員のほうが上位にいなくてはできないことです。そのへんもどうぞお考えいただきたい。

古川　早稲田の図書館の特色といわれてもなにも申し上げることはないんです。直接の問題と若干ずれるかもしれませんけれど、図書行政の一本化ということが長い間いわれてきていて、それがいっこう実現の方向にいかないということの最大の理由は、ぼくもいろんな委員会に出ていましたからわかるんですが、図書行政の一本化即収書の統制というふうにみんな理解しちゃうわけです。そうなったら一本化はできっこない。

いま予算の上では六割四割で、六割は箇所が持っているという状況で、各箇所の収書というのはもちろんそれぞれの権限でやっているわけですから、その状態はそれでいい。ただ重複の問題は絶えず言われるんですけれども、たとえば中央に委員会を作って、各箇所から代表が出てきて、これはやめたらどうかと、そんな議論をしたって絶対まとまりっこない。

それより、いま各箇所に出向の司書がでているわけで、ある箇所で買いたいというものが、あそこの学部にいけばありますよという司書同士のインフォーマルな話し合いで、それじゃ、買うのやめておこうということになっているケースがちょいちょいあるんです。現在のようなインフォーマルなかたちのほうがむしろ調整はしやすい。学部を背負って出てきた委員会では絶対なにもできない。だから、今のかたちのほうがずっといいんじゃないかという気はしますね。

それから、よその図書館の例を見ていますと、中央館に設けられた選定委員会みたいなものに各学部から代表が出てきて、そこで収書をきめているんです。そうしますと、図書館員は何をするかというと、買った本の整理という事務だけなんです。

うちの場合には館長がとにかく図書購入の決定権を持っている。事実上はある段階までは現場の第一線の受け入れの人に任せている。あるところまでは課長に任せるという格好になっています。館の蔵書構成をいちばんよく知っているのは館員なんです。だから、ここが欠けているから、補わなければならないというのは、館員の判断がいちばん重要なんです。それによって補っていくという権限をある程度任されているということは、館員にとって非常に重要なことです。これを図書委員会を作って、そこで全部決定するというようなシステムは絶対にお取りにならないほうがいい。あくまで館長権限でやるべきだと思います。

最後になりますけれども、先ほど大野先生も言われましたが、司書の人の待遇、扱いは、ぼくもなんとか図書館の中に研究職のようなかたちでポストを作りたいと十年間ずっと考えていたんですけれども、現行の大学の職制にどうやって乗せるかというと、うまく乗らないんです。新しい制度を作るというのなら別で

すけれども。

そういう研究職みたいなものを作った場合に、そういう人は教員なのか職員なのかと、まずすぐそういうことが問題になる。あるいは、教員組合に入るのか、職員組合に入るのか。たちまちそれが問題になってくる。その場合、出講日をどうするか、研究日をどうするかと、さまざまな具体的な問題があって、研究職というのを皆さんに納得できるようなかたちの文書を作って、それを提案したいと思っていながら、十年間ついにできないでいたんです。これはぜひ考えていただきたい問題だと思います。

奥島　私も十年前に「早稲田フォーラム」（二五号二〇頁）で、東大のような助教授制度を提案したんですけれども、現実に話を進めてみますとなかなか難しい問題が多いようですね。

古川　大学基準協会というのがありますが、国公私立全部一本ですが、あれの図書館基準の改定を七、八年前にやったわけです。そのときぼくは起草小委員をやらされて、ずいぶんすったもんだやって、「司書の中でもとくに専門的な司書については、研究者、あるいは、それに準ずる待遇をすべきである」という文句をぼくは提案したんですけれども、国立の人に削られちゃった。だめなんですよね。そういうところに一本入れておくと、あとはやりやすいと思って、ずいぶん頑張ったんだけどね。

濱田　先生方がおっしゃったことに付け加えることはないわけですが、いま古川先生がおっしゃった現行の制度の中でもなんとかそういうかたちの処遇ができないかということを考えて、調査役制度を活用させていただいて、いま図書館に数人の調査役が誕生していると思います。ラインでない調査役です。しかし、これは一種の便法ですから、そういうかたちが取られるのをいつまでも永続的に固定的に考えるべきでないと思います。

いま大学の中で職員制度全体についての見直しをしようという動きがありますので、その中で司書職の問題、学芸職の問題、技術職の問題、そういう専門職的な性格を持った職制についてどうするかというのが、テーマの一つになっているようです。ですから、そのあたりがこれからいろいろ討議をされて、人事行政というかたちになっていくのか、あるいは、教務関係のものと関連してくるのかそのへんが問題ですけれども、少なくとも解決の糸口のところまでは来ていると言えるだろうと思います。ただそれがいつできるのかということになりますと、何とも言えません。しかし、そういうことは間違いなくあるわけで、現在図書館の中で働いている人たちが、どの人が司書職に当たる人で、どの人が事務職に当たる人なのかという一種の区分けをしていかなくてはならないだろう。となると、同じ職場に働いている人たちの中で、インフォーマルなかたちででき上がっている秩序といいますか、それとあまりに食い違いができるような状態が生れると、好ましくない。そういうことも配慮して移行措置としてはかなり慎重にや

らざるをえないだろう。だから、これはなかなか難しい問題だと思うんです。

もう一つは私が四年間新しい図書館の建設計画に携わらなくてはいけなかったわけですけれども、その段階でいちばん配慮したいと思って、実際に完全に実現できたかどうかわかりませんが実行したことがあります。従来どこの大学図書館もその図書館がつくられるに当たって、図書館員の意見が反映されるということはほとんどなかったのではないか。それに対して早稲田の新中央図書館建設については、五次にわたって館員によるワーキンググループ活動を行いました。これには私がおりましたときで二百人を超える図書館員が直接参加していて、その中で基本的なイメージを決め、基本的な構想をかたちづくり、それぞれの備品等についてもどういうふうにすればいちばんいいのかと、そういうことまでずっとやっていって、その中からハードに反映するとどうなるかというので、実はそのプランができていっているわけです。

こういうことが、これまで新館をつくろうとするときに行われた大学は一カ所もないと思っています。それが、少なくともここではやれました。この活動の中で、私は図書館で働いている図書館員の皆さんで、新図書館をつくることに参加しているのだという意識を持ってほしい、この図書館は自分がつくった図書館だという気持をぜひ持ってほしいと思ったわけです。

これからは組織、内部のソフトの問題に移っていくわけですけれども、その検討の過程でもこの四年間の経験は生かされるだろうと思いますし、ぜひ生かしてほしいという気がしているわけです。この間、図書館員の主体性が許される限りの中で確保されてきたと思っています。それを続けてほしいと考えているわけです。

洞　老ライブラリアンとして私もひとこと。私とて、いつX年を迎えるかわかりませんので、古巣の新しくよみがえった美しい姿を仰ぐ日の一日も早からんことを熱願していることは申すまでもありません。しかし、私は新しい中央図書館をつくるには、その前提として、混乱をきわめている大学全体の図書行政、これは日本一わるい、ということは世界一わるいということでしょうが、その根本的改革案をまとめて、いつでも実施に移せるような手だてを講じておくのが、先決要件であり、新建築と、内部機構改革の構想は、この上に立ってのことで、そのためには、建築が多少おくれても止むをえないと、このように考えておりました。

中央図書館としては、部局図書室のあり方、その統合をふくめての、新分館制の構想をもっておられるようですが、私には、それがしかとはわかりかねます。しかし、今の段階では、それはまだあくまで一つの案にすぎないように思われます。早稲田大学の場合、図書行政の根本的改革が非常に困難な仕事であることは、私にもわからぬではありません。慶応大学のまねをすることが無理だろうくらいのことは心得ております。それにしても、わが大学

が新図書館の建築という絶好の機会を迎えたのに、それに便乗して、やれなかったものか。いくたびか企図しながら挫折に挫折をかさね、永年の懸案であった全学図書行政の根本的改革を実現できなかったことはなはだ残念な次第と思いますがこう言っては、現実を知らぬ老ぼれのたわごととられましょうか。

だが、いまからでもおそくはないようにも思います。中央図書館としては新館への移行という大事業をかかえている現状ではありますが、なんといっても全学図書館行政の中心は中央図書館なのですから、館長にはその責任において、部局の意向をとりまとめ、新館開きまでに半世紀先を見越した新分館案の構想を実施に移すよう、さらなるご努力をねがって止みません。

もうひとこと、古い図書館員として、自責の念をこめ、セントラリゼーションの問題についてひとこと申しておきたいと思います。大塚芳忠事務主任の努力によって、昭和二十四年六月に制定された「早稲田大学図書館管理規程」には、早稲田大学図書はすべて図書館に備える早稲田大学図書原簿に登録し、かつ早稲田大学図書印を押捺すること、図書館長は早稲田大学図書の総合目録を調整することと、セントラリゼーションの根本がうたわれていました。ところが、これがいつのまにか「早稲田大学図書館等図書管理規程」と改称されていたばかりか、昭和五十九年二月十五日といえば、ごく最近のことですが、この日をもって実施するといって、「図書管理規程」が制定され、図書の管理に関する事項の主管箇所は施設管理部となり、大学の図書は全部同管理部の図書受入簿に登録することになりました。同規程には「早稲田大学図書館管理規程の定める各条項がこの規定に矛盾または抵触するときは、この規程を適用する」という、はなはだあいまいな条項が盛られているのです。これは当局が図書管理の一般方式に関する知識に乏しかったからの改悪でしょうが、図書館としても一歩一歩後退していった事実はいなめないと思います。

私ども在館時代に、昭和二十四年の規程に規定されている図書館備付けの全学図書原簿の作製に便利な、複式図書購入簿（受入簿兼用）の様式を昭和三十六・七年頃に考案し、これは全部局で使用されました。この複式簿の一部を会計課から図書館に回してもらい、さらに部局にとどめる二部のうち一部に整理ずみにしたがい、請求記号・番号を記入したものを図書館に送付してもらえば、全学図書の完全な原簿が労せずしてできあがり、購入図書の整理状況も把握できるうまい仕組みだったのですが、私たちはそれを実施に移す努力を怠ってしまいました。

また、大野先生のご努力で、部局司書派遣が実現したことから、全学図書館総合目録を編成することも可能になりましたが、私などの在任中はそこまで手がおよばず、その後、着手に踏みきったのですが、この大切な事業もいつのまにか廃止されてしまった模様です。総合目録作製を規程でうたいあげた私ども老館員としては、納得のいかない責任放棄だと思わないわけにはい

きません。全学図書原簿の問題はとにかく、総合図書目録の編成は、中央図書館として避けてとおれない道だと思いますが、いかがでしょうか。これはコンピュータをつかう新しいシステムでやるから、ご安心をと申されるかもしれません。そうでしたらご勘弁を申したいところですが、入力には人手を要し、本館の旧蔵書だけでもたいへんなのに、部局図書までオンラインにのせることなど、いったいいつになったら実施できるのでしょうか。大げさにいえば、百年河清を待つ思いです。妄言多謝。

奥島　いま図書館史を出す準備をしていますけれども、この作業は古川先生の時代からずっと続いているわけですが、本日の歴代図書館長座談会に臨むに当たりまして、その年誌の案を二・三回読み返しまして、また、いろいろな関連資料ものぞかせていただきましたうえで、私が改めて思いましたことは、とにかく創立当初から明治の末期にいたる図書収集へのすさまじいばかりの努力は、早稲田大学図書館が素晴らしい館員に恵まれたことを物語っているということです。ほんとうに大変な努力であり、頭の下がる思いです。

その後いろんな館長が出られて、それぞれそのキャラクターを反映したかたちの図書館づくりに励まれてきて、そして、今日では日本で有数の大図書館に成長してきたわけです。

したがって、今日のお話は主としてそういうところでの先生方のご苦労なさったお話をお聞きするという予定で、お話を伺っておりましたけれども、十分お話を引き出すだけの時間的な余裕も能力もなくて、その点少し心残りがいたします。しかしそれでも、早稲田大学図書館が現在を築きあげてきた過程を、本日のお話の中からある程度知ることができただけではなしに、またその中から将来にわたって考えて行かなければならない問題点を幾つもご指摘いただき、図書館のもつ問題状況につき、認識を新たにいたしました。

これまでの歴史を踏まえて、その歴史の中の良き伝統をできるだけ多く、新中央図書館に引き継いで、生かして行くよう努力をし、また、最後にお話が集中しました人事の問題についても、それに応えられるような図書館の体制づくりと館員のレベルアップを考えて、先生方のご期待にそえるような新しい図書館を築いて行きたいと思いますので、今後とも、わが図書館の精神的なスポンサーとしてご支援いただきますようお願い申し上げます。

なお、誌上参加の洞先生のご質問については、ここでお答えする紙面の余裕がありませんが、大旨、図書行政の一元化ないし分館構想と関連しておりますので、後日そのプランをお示しすることによって、疑念をはらさせて頂きます。その他、きわめて技術的なご指摘も見受けられますが、その点は十分踏まえた上で決定した問題であるとのみ申し添えておくことにいたします。本日は、長時間まことにありがとうございました。

（誌上参加）

林癸未夫先生のこと

小松芳喬

僕が図書館のお手伝いをしたのは昭和二十年三月から二年間で、平田名誉教授の発言にありますように、大学の常務理事にその前年ご就任になりました林館長から、中野総長のご病勢が一進一退で当分の間総長代行の事務量減少の見込みが立たず、せめて図書館だけでも荷を軽くしたいので、副館長を引受けて欲しいと

小松芳喬先生

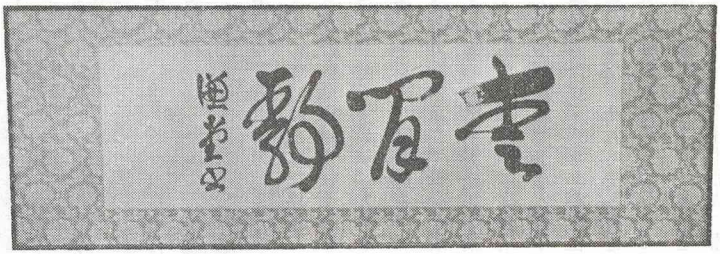
のお話がありました。その時、副館長の制度は今まで活用されなかったと承ったものですから、先例はなかったものとのみ早呑み込みしていましたところ、平田君の指摘に接しましたので、衆知を集めて調べてもらいました。その結果、大正二年の大学の記念出版物に、「現在市島館長は明治四十四年九月より早稲田大学理事の一人として専ら学校の経営に当り、図書館長は兼務と為りしが故、早稲田大学教授山崎直三氏図書館副長として館務を視ることと為りたり」との記載があり、大学内部の記録や『春城日誌』その他によって、旧幕臣の名家の嫡男で三十歳の新進学徒の図書館副長起用が確認できました。もっとも大正元年九月二十五日の維持員会に報告されたのは、「副長」ではなく「副館長」の嘱任で、少なくともその当時の正式の名称は「副長」とも「副館長」とも一概に断定できません。山崎教授は明治三十八年東京帝国大学文科哲学科卒業で、四十年以降早稲田の留学生として四十三年までパリ大学に学び学位を得て帰朝後、政経・文・商の各科で社会学・文明史・フランス語を大正七年九月まで担任され、東京銀行集会所書記長に転出後、日本大学教授に就任、五十一歳で生涯を終えた方ですが、大正三年大隈内閣誕生の際、総理大臣秘書官に任命されていますから、その時点では図書館副館長兼務が解かれたものと推定されます。

さて僕自身が図書館に親しみ始めたのは大正十四年秋に現図書館が落成してからで、その年の春第一高等学院から政治経済学部に進学していましたが、何となく暗い感じの旧図書館にはどうも足が向きませんでした。現図書館の建築は、大正四年の大正天皇御即位大典記念事業の一環ですが、われわれ学生の頭脳の中では、全在学生挙って拠金した大隈講堂建

設を主目的とする故総長記念事業と混同してしまい、新図書館の落成にも直接貢献していると錯覚して、大いに胸を張って新図書館に度々足を運び、晴天ならば屋上に登って、その一隅の壁面に記された竣工年の1925という数字を背景に級友と写真を撮りあったりしたものでした。それから二十年、一方ならぬ恩恵を蒙った図書館の運営に協力せよとの林先生のお話ですので、はなはだ感激したのは申すまでもありません。もっとも、終戦の半年前のことですから、大学本来の機能の麻痺とともに、図書館もすでに正常の活動は不可能となり、戦禍を最小限度に止める方策の立案・実施が吃緊の課題でした。しかも、図書館には宮川貞二主事（故人）や洞富雄博士など多年に亘り館務に精通したヴェテランが健在でしたから、僕は本部、それも専ら林館長とのパイプ役を務めるだけで事足りて、図書館学の図の字も知らなくても何とか糊塗できたのでした。在任中最大の事件は、申すまでもなく、二十年五月二十五日の大空襲でしたが、僕は愛知県豊川に専門部政治経済科の勤労動員の監督として派遣されていましたので、図書館に投下された何発もの焼夷弾を自力で消し止めたという、大学史上特筆すべき館員諸君の殊勲を残念ながら目撃できませんでした。終戦を迎えてからは、図書館も本来の機能回復に全力を傾けはしましたものの、物資の極端な欠乏に禍されて歩みは遅々たらざるをえません。校舎にせよ、教職員・学生の住宅にせよ、戦禍で烏有に帰したものが多大に上り、捗々しい復旧が困難である事態に鑑みて、図書館も従来の慣例に拘ることなく、できる限り開放して大学関係者の便宜を図るよう努めたつもりですが、聖域の俗化は怪しからぬとの声が一部から聞こえたのも事実でした。いずれにしても僕の任期は、大学にとっても図書館にとっても非常時で、何とか大過なく全うできたのは、林先生始め全館員のご支援の賜に他ならず、付け加えるべき何もありません。

ただ、速記を拝見した限りでは、愛弟子平田君による若干の回想以外には、林館長について語られるところが少なすぎるように感じました。先生の館長在任期間は二十三年四か月で、市島館長の十五年を遥かに上まわり、恐らく将来もこれを凌駕する記録は出ないでしょう。しかも、図書館の近代化に果した林先生の功績は喋々するまでもありません。ところが、昭和二十二年という紙の逼迫期に卒去されたことでもあり、活字になった先生の想い出は寥々たるものです。社会政策学へのご貢献については、幸に三十年余り前に平田君が纏められましたので追加の必要はありませんが、先生の全貌を尽くすにはご専門の業績だけでは不十分です。そこで、折角の機会ですから、僕の眼に映じた先生の俤の一端を以下にお伝えすることをお許しいただきたいと考えた次第です。

先生の謦咳に接した最初は学部二年の工業経済の教室で、三年でも社会政策のご教授を受けましたが、定義また定義の大変几帳面な学風で、法学部ご出身なの



小寺謙吉書「愛閑靜」

を頷かせるものでした。先生が「積極」を「シャッキョク」と仰るのを学生が笑ったところ、「セッキョク」と読むのは無学の証拠だと色をなされたのを覚えています。先生との個人的接触は僕が二木先生門下の大学院生になってからですが、同門の酒枝義旗先輩と二人で図書館長室の扉を敲いて、小寺文庫には高価な書物が重複していて勿体ないから、書物でなく現金で寄付して下さるようお願して戴けませんかと申出たところ、小寺さんはご自分で本を一冊一冊手にとって買うのが楽しみなのだから、そんな失礼なことを口にしたら、翌日から小寺文庫の寄贈は中止されると窘められたような、思い出しても顔を赤らめなければならない一幕を演じたこともありました。その前後ですが、文学青年の垢を早く落としたいと考えた僕が、文学関係の洋書を図書館に寄付したいのですがと申出ますと、先生は、僕も書斎に文学書を置くとついそちらに手が出るので、手元から遠ざけたい君の気持はわかると微笑まれました。林先生の名を世人に周知させたのは昭和九年の国家社会主義事件かもしれませんが、先生の本領は良い意味でのディレタントだったのではないでしょうか。「学問的な興味と思索の幅のひろさ」は平田君の論文にも強調されていますが、先生ご自身、「由来学者的天分の非薄なるにも拘らず、余り多くのものに興味をもち過ぎるのが、明かに私の欠点であると同時に又それが一個の人間としての私の持味であるのかも知れない」と昭和七年にお書きになっておいでです。社会科学以外に先生が一番大きな関心をおもちだったのは文学にちがいありません。徳田秋声が東京専門学校入学の際の保証人であり、在学中に坪内先生の推薦で商業誌に脚本を発表さえなさった先生が、文壇に身を投ぜられなかったのは、「全く私一家の貧乏」の故であると先生は告白しておいでになります。僕が知ってからも、映画鑑賞に熱をお上げになった時期もあり、ジャアク・フェデの『女だけの都』の魅力など、何十分お話しになって

も倦むことのない先生でした。『随筆天邪鬼』（昭和十四年）を繙けば、趣味の領域でもスポーツまでを含むあらゆる面で一家言をおもちのことが覗われますが、政治経済学部随一の美食家をもって任ぜられ、高田前総長には一目置くとしても、味が分かるのは精々塩沢学部長位なもので、単なる大食漢にすぎない高橋清吾教授などと同日に論じて貰いたくないと口にされたのなど、最早知る人も少ないでしょう。

選書がすべて館長により行なわれた時期の図書館では、先生のような包容力の大きな頭脳を館長に戴いたのは幸であったと思います。先生は昭和四年末から十八年まで、図書館で購入した政治・経済関係の洋書の紹介を、最初はご自身で、後には僕自身をも含めた若年者の筆により、学部の機関誌に連載なさいましたが、選書に際して偏向回避にご苦心の跡が歴然と滲み出ています。先生が日欧交通史料蒐集を図書館の特色にしようとお努めになったのは事実ですが、そのための支出を毎年の図書購入予算総額中で突出しない範囲に止めるのが、終始変わることのない鉄則でした。

国家社会主義事件の頃、先生は頑固な不眠にお悩みになり、何とか健康維持に努めて還暦を迎えたら、後は閑地について絵でも描きながら静かに余生を送りたいとお漏らしでした。先生の油絵は、僕も一枚頂戴して戦災で焼いてしまいましたが、「下手」と自認はなさりながら、世の中には先生以下に下手な人間が幾らでもいるとお考えだったのも事実です。

幸いにご還暦ごろには先生のご健康は好転したようにお見受けしましたが、戦争と田中総長の病歿とによって齎された学内最高首脳部の変動は、先生に悠々自適の夢の実現を沮み、還暦記念論文集『戦争と厚生』が先生に私淑していた故中村佐一名誉教授の奔走で刊行されてから数か月後には、キャンパスの三二パーセントのみならず、先生ご自身のお宅まで来襲したB29の餌食になってしまいました。しかも、終戦前後の二年足らずを総長代理として粉骨砕身なさいました先生には、教職追放の中野総長の影が濃く投ぜられましたため、第一回総長選挙に際して結局候補辞退をよぎなくされ、図書館長ご退任後もご趣味に没入の暇もなく、不治の病の侵すところとなり、六十四年のご生涯をいぶせき仮寓でお閉じになったのでした。なお、先生の還暦記念論文集の巻末には、先生がご還暦の年末にご自身ご執筆になった著作年表を含む「回顧と感想」が収められていることを、蛇足ながら付け加えておきます。

（編集委員）

馬場静子
岩佐圭子
金子宏二
鎌倉喜久恵
中西裕
雪嶋宏一